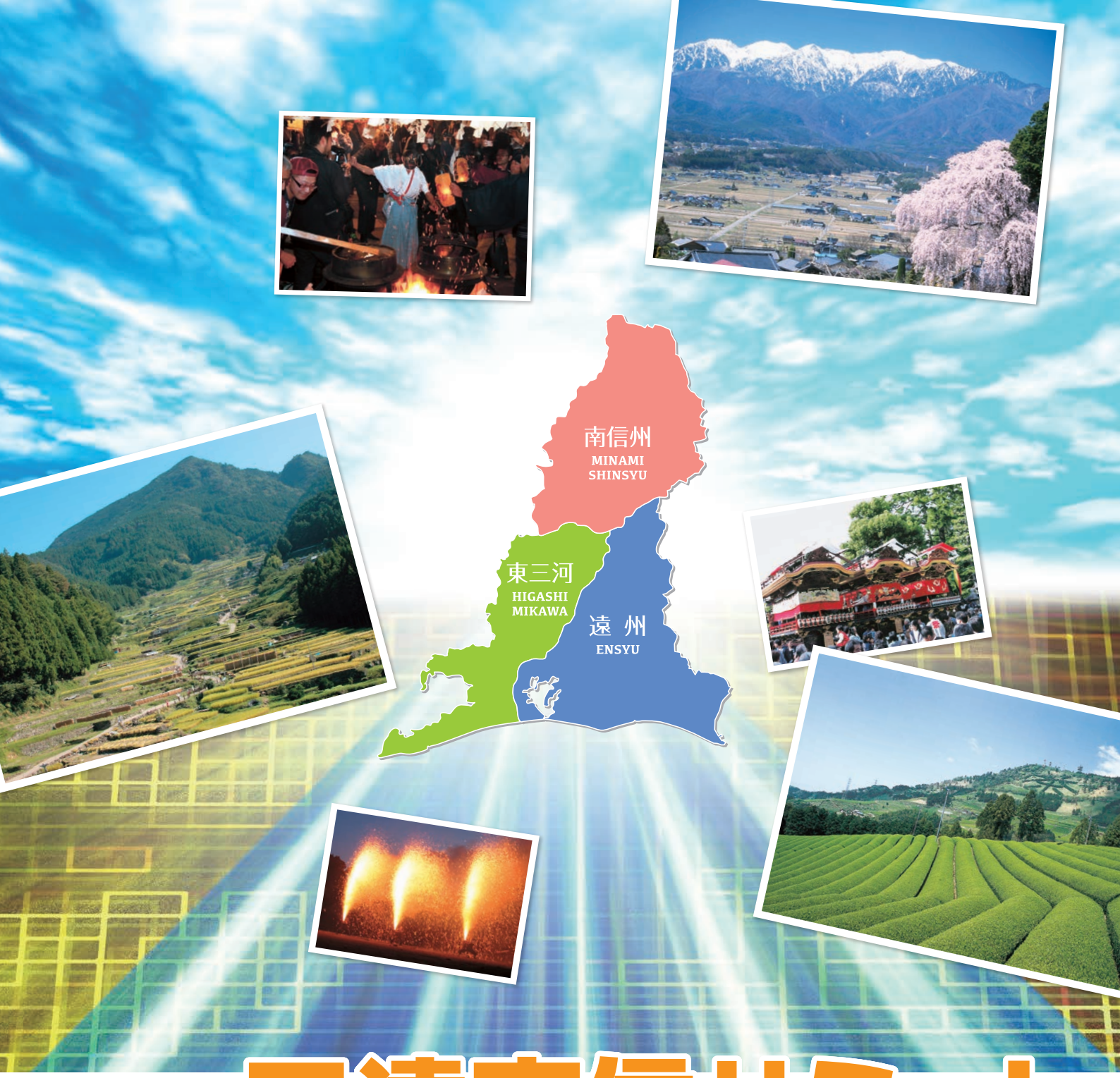

第24回 三遠南信サミット 2017 in 南信州

【テーマ】“みち”がはぐくむ三遠南信の未来

平成29年 2月15日(水)

会場 飯田文化会館 シルクホテル

事業報告書

目　　次

1　第 24 回 三遠南信サミット 2017 in 南信州　プログラム …… 2

2　全体会　主催者代表等あいさつ・来賓祝辞 …… 6

3　全体会　基調講演 …… 16

4　全体会　トークセッション…… 24

5　全体会　SENA報告…… 42

6　「道」分科会　要旨 …… 44

7　「技」分科会　要旨 …… 62

8　「風土」分科会　要旨 …… 76

9　「山・住」合同分科会　要旨 …… 94

10　報告会　要旨 …… 110

11　サミット宣言 …… 116

12　交流会 …… 118

13　三遠南信地域住民セッション　要旨 …… 120

1　第 24 回　三遠南信サミット 2017　in　南信州 プログラム

San-En-Nanshin Summit 2017 in Minamishinsyu

■　日　時　　平成 29 年 2 月 15 日（水）

■　会　場　　飯田文化会館（飯田市高羽町 5-5-1）
　　シルクホテル（飯田市錦町 1-10）

■　主　催　　三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）

■　共　催　　三遠南信地域経済開発協議会

■　後　援　　農林水産省、経済産業省、国土交通省、長野県、静岡県、愛知県

■　参加者　　約 600 名

■　日　程

1　全体会（13:00～15:30）［場所：飯田文化会館　ホール］

○あいさつ

・主催者代表あいさつ
　三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長　浜松市長　鈴木　康友

・開催地代表あいさつ
　三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長　飯田市長　牧野　光朗
　三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長　飯田商工会議所会頭　柴田　忠昭

・来賓祝辞

国土交通省中部地方整備局長	塚原　浩一　氏
農林水産省関東農政局次長	永嶋　善隆　氏
経済産業省関東経済産業局地域経済部長	三浦　裕幸　氏
長野県建設部長	奥村　康博　氏

○基調講演

演題：「地域創生のために我々は何をすべきか
　　－第２次国土形成計画の推進に向けて－」

講師：学校法人梅村学園常任理事・学術顧問　国土審議会会長　奥野　信宏　氏

○トークセッション

テーマ　　:「三遠南信のトップリーダーが語る地域の未来」

コーディネーター：

学校法人梅村学園常任理事･学術顧問　国土審議会会長　奥野　信宏　氏

登壇者　　：

愛知大学理事長・学長　川井　伸一　氏

豊橋技術科学大学　理事・副学長　大貝　彰　氏

学校法人高松学園理事長、飯田女子短期大学学長　高松　彰充　氏

豊橋商工会議所会頭　神野　吾郎

浜松商工会議所会頭　大須賀　正孝

飯田信用金庫　理事長　森山　和幸　氏

愛知・長野県境域開発協議会会長　天龍村長　永嶺　誠一

浜松市長　鈴木　康友

豊橋市長　佐原　光一

飯田市長　牧野　光朗

○SENA 報告　　「三遠南信広域連携研究会に関する報告」

「三遠南信地域連携ビジョンの評価検証にかかる中間報告」

2　分科会（16:00～17:45,16:15～18:00）

○「道」分科会［場所：シルクホテル　2 階　錦繍］

テーマ：「交通ネットワークを生かしたまちづくり」

コーディネーター：飯田市長　牧野　光朗

○「技」分科会［場所：シルクホテル　4 階　飛天］

テーマ：「ネットワーク強化による産業振興」

コーディネーター：公益財団法人南信州・飯田産業センター

飯田航空宇宙プロジェクトマネージャー　松島　信雄　氏

○「風土」分科会［場所：シルクホテル　3 階　瑞雲］

テーマ：「三遠南信地域の魅力を磨く～交流人口拡大への取組み～」

コーディネーター：特定非営利活動法人　しんきん南信州地域研究所

所長　林　郁夫　氏

○「山・住」合同分科会［場所：飯田文化会館　会館棟　会議室 1～4］

テーマ：「ひとをひきつける“みち”づくり」

コーディネーター：一般財団法人　野外教育研究財団理事長　羽場　睦美　氏

3　報告会（18:30～19:00）［場所：シルクホテル　4階　飛天］

・各分科会の報告　　：　各分科会コーディネーター

・サミット宣言　　：　飯田市長　牧野　光朗

・次回開催地域代表あいさつ　：　浜松市長　鈴木　康友

4　交流会（19:00～20:30）［場所：シルクホテル　2階　錦繍］

5　その他

・三遠南信地域住民セッション（10:00～12:40）

・三遠南信地域経済開発協議会役員会（10:30～12:30）

・三遠南信地域市町村議会議長協議会役員会（9:40～9:55）

・三遠南信地域市町村議会議長協議会総会（10:00～10:50）

・三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進議員協議会総会（11:00～11:50）

2 全体会　主催者代表等あいさつ・来賓祝辞

○主催者代表あいさつ

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長
浜松市長　鈴木　康友

第24回の三遠南信サミットin南信州へ多くの皆様に御参加を賜りまして、誠にありがとうございます。今回、飯田市での開催ということで、牧野飯田市長をはじめ、飯田市の関係者の皆様には大変御尽力をいただきました。厚く御礼を申し上げます。また本日、国土交通省中部地方整備局の塚原局長をはじめ、関係省庁の皆様、そして、各地方公共団体の皆様、それから、経済団体の皆様、大学、市民団体の皆様、本当に多くの関係者の皆様に御列席を賜りました。心から厚く御礼を申し上げます。

回を重ねて、24回目の三遠南信サミットでございますけれども、これまでも三遠南信自動車道を中心としたインフラの整備や地域の産業振興等、様々なテーマで議論を重ねてまいりました。現在進めております連携ビジョンは、来年度計画期間が終了するということで、今回一つの区切りを迎えます。

そこで、もう一度原点であり、この連携の基本でございます「みち」に視点を当てまして、「“みち”がはぐくむ三遠南信の未来」というテーマを設定させていただきました。基調講演は、国土審議会会長として御活躍の奥野信宏先生にお話をいただきまして、その後、トークセッション、あるいは分科会と、このサミットを進めてまいりたいと思っております。

さて、皆様御承知のとおり、日本はいよいよ人口が減っていくという人口減少時代に突入いたしました。あのセンセーショナルな増田レポートでは、これから多くの自治体が人口減少によって存続が困難になる消滅可能性都市などということを言われまして、リストが出た途端に大変大きな反響を呼びました。国は、これは大変だ、人口減少は地方に大きな影響を与えるということで、地方創生という大きな指針を打ち出し、総合戦略の策定を義務づけ、地方創生に乗り出したということだと思います。昨年はある意味、地方創生元年でございましたけれども、地方創生というのは、言ってみれば、それぞれの地域がそれぞれの地域の特性や資源を生かして、みずから知恵を出し、汗もかき、頑張りなさいということであり、これは厳しい現実を我々突きつけられたということだろうと思います。

もちろん、各自治体がそれぞれ頑張るということも必要ですけれども、一方で、今後は都市間の連携、あるいは地域の連携、これも大事であるということで、そうした連携の重要性についても、国は大きな方針を打ち出しているところでございます。連携中枢拠点都市構想もできましたし、あるいは様々な連携が今、行われています。この地域でも、南信州広域連合や東三河広域連合ができておりまして、ある意味、時代を先取りした地域間の連携が進んでいるわけでございます。

その中で、この日本の中でも例を見ない県境を越えた三遠南信地域の連携につきましては、最近、非常に注目が集まっておりまして、先日も経済同友会の皆様が三遠南信地域の連携についていろいろ勉強したいということで、

ヒアリングに来られたわけでございます。全国的にも、この県境を越えた連携に注目が集まっているということで、我々もこれからしっかりとこの連携を進めていかなければいけないと思います。ある意味、私どもがこれまで取り組んできた取り組みに時代が追いついてきたということかもしれないわけでございます。

先ほども申しましたように、現在のビジョンが来年度、計画期間の終了を迎えるということで、今、新しいビジョンの策定に取り組み始めております。愛知大学と共同研究でスタートしておりまして、しっかりとした連携ビジョンのもとに、この三遠南信広域連携を進めていきたいと考えていますので、また、皆様の御支援をお願い申し上げます。

こうして三遠南信地域の連携が注目を浴びる中、新たな加盟団体を迎えることになりました。上伊那地域の4市町村の、伊那市、辰野町、箕輪町、南箕輪村の4市町村並びに伊那商工会議所、伊那市商工会の皆様にも御加入いただくことになりました。これで総勢39の市町村、そして、51の商工会議所・商工会で構成されることとなります。全体では93団体による大変大きな連合体となります。新たなビジョン構築に向けて全力を挙げて取り組んでいくとともに、この三遠南信地域の連携を一層進化させていきたいと思っております。ぜひまた皆様の様々な形での御支援・御尽力をお願い申し上げます。

結びに当たりまして、第24回となりますこの三遠南信サミットが参加の皆様にとって有意義な会合となりますことを心から祈念申し上げまして、挨拶にかえさせていただきます。

本日は、誠におめでとうございました。ありがとうございました。

○開催地代表あいさつ

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長
飯田市長　牧野　光朗

第24回三遠南信サミット2017in南信州が、本日、私どものこの南信州・飯田におきまして、三遠南信圏域の議会の皆様方、行政の関係者、そしてNPOや住民の皆様方、国土交通省中部地方整備局の塚原局長様ほか、御来賓の方々、本当にこれだけの皆様方をお迎えして三遠南信サミットが盛大に開催できますこと、まずもって御礼申し上げます。また、域外からはるばるこの飯田の地まで来ていただきました皆様方に対し、心から歓迎の意を表させていただくところでございます。ようこそ、この飯田までお越しいただきました。

さて、先ほど三遠南信地域連携ビジョン推進会議の会長を務めていただいております浜松市の鈴木市長からもお話をいただいたところでありますが、今回は24回ということです。

三遠南信サミットは3市でそれぞれ開催させていただいており、浜松市、豊橋市、そして私ども飯田市でこのサミットをそれぞれ受け持たせていただいてきているわけでありますが、来年度からはいよいよ9巡目ということになります。

四半世紀にわたる我々のサミットの積み上げは、振り返ってみれば、大変大きなものをつくってきたと思うわけです。この間、この広域連携に対する考え方というものも深く浸透し、また、広がってきたと感じますし、それがこの三遠南信サミットのメンバーを増

やしていく原動力になってきていると思うわけです。今回も上伊那地域の北部の4市町村をお迎えする中で、私ども長野県南信州圏域からの参加者も上下伊那そろってということになりまして、私としても大変うれしく思っています。

そうした積み重ねの中で、私どもの地域におきましても、広域連合がどれだけ機能するかということを試行錯誤してきたところです。飯田下伊那地域におきましては、南信州広域連合の積み重ねをしながら、そして、東三河地域におきましては、東三河広域連合が立ち上がって、佐原広域連合長を中心に、今、非常に大きな飛躍を見せているという状況にあります。

三遠南信圏域といたしましては、いよいよ県境を越えて、さらに広域的な課題に対応することが必要になってきていると思うところでありまして、先ほど会長の浜松市長からもお話がありましたが、この流域圏における広域連携をさらに深く広く考えていくために、新たな三遠南信広域連合の枠組みをいよいよ本格的に検討し、そして、それを実現させることが必要になってきている、その姿勢を示していただいたと思っております。

このサミットにおきましては、以前から三遠南信広域連合に向けてのサミット宣言を出してまいりました。昨年度のサミット宣言では、こうしたことをしっかりと研究していく研究会も立ち上げてということを示してやってきたわけです。今回は、そうした研究会の成果も踏まえながら、広域連携の一つの枠組みとして、それこそ人口減少、少子化、高齢化という、非常に環境の変化の激しい右肩下がりの時代において、私どもの地域のポテンシャルを最大限に引き出していくために、産業振興、あるいは治山治水、防災、環境等、様々な広域的課題に対応していくための行政の枠組みをしっかりと形づくっていくことが必要になっていると思います。

また、サミット宣言におきましてそうした枠組みをしっかり目標として掲げながら、三遠南信サミットを積み重ねる中で、広域的な課題に対応していくために、まさに真の地方創生を実現していくために、私どもの三遠南信地域の底力を示していくことが必要な時期になっていると思うわけであります。

今回のサミットのテーマは、そうした三遠南信の原点に帰る形で「“みち”がはぐくむ三遠南信の未来」となっています。私たちの三遠南信地域の未来を確かなものとして実現していくために、本日、様々な角度から議論が積み重ねられることを御祈念申し上げる次第です。

結びに、本日お集まりの皆様方が、三遠南信地域の発展のために、それぞれのお立場でさらに御尽力をいただきますよう、そして、そのための社会資本整備として、これから三遠南信自動車道、リニア中央新幹線をはじめとした公共交通網をしっかりとこの地域の中に実現させていく、その原動力となっていただきますことを御祈念申し上げ、何より本日お越しいただきました皆様方、本当にようこそ飯田市にお越しいただきましたということを重ねて申し上げさせていただきまして、私からの挨拶とさせていただきます。

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長
飯田商工会議所会頭　柴田　忠昭

御紹介いただきました飯田商工会議所会頭の柴田でございます。商工会議所・商工会

及び開催地飯田を代表いたしまして、一言御挨拶を申し上げます。

本日は、三遠南信地域の市町村、議会、商工会議所・商工会、さらには住民団体の皆様には、遠方より南信州・飯田の地にお越しをいただきました。心から感謝申し上げます。

また、日ごろより三遠南信地域の振興や三遠南信地域連携ビジョンの推進に格段の御高配をいただいております御来賓の皆様におかれましても心から厚く御礼を申し上げます。

本日は、多くの皆様が整備の進む三遠南信自動車道、あるいは中央自動車道を通って、この地にお見えになったかと思うわけでありますが、多くの方々、場合によっては初めてこの地を訪れる方もいらっしゃるかと思いますが、飯田山本インターチェンジのあたりから望むこの飯田下伊那の風景、南アルプスや中央アルプスの山々を、御覧になっていかがでしたでしょうか。この冬の景色を、「すばらしいな」とお感じになっていただけたかと思うところであります。

当地域では、昨年の春、南信州の春の幕開けといたしまして、7年に1度の大祭「飯田お練りまつり」をこの飯田の地で開催いたしましたが、飯田市や関係の皆様の格段の御協力をいただきまして、さらには3日間すばらしい天候にも恵まれまして、出演団体が47団体、御覧いただいた方々は延べ35万人という、過去最大のすばらしいお祭りを開催することができました。この地域で受け継がれております伝統文化を、十分に御堪能いただけたのではなかろうかと思っております。

本年はNHKの大河ドラマ「おんな城主直虎」、この舞台になっております浜松市はもとより、ゆかりの地であります南信州高森町、それから、飯田井伊家にも大変な注目が集まっておりまして、地域資源を活用した観光による三遠南信地域の交流が実現しておりまして、大変ありがたいことだと思っております。

さて、当地域は三遠南信自動車道とリニア中央新幹線の二大交通プロジェクトが同時に進められております非常に希有な地域であります。三遠南信地域の北の玄関口、長野県の南の玄関口として、この二大交通プロジェクトの完成が一日も早くなることを願うところです。

リニア中央新幹線につきましては、御案内のとおり、2027年の開業を目指して、昨年11月には大鹿村で長野県内初の本体工事の着工ということになったわけです。三遠南信自動車道の整備はもとより、リニア中央新幹線長野県駅に接続する国道153号、中央自動車道座光寺パーキングエリアのスマートインターチェンジ、中央自動車道と長野県駅を結ぶ座光寺上郷道路など、交通ネットワークの整備計画につきましても、現在、着々と進められているところでして、大変ありがたいことだと思っております。この大交流時代の幕開けに向けまして、地方創生に向けた地域の特徴や強みを生かした産業づくりや人づくりが喫緊の課題であると思っております。

本日は、行政、大学関係者、住民団体、そして、商工会議所・商工会、この三遠南信地域に関わる多くの皆様にお集まりをいただいております。三遠南信地域の未来につきまして有益な議論を交わしていただければありがたいと思っております。私ども商工会議所・商工会といたしましては、「小規模事業者支援法」に基づきます経営発達支援事業などによりまして小規模事業者対策を図るとともに、行政や金融機関、大学などともさらに連携を強化し、広域的な視点に立った地域の活性化にも取り組んでいく必要があると考えております。

結びに、本日、お集まりの皆様にすばらしい会議を持っていただきまして、この地域の発展に御尽力していただきますよう、皆様にとりまして素晴らしい1日となりますよう御祈念申し上げまして、開催地代表としての御挨拶とさせていただきます。

○来賓祝辞

■国土交通省中部地方整備局長

塚原　浩一　氏

御紹介いただきました中部地方整備局長の塚原でございます。

本日は三遠南信サミット2017in南信州ということで、御盛会、本当におめでとうございます。心よりお祝い申し上げたいと思います。

また、ここにお越しの皆様には、三遠南信自動車道をはじめといたしまして、日ごろより、私どもの事業あるいは取り組みに多大な御理解･御支援をいただいておりますことを、改めて、この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。

この三遠南信地域、私も何度も伺わせていただいていますけれども、本当に昔からの交流が非常に盛んな地域、また、文化的にも重なるところも多い地域と感じております。そういう中でこのサミットという形で、これは行政だけではなくて、産官学、地域住民の皆さんが一体となって、静岡、長野、愛知、その県域を越えて広域な連携を図って地域振興を進めようという非常に先進的かつ画期的な取り組みだと思っております。

昨年、私ども、本日基調講演をされます奥野先生に御尽力をいただきまして、中部圏の広域地方計画をまとめさせていただいたのですけれども、その中でも、まさにこの三遠南信地域の広域連携というものは、本当に先進的なモデルとするべきものであろうと位置づけをしておりまして、こういったものをさらに推進していきたいと思っております。

この地域におきましては、これが20年以上も前に始まって、長きにわたって継続し、かつ活発に活動していただいて多大な成果を出していただいている、これは本当にすばらしいことだと思います。

先ほどもお話がありましたけれども、2027年にはこの地にもリニア中央新幹線が開通するということで、関連のプロジェクトも含めて、様々な取り組みが進んでおります。

私どももそういったものをしっかりとサポートしてまいりたいと思っております。

そういう中で、この飯田の地で今回のサミットが開催されるということは、まさに時宜を得たことなのかなと私どもも思っております。道路の整備、あるいはそのリニア中央新幹線へのアクセスの整備をしっかりと進めることによりまして、物流であったり、観光振興であったり、あるいは安全・安心の確保であったり、様々な形で大きな効果が期待できると思います。私どもも一生懸命取り組んでまいりたいと思いますので、どうかよろしくお願いをいたします。

御案内のとおり、三遠南信自動車道につきましては、今、我々も一生懸命事業を進めているところでございまして､全長が約100キロメートルございますけれども､約3割が開通をしております。さらに、平成29年度、平成30年度、平成31年度とそれぞれ開通の見込みを出させていただいておりますけれども、それをしっかりと着実に実現させていきたいと思っておりますし、その後、一日も早く全線開通に向けて歩みを進めてまいりたいと思っております。

ただし、これにはここにおいでの皆様のさらなる御支援・御協力は不可欠だと思っておりますので、ぜひ御支援のほど、よろしくお願いをしたいと思っております。

また、私どもは道路をつくるわけですけれ

ども、道路は単に車が通るというだけではなくて、まさに、ここで今、皆様に取り組んでいただいているように、その道路に皆様方のいろいろな知恵、アイデア、取り組みをしっかりと載せていただく、そういうことが非常に重要だと思っております。道路はハードウエアでありますけれども、そういった皆様のお知恵をソフトウエアとして道路に載せることによって、この地域の振興が本当に大きな効果を上げることができると思っております。

そういった意味におきまして、このようなサミットの場において有意義な議論が展開されるということは大変重要なことだと思っておりますので、どうかよろしくお願いをいたします。

最後になりますけれども、この三遠南信地域のますますの御発展を祈念しまして、簡単でございますけれども、私の御挨拶にかえさせていただきます。

■農林水産省関東農政局次長
永嶋　善隆　氏

ただいま御紹介いただきました関東農政局次長の永嶋でございます。本日は三遠南信サミットの開催、誠におめでとうございます。また、このような素晴らしい会議にお招きをいただきまして、誠にありがとうございます。御臨席の皆様におかれましては、常日ごろから農林水産行政の推進に御理解、御協力を賜りまして、厚く御礼を申し上げる次第でございます。

この三遠南信サミットにつきましては、本年で24回目の開催と伺っております。この三遠南信地域が一体的な圏域として発展するために、県境を越えて三つの地域の皆様が一堂に会して、文化や歴史、産業振興など、多岐にわたる議論を長期の取り組みとして継続して取り組んでおられることに対しまして、改めて心より敬意を表する次第でございます。

さて、昨年11月に政府の農林水産業・地域の活力創造本部におきまして、農業競争力強化プログラムが決定されたところでございます。このプログラムにつきましては、農業者の所得の向上を図るために、農業者が自由に経営展開できるように環境整備するとともに、農業者の努力だけでは解決できないような構造的な問題をここで解決しようというものでございます。具体的には、土地改良制度の見直しや収入保険制度の新たな導入など、かなりの思い切った改革を行っていくということでございます。この三遠南信地域につきましては、天竜川をはじめとした水資源を活用して、全国に先駆けて近代的な農業用水の整備が行われました。南信地方の米やリンゴ、ナシ、遠州地方のお茶やミカン、三河地方の野菜や花など、全国的に先駆けた取り組みがなされております。農林水産省といたしましては、これらの「強い農林水産業」を次世代に引き継いでいくためにも、農地中間管理機構による担い手への農地集積や集約化を加速させつつ、農地の大区画化、汎用化などを行い、さらには、水路のパイプライン化による省力化、老朽化した農業水利施設の長寿命化や耐震化などを推進していく予定にしております。

また、政府の農林水産業・地域の活力創造本部では、あわせて「農林水産業・地域の活力創造プラン」を改訂いたしまして、人口減少社会における農林水産業の活性化を図るために、「農泊によるインバウンド需要の取り込み」を新たな施策として推進することを決定し、全国で500地区のモデル地区を出そうと取

り組んでおります。

改めて申すまでもなく、我が国の農山漁村には日本ならではのおいしい食、農山漁村の素晴らしい景観など、訪日外国人にとって魅力的な資源が豊富に存在しております。政府では、現場で活躍する人材の確保・育成や、農泊の魅力の国内外への情報発信、さらには、受け入れ地域での農泊のビジネス化などを働きかけていくということで、これについては各省が連携して取り組むこととなっているところでございます。

この会議が行われておりますここ飯田市につきましても、全国に先駆けて体験教育旅行に取り組まれて、株式会社南信州観光公社によるグリーンツーリズムの取り組みは全国の模範となっております。全国の都市農村交流のモデル地域であるこの飯田市は、私も何度も足を運び、勉強させていただいているところでございます。

このように、ここ三遠南信地域につきましては、首都圏、それと中京圏にも隣接し、多くの都市住民が居住しております。子どもたちによる自然体験や農林漁業体験、また、農山漁村地域の振興に貢献したいというアクティブシニア層による「援農」などの都市農村交流の受け皿として、全国のモデルケースになるのではないかと思っている次第でございます。

また、南信地域の特産品である「市田柿」につきましては、昨年7月に「GI（地理的表示保護制度）」の登録産品として認定されました。地域に長年培われた特別な生産方法やブランド育成が評価されたものではないかと思っております。既に、この市田柿につきましては、台湾や香港への輸出も行われているということでございますけれども、地域の魅力の向上や輸出の促進など、地域の農林水産業と関連産業の発展に寄与するものとして、大いに期待しているところでございます。

今回のサミットにつきましては、「“みち”がはぐくむ三遠南信の未来」をテーマに、三遠南信地域連携ビジョンの実現に向けて、市町村長をはじめとする関係者の皆様方が意見を交わされる場と伺っております。まさに三遠南信地域の活発な交流がこの地域の活力の強化につながっていくものではないのかなと考えております。

最後に、このサミットが実り多いものになりますよう、三遠南信地域のさらなる発展につながることを祈念申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。

■経済産業省関東経済産業局地域経済部長
三浦　裕幸　氏

本日は、三遠南信サミット2017in南信州ということで、24回目の三遠南信サミットを開催されますこと誠におめでとうございます。本来であれば、局長の藤井がこちらに参って御挨拶申し上げるべきところでございますけれども、所用がございまして、私が代理で本日参った次第でございます。日ごろより経済産業行政に御理解・御協力を賜りまして、この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。

さて、経済産業省は、日本の経済の牽引役ということでありまして、先ほど、鈴木会長の御挨拶にもあったのですけれども、地方創生ということで、ようやくデフレから脱却して景気も上向いている中で、これを地方にいかに浸透させて活力を取り戻していくかが課題になっているわけでございます。しかし、

国内の人口構造としては少子化、高齢化、人口減少が進んできており、そういう意味では、経済の活力が失われていく方向にあるということは、誰もが感じているところではないかと思います。

既に皆様も新聞などいろいろなところで目にされていると思うのですが、私ども経済産業省では、インダストリー4.0という第4次産業革命がこれから始まるのではないかと、様々な観点から議論をしています。

このインダストリー4.0というのは、ポイントだけかいつまんで申し上げますと、様々なものをインターネットにつなげて、そこから得られるいろいろなデータなどを人工知能が分析をして、それで我々の暮らしや産業活動に役立てていこうというものであります。具体的な例で言いますと、今までできなかった自動運転や、あるいは遠隔医療といったものが実現されれば、地方で様々な公共交通機関が廃止されている中で、そういったサービスを新たに展開できるのではないかと期待されております。そういう意味では、今までの我々の暮らしを全く別なものに変えていく可能性があるというものであります。当省としては、第4次産業革命に的確に対応していくためのビジョンをまとめておりますが、日本だけではなくて、アメリカや欧州でも同じような取組みがされており、国際的にも少しずつそういった社会を実現していく方向になっていくのではないかと思っております。

私は、この第4次産業革命は、地方において実現してこそ初めて意味があるのではないかと考えております。本日、お集まりの皆様方も、この地域の未来をどうするかという点を様々な角度から議論をされ、ビジョンを策定されていると伺っております。私どもも一緒になり、そういったビジョンを実現していくお手伝いができればと考えております。

三遠南信地域は、長野県、静岡県、愛知県にまたがって連携をされていらっしゃいます。私は、長野県と静岡県を管轄している関東経済産業局の者でありまして、愛知県は中部経済産業局の管轄なのですが、関東経済産業局と中部経済産業局も連携しながら、広域的に支援させていただく決意でございます。

最後になりましたけれども、本日、鈴木会長、佐原・牧野副会長をはじめ、関係の方々の御尽力によりまして、このような盛大なサミットが開催されますことをお祝い申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。

■長野県建設部長　奥村　康博　氏

ただいま御紹介賜りました長野県建設部長の奥村康博でございます。本日、第24回三遠南信サミットin南信州がこのように盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。また、皆様方には日ごろから長野県政の推進、あるいは建設部の事業推進につきまして御支援・御協力をいただいております点、厚く御礼を申し上げます。

この三遠南信地域でございますが、天竜川、豊川を活用して発達した水運や、塩の道と呼ばれる陸路を通じ海と山と交流がありまして、古くから独自の生活文化圏を形成してきたところでございます。最近では三遠南信地域連携ビジョンにおきまして、三遠南信250万流域都市圏の創造を目指し、産官学の皆様が協力・連携して地域づくりに御尽力されていることに対しまして、心から敬意を申し上げたいと思います。

本日のサミットの開催地であります三遠

南信地域でございますが、三遠南信自動車道とリニア中央新幹線という二大プロジェクトが進んでおりまして、首都圏と中京圏から長野県への南の玄関口として、さらなる発展が期待されているところでございます。本日のサミットのテーマ、「“みち”がはぐくむ三遠南信の未来」ということでございますが、三遠南信自動車道によりまして、古くから続くこの地域の連携がさらに強まるとともに、平成39年開業予定のリニア中央新幹線等との相乗効果によりまして、地域一帯に大きな発展をもたらすものと考えております。

昨年2月に新東名高速道路の浜松いなさジャンクションから豊田東ジャンクション間が開通したことによりまして、三遠南信自動車道の交通量も増加し、観光等の地域間交流人口の拡大によりまして、地域のさらなる活性化につながっております。

産業におきましても、アジア№1航空宇宙産業クラスター形成特区として国の指定を受けております航空宇宙産業をはじめ、三遠南信自動車道の整備によりまして、お互いの強みを生かした連携が図られ、産業振興による地方創生にもつながるものと期待しております。

この三遠南信自動車道につきましては、（仮称）龍江インターチェンジから（仮称）飯田東インターチェンジ間が平成29年度開通に向けまして、工事が進められております。さらに昨年11月には、天龍峡インターチェンジから、（仮称）龍江インターチェンジ間の約4キロメートルにつきまして、平成31年度の開通見通しと発表されました。これらによりまして、中央自動車道から、（仮称）飯田東インターチェンジ間の一連の区間約15キロメートルが通行できるようになるということでございまして、地域の期待も一段と高まっているところでございます。長野県としましては、国道152号の現道活用区間の整備に努めておりまして、一昨年に小道木バイパス、昨年12月には和田バイパスの全区間が開通したところでございます。これによりまして、国で進められている青崩峠道路のトンネル掘削土を活用させていただく予定の小嵐バイパスを残すのみということでございます。

さらに、県の中期総合計画「しあわせ信州創造プラン」におきまして三遠南信自動車道の整備効果を地域内外の発展に結びつける取り組みが不可欠との認識のもと、引き続き、この地域の発展に向けた様々な施策を展開してまいりたいと考えております。皆様方の一層の御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びでございますが、本日のサミットを通じまして、三遠南信地域のますますのご発展と御参集の皆様方の御健勝と御活躍を心から祈念いたしまして、私からの御挨拶といたします。

3 全体会　基調講演

San-En-Nanshin Summit 2017 in Minamishinsyu

○基調講演
演題「地域創生のために我々は何をすべきかー第２次国土形成計画の推進に向けてー」
学校法人梅村学園　常任理事・学術顧問　国土審議会会長　奥野　信宏　氏

学校法人梅村学園　常任理事・学術顧問
国土審議会会長　奥野　信宏　氏

タイトルとして、「地域の創生のために我々は何をすべきか」とつけましたが、副題として「ー第2次国土形成計画の推進に向けてー」とさせていただきました。

新しい国土形成計画の目標は、「安全で、豊かさを実感することのできる国」「経済成長を続ける活力ある国」「国際社会の中での存在感を発揮する国」ということです。テーマは「対流」で、「対流促進型国土の形成」と呼んでおります。これは、戦後、第7次の国土計画に相当いたします。第1次は昭和37年の全国総合開発計画です。全国総合開発計画は、「国土の均衡ある発展」というようなフレーズで御案内かと思います。意味は変わってきておりますが、今も残してはあります。

全国総合開発計画は、第5次全国総合開発計画で平成10年で終了いたします。第5次全国総合開発計画では、この圏域は、「産業技術の世界的な中枢圏域を目指す」という位置づけをされたということで御記憶かと思います。全国総合開発計画から国土形成計画に変わったのが平成16年です。

国土形成計画は、全国計画と広域地方計画からなっています。

全国計画は、一昨年8月に閣議決定されました。これは、理念を中心に書かれています。各広域圏の具体的な事業を書き込んでいく広域地方計画は、各広域圏が主体となって策定されますが、本日御出席の皆さんでそれにかかわられた方も多いと理解しています。

昨年3月に全国計画と広域地方計画の両方をあわせた計画全体が政府決定されました。この計画で中部圏域については、「世界最強・最先端のものづくり圏域を目指す」という非常に力強い表現がされています。

この国土形成計画につきましては、OECDが大変に高い評価をしてくださいました。テリトリアル・レビュー・ジャパン2016というのですが、「日本政府を意欲ある決定を行った。人口減少、高齢化の移行期間をいかに運営するかが将来の繁栄を左右する。新しい国土形成計画はそのための施策を提示している。近い将来、類似の課題に直面する他のOECD諸国に貢献する」という趣旨です。昨年、OECD主催の記念シンポジウムが東京で開催されました。テーマは、「人口危機をチャンスに変える新たな国土・地域戦略～コンパクト＋ネットワークで切り開く日本の未来～」でして、4月11日に東京の日経ホールでありました。OECDから総裁、事務局長、各国代表団以下御出席なさいました。日本からも関係大臣等々

大変たくさんの方においでいただきました。私は全体のコーディネーターを務めていましたが、大変に盛り上がっておりました。

本日は OECD が出したレビューを持ってきました。このレビューの表紙の図柄は、コンパクト＋ネットワークを意味しています。唐傘を広げたようなデザインで、黒い太い線が横に行っていますが、これは、コンパクト＋ネットワークを妨げる障害を突き抜けて、コンパクト＋ネットワークを推進していくということを表現しているそうです。全体が桜色に統一されています。

この表紙は、フランスの有名なデザイナーがデザインされたのだそうです。本文は260ページほどのものです。非常によくできた地域政策の日本についての本でして、現在、国土交通省で翻訳をされていらっしゃいます。大学の地域政策のテキストになるような優れた内容だと思います。

ついでに一つ申し上げておきますと、OECD は国についてのレビューのほかに、都市レビューも行います。最近では、シカゴとか、メキシコシティーとか、ロッテルダムについて行われています。OECD は名古屋圏についてのレビューを自分たちで行いたいということを熱心に言ってきておられます。少しお金はかかるのですが、私は、名古屋圏に関するレビューが実現すれば、国内、海外に対してよい宣伝になると思っており、ぜひとも実現すればいいと思っています。

さて、なぜ対流かということですが、国土計画の基本理念は、交流・連携が新しい価値を生み出すということでして、それを今の時代に体現するのが対流です。東京一極集中で対流機能が衰えています。東京一極集中の是非については議論がありますが、私は、やはり改善すべきだと思います。一つは少子化問題です。東京に人を集めて消していて日本がもつはずがありません。

それから、国土の多様性と日本文化の創造というように申し上げましたが、日本の文化というのは、各地の街筋・谷筋の文化が江戸時代から参勤交代などで江戸に集まって融合してできたものだと思います。ところが、現在、東京在住者のうちの40歳代などでは、東京近辺生まれの東京育ちの方の比率がもう七十数％になって、圧倒的に多数になっています。日本の文化の中で地方の文化がどういう貢献をしているか、これに理解が及ばないということがあります。日本の文化は、華のお江戸のど真ん中で生まれて海外に輸出されるものだと思っておられます。私は、それは違うと思うわけです。

国土政策や国土計画で、「あなたたち、何をやりたいのだ」と聞かれることがありますが、私は、そのときには「日本の谷筋・街筋の文化を守り、育てることだ」と言っています。

大学は対流で新たな価値を創造すると書きましたが、政府の方々が国会議員の皆さんのところに計画の説明に行くと、「対流というのは何を言っているのかよくわからない」とおっしゃられる方もいらっしゃるようです。対流で新しい価値を創造する典型は大学です。本日も大学の先生方がお見えですけれども、大学は、いわば五右衛門風呂の熱源になって、人・情報の世界的な対流を生み出しています。そういう大学が国内・海外に多数ありまして、双方向の対流を生み出していて研究・教育で新しい価値を創造しています。それが大学です。地域のコミュニティー大学も、それぞれ地域の中の対流の拠点として大きな役割を果たしています。

対流には熱源が必要です。全国の各地域都市が対流の拠点になるわけですが、集落等の小さな拠点も大事です。そこには多様な主体が参加しており、参加することが生きがいになっています。道の駅などは典型です。都市圏から人を呼び込む可能性がありますし、広域的な連携による国内・国際の大規模な対流

にも発展いたします。

「我が国の小さな拠点の特徴」と書きましたが、OECDのシンポジウムでも、OECDの方が、日本の小さな拠点を「The small station」と呼んで、注目しておられました。「OECD にも小さな拠点はあるが、大体行政の出先のようなところが多い。しかし日本の場合は、そこに市民が集まって、自分たちで企画・立案し、生活支援機能を提供し、実行していらっしゃる。これはすばらしい」ということをおっしゃっておられました。

対流を生み出す主な熱源としては、まず東京オリンピック・パラリンピックがあります。これは、いろいろ議論はありますけれども、世界的な対流を起こす熱源であり、ぜひとも成功させなければいけない。それから、コンパクト＋ネットワーク、その大都市版としてのスーパーメガリージョン、さらには小さな拠点です。それらに共通するエネルギー源が、活動を支える多様な担い手であり、様々な主体の参加がつくり出す共助社会です。

コンパクト＋ネットワークから随時説明してまいります。

コンパクト＋ネットワークを国土計画の中心に据えた背景には、人口減少による地方都市の機能低下の危機があります。コンパクトになった都市のネットワーク化によって都市群が互いに補完し、一体としての機能するようにし、高度な都市機能を維持するということです。

国土のグランドデザインあるいは国土形成計画では、松江市と米子市が例に挙がっています。松江市は島根県の東に位置し、現在の人口は20万人、合併前の人口は13万人から14万人です。米子市も同じ規模でして、だんだんと人口が減ってきております。やがて山陰地域の中枢機能を果たせなくなるおそれがあるわけでして、松江・米子・出雲・安来等の都市が一体として機能できるようにしたら、高次の都市機能を維持できるのではないかという考え方が中心にあります。

大都市圏でも重要でして、名古屋市などは駅そば圏と言っていますが、地下鉄の駅の周辺700メートル圏内に生活支援機能を集約し、それをネットワーク化して街をつくっていくという考えでまちづくりを進めておられます。

近隣都市の連携についてですが、行政サービスの提供で行政が連携しておられるということはこれまでもあります。行政の連携は大事ですが、予算を使ってしまえばおしまいですし、また、首長さんや担当者が代わられれば雰囲気が変わってくるということがあります。大事なことは、市民が一体的な生活圏として感じる圏域に育てるということであり、そのための多様な主体の参加が重要です。

さらに広域的な連携としては、三遠南信サミットがまさにその典型です。国土のグランドデザインでも、第2次国土形成計画でも、広域的な連携の典型例として、まず挙がっているのが三遠南信の取り組みです。先ほど、鈴木会長から、やっと世間が追いついたという話がありましたが、まさにそのとおりだと思っています。

そのほか広域的な連携の例としては、関西の広域観光である歴史街道計画、名古屋圏の海外企業誘致に関するグレーター・ナゴヤ・イニシアチブ、それから、九州地域戦略会議、シーニックバイウェイ北海道等々を挙げております。

三遠南信地域は、二百数十万の人口を有する一つの大きな都市圏として成長させていくのだというお話もありますけれども、では、今から都市圏として必要な機能は何かという話をしてまいりたいと思います。

我が国の成長を担うのは都市圏でして、そのための四つの視点を挙げています。

第1点は、「グローバルにビジネス活動が展開できる街」ということでして、英語圏の住民が英語で生活してストレスを感じない街ということです。

英語しかしゃべられない家族が、飯田市に来て市民病院に行ったら何の不自由もなく英語が通じるということです。現在は、英語のわかる人を呼びに行くというようなことまではできていると思いますが、小学校から英語教育が始まっていますし、5年単位くらいでどんどん日本も改善されていくだろうと思っています。

それから、国際的な空港・港湾アクセス機能等の整備を挙げていますが、空港については、国際空港からアクセス1時間以内というのが、研究開発的な国際的な機能を持つには必須だと思っておりまして、リニア中央新幹線ができれば、飯田市などはそういう可能性が高くなってくると思います。

港湾へのアクセスは産業のために大事ですが、三遠南信自動車道ができれば三河港へのアクセスの改善は産業展開の大きな力になるだろうと思っています。

大学の国際競争力の強化も大事だと思います。三遠南信も、「我が町に来れば頭脳がある」というようになることが、少子高齢化社会の日本においては必要なことなのだと思います。

第2点は「高齢者が住みやすく、子供が生まれる街」です。

子育て支援といいますと、行政の方は10くらいの施策ならすぐに挙がります。しかしそれが、子どもが生まれることに結びつかなければ意味がないと思っています。それで「子供が生まれる街」という表現にいたしたわけです。大事なことは、仕事と余暇のバランスです。ワーク・ライフ・バランスと最近首相などもよくおっしゃっておられますが、労働時間を減らすということ、それから高齢者や女性の長いキャリアを実現できるようにすること、それから、子育て支援ですが、保育所もつくればいいのではなくて、例えば名古屋でつくるなら、地下鉄の駅の前につくるとか、上につくるとか、数字のつじつまさえ合えばいいという話ではないと思います。

人口減少、高齢化社会の中でＧＤＰを増やそうと思えば生産性を上げなければいけません。そのためには、ワーク・ライフ・バランスが鍵を握っています。三遠南信地域は、その点から見てもすぐれた地域だと思っています。

第3点の「環境に優しく、歴史・文化が感じられる街」は、先ほど触れました。

第4点は、「安全・安心な街」です。今でも覚えているのですが、大学の教養の授業で人文地理の先生が、「産業というのは、世界的に見て自然災害に強いところに集まる」ということをおっしゃっておられましたが、日本では、東京も名古屋も大阪も自然災害には弱いわけです。減災は大事で、どこでも命は助からなくてはいけませんが、自然災害から逃げろといっているのでは世界の一流の人はなかなか来ないわけでありまして、自然災害にしっかり対応していくということが大事だと思っております。

次に「行政区域を越えた市民の連携と強靭化」と書いていますが、一番下に、「常時の楽しみが非常時の力になる」と記しております。市民がいつも集まって、いろいろなことでつながりを持って、一緒に楽しんでいると、それが自然災害のときに対する強靭化になるということです。

次はスーパーメガリージョン構想についてです。

これは二眼レフ論に代わる新たな国土の構造を構築することを言っています。昭和60年ころには日本における国土構造は二眼レフ論であり、国土政策もそうです。東京、大阪が二眼レフとして相対峙して日本を引っ張っていくというのが二眼レフ論です。しかし1980年には、中部圏の1人当たり所得は近畿圏を超えて次第に差が広がっていきます。大阪の経済も、頑張ってはおられますが、なかなか苦しいことがあるということは、皆さん、

御案内のとおりです。

そうした中で、大阪では、これは大阪の悪口を陰で言っているのではなくて、大阪でも同じ話をしていますが、二眼レフと言っていれば、東京の次に何かしてもらえるという意識が出てまいりました。私は、「それではだめだ。二眼レフの国土構造を言うのはもうやめて、それに代わるものとしてのスーパーメガリージョンだ」ということを言ってきました。スーパーメガリージョンというのは、東京、名古屋、大阪等が新たなスーパーハブとして、一体として日本の経済成長の牽引役となり社会経済を引っ張るということです。

リニア中央新幹線は、皆さん、よく御案内のとおりです。私ももう30年近く、旧運輸省やJRでかかわってきました。何の役にもたっていないと思いますけれども、しかし、実現には私なりの感慨はあります。

リニア中央新幹線の沿線地域の取り組みとしては、まず名古屋市と大名古屋圏の取り組みです。名古屋駅を中心とした将来構想であるスーパーターミナル構想が、一昨年策定されていまして、具体的な実施計画を詰めてきました。例えば、これが鍵だと思いますけれども、高速道路の結節を名古屋駅のどこに持ってくるかというようなことです。

一方で、集積する機能を名古屋駅地区だけで受け切れるかどうかという点につきまして、名古屋駅地区だけではキャパシティが足りないのではないかと、心配しています。そのために、おそらく金山あたりに副都心が要るのだろうと思います。

それから、「愛知県下の都市の意識に差異」と書きました。西三河の、安城、刈谷、豊田、岡崎等々は、経済的には日本でも一番強力な地域です。人口も減っていないどころか、これからまだ増え続けるという予測を持っている都市もありますし、産業的にも強い地域です。トヨタ関係の自動車関連の産業が集中しているわけですが、国際的な都市間競争の中で生き抜くためにはリニア中央新幹線をどう使えばいいかという点について、かなり強い問題意識を持っていらっしゃいます。ただし、具体的に何をするかとなると、まだこれからの課題ですが。

一方、尾張の町は、まだ何も始まっていないというのは同じなのですが、それでもさらに遅れて、「何をすればいいのだ」というような感じのところにあると思っております。

関西ですが、これまでは早期の全線開業を目指して運動をしてこられました。しかし、一定のめどがJR東海等々から発表されまして、それでは、どこにどういうものをつくっていくのかという議論が始まろうとしています。私も出かけていきますけれども、来月大阪で、関西経済連合会等と大阪府主催の行事が行われる予定になっています。新大阪は、西のスーパーハブとして機能してもらわなければいけません。リニア中央新幹線の駅は新大阪に直結すればベストで、国土構造としては大阪以西に行く新幹線への乗りかえ利便性が最大のテーマです。これは、関西圏ではかなり大きな議論になると思っております。

スーパーメガリージョンは、中央日本と北陸圏を含むスーパーメガリージョンだと思っておりまして、詳しい話はできませんが、そのため三遠南信自動車道などの公共交通網の整備は、大きな役割を持っていると思っているわけです。

これからの国土づくりの多様な担い手ですが、新しい国土形成計画では、国土審議会に計画推進部会が設置されています。私が部会長を兼任しておりますが、四つの委員会がつくられていて、既に動いております。この外づけでスーパーメガリージョン研究会が設置されています。内閣は第二次国土形成計画について、特にスーパーメガリージョンを成長戦略として注目されておられるように思います。その内容は、先ほど申し上げた、東京、名古屋、大阪等がスーパーハブとして一体と

なって日本の成長を支えていくということであり、これは、安倍首相が臨時国会の所信表明でも言っておられましたし、予算委員会でも言っていらっしゃいました。

国土政策で重要なのは、実施における多様な主体の参加でして、NPO、住民団体、一般社団法人、企業、大学、経済団体、行政等々で、これらの多様な担い手がつくる人のつながりと、それによって生まれる共助社会が共通なエネルギー源となります。

国土計画においては、人のつながり、つまり交流・連携が新しい価値を生み出すということが基本理念です。具体的な例を挙げる時間がありませんが、江戸時代の宿場町、港町などを典型的な例としてお考えいただければいいのではないでしょうか。

交流・連携を生み出すダイナミズムをどう実現するかですが、ポイントは時代とともに変わってきています。全国総合開発計画は昭和37年、新全国総合開発計画は昭和44年ですが、これらは高度成長期の計画でありまして、大都市圏の発展の成果をいかに地方圏に波及させるかがテーマです。地方の拠点を整備して大都市と結ぶ交通網を整備するということがポイントでした。昭和52年の第3次全国総合開発計画のときには高度成長が終わって安定成長期に入っていますが、ここまではハードの整備が中心です。しかし、昭和62年の第4次全国総合開発計画、平成10年の第5次全国総合開発計画の頃になってまいりますと、交流・連携に人のつながりの意味が入ってきます。地域住民、ボランティア団体、NPO、企業等の多様な主体の参加による地域づくり、これがコアになってくるわけです。

国土形成計画が平成20年につくられるわけですが、このとき多様な主体は「新たな公」と呼ばれました。それを国の五つの基本戦略の一つに据えて、ほかの四つをベースで支えるという重要な役割が与えられたわけです。このように、第4次全国総合開発計画、第5次全国総合開発計画の「多様な主体」は、形成計画で「新たな公」と呼ばれ、政権がかわって「新しい公共」と呼ばれ、また政権がかわって、今は「共助社会」という呼び方がされているわけです。

政府の取り組みですが、首相も、活力ある共助社会づくりを進めるということを国会で言っておられます。

それから、骨太の方針2015では、「共助の活動への多様な担い手の参画と活動の活発化のために、ボランティア参加者の拡大と寄附文化の醸成に向けた取り組みを推進」「NPOやソーシャルビジネス等の育成等を通して、活力あふれる共助社会づくりを推進」というようなことがうたわれています。2013年、2014年にも同じようなことがうたわれています。

本年度も同じようなことがうたわれておりますが、「社会的成果、インパクト評価の推進」「民間資金の活用」が具体的に何を言っているかというと、NPO や市民団体の多様な主体の活動を自分のところで評価して、社会にそのインパクトの情報発信をする、そういう制度はつくるということです。今、それを内閣府で行っておられます。大体10団体くらいのNPOにモデルとしてつくってもらっているところです。

それから、民間資金の活用ですが、これは休眠口座の問題でありまして、後ほど触れます。

ナショナル・レジリエンス懇談会が内閣官房にあります。東日本大震災の後に国土強靱化を議論するためにつくられたわけです。マスコミからは、「またコンクリートで日本を固めるのか」とおしかりをいただきました。コンクリートは大事ですが、ここのもう一つの柱が、「人の繋がりが災害に負けない、しなやかに強い国土・地域を作る」ということでして、「地域コミュニティーの維持、強化を図ることは極めて重要」という言葉が、国土強靱化基本計画にも盛られています。

国土強靭化基本計画というのは、法律上は非常に強力でありまして、防災・減災については国土形成計画よりも上位で、日本の計画の最上位に来ます。これに基づいて、長野県でも、大規模災害に備えるための地域計画がつくられていまして、これも各自治体の計画の中では最上位の計画です。全都道府県について、既につくったか、この3月までにはできるかというところです。

それから、「ソーシャルビジネスなど、新たな担い手を育成する取組を支援するとともに、共助社会づくりを目指した取組が必要」という箇所ですが、これは、昨年3月に、国土強靭化委員会から出された報告書です。共助社会のヘッドクォーターを担っているのは、内閣府の共助社会づくり懇談会ですが、ここでのキーワードは「全員参加と共助の精神」ということで、政策展開がされています。

私は、普通の市民や民間が公共を担うというのが現代の社会の特徴だと思っています。これには四つの機能があります。一つは、行政機能の代替です。行政が提供すべきサービスを自らの意志と負担で市民に提供する活動を指します。2点目が、行政機能の補完です。行政が提供すべきとまでは言えないが、公共的価値の高いサービスを提供する活動です。ものすごく多様な分野で活動が展開されていまして、今ではこういう代替・補完的な活動がないと地域は動かないまでになっています。それから、安全・安心、防災・減災でも威力を発揮しています。

これらの活動は、主にボランティアと行政の支援で行われていますが、今、ものすごく増えているのが、財政的に自立して社会的課題を解決するという取り組みです。典型はソーシャルビジネスです。特産品の開発・販売、観光資源の発掘・事業化、2地域居住等など皆さんも心当たりがあると思います。

それから、企業とNPOの連携ですが、これは随分進んでおります。中小企業とNPOの連携は、長野県でもいろいろな事例があって、中小企業の第2の創業とかソーシャル化とか、いろいろな名前で呼ばれております。

大企業と NPO の連携は、CSV（Creating Shared Value)、共通価値の創造と呼ばれています。CSRとは違って、NPOなどの考え方を自分の企業の中に取り込んで本業に生かしていく取り組みなどが大変に強い関心を集めているところです。

都市も街づくりについても多様な事例とあります。特に、飯田市での取り組みは出色で、充実した取り組みをしていらっしゃると思います。

大都市圏における事例として東京丸の内、札幌地下歩行空間、大阪BIDを挙げました。東京丸の内は、東京駅から皇居までの行幸通りです。地上も地下も都道ですが、三菱地所を中心にした民間グループと東京都が契約を結びまして、民間グループが7割、東京都が3割の費用負担をし、民間が運営と維持管理をされています。東京は、ありていに言えば3割の負担で済んでいるわけです。

私は以前、ニューヨークのマンハッタンの大学で教えていたことがあるのですが、丸の内は今、マンハッタンの5番街よりもいいのではないかという気がいたします。

大阪BIDは、一定のエリアについて民間団体が実質的に税金を取って、まちの社会資本整備や維持管理を行うという取り組みです。

それから、公的財産の活用については PRE と言っておりますが、廃校や官庁施設、道路等々を街づくりに活用する取り組みです。

災害時の復旧や復興における役割とは、株式会社釜石プラットホームなどが典型です。災害直後に、私の友人ですが、キッチンカーを連ねて釜石に入っていったことが復興の第一歩になり、現在も活躍しています。

街づくり・エリアマネジメント組織の設置形態としては、NPO、社団・財団法人、それから、株式会社も有力です。NPO では、ソーシ

ャルビジネスとは言っても、ビジネスがやりにくいのです。株式会社にしておいて、定款の中に、利潤が発生しても配当はしないとか、解散するときに残余財産があっても出資者で山分けせずに志を同じくする者に寄附するとか、いろいろなことを定めて行われています。

最後ですが、組織の育成が課題です。NPOといいますと、私も東京でNPOの理事長をしていますが、誤解を恐れずに言いますと、数年前までは、何か捉えどころがない、うさん臭いというような印象を持っていらっしゃる方も多かったように思います。現在は、メディアなどでもNPOの活動が普通に伝えられるようになって評価はされてきたとは思いますが、まだ、組織として弱いところがたくさんあります。それをどう改善するかが課題です。一つは人材育成です。企画・立案できる人材の育成は、内閣府等が一生懸命に取り組んでおられます。典型は北九州で活動している北九州家守舎でして、街の空きスペースや空き家をどう活用するかについてスクールを開いておられます。全国から人を集めてきて教育し、卒業生は全国に散って活躍しておられますが、すばらしい活動です。

またキャリア形成の仕組みが必要です。そこで期待されるのが、大学の役割です。ソーシャルビジネスに関する活動をしていらっしゃる人を大学か大学院に入れて、きちんと博士号等を与える教育をして、大学教授になってもらう。あるいは、行政、経済団体等の専門家として働いてもらうという仕組みがあるとよいのですが、悲しいかな、この分野で博士号をだせる教授陣が日本では数えるほどしかいないという問題があります。本日は愛知大学の川井学長がおいでですが、愛知大学は地域政策学部をつくっていらっしゃって、そこがそういうような機能を持つようになることを期待しているところです。

企業とNPOの人材交流については、NPOは給料が安いということがあり、なかなか実現しないということがあります。行政とNPOの人材交流は自治体では行われています。国も一昨年からできるようになったのですが、まだほとんど例がありません。

資金提供ですが、クラウドファンディングが一般化してきました。休眠口座の活用は大きいですね。先ほどの臨時国会で、休眠口座にある資金を社会福祉やNPO等々の活動に利用するという法律が成立しました。ここ2年ほど、議員立法で出ておりましたけれども、成立しませんでした。しかしやっと成立しました。

これは、預金口座で、毎年1,000億円以上の行く当てのない資金が出てきていますが、そのうち500億円程度は使っても大丈夫だということで、それを活用する法律が成立したわけです。

社会からの信頼性の醸成は大事なことでして、先ほど申し上げた社会的インパクトの評価は、まさにこのことです。

最後ですが、第2次国土形成計画の主要なポイントは、「人の繋がりの構築によって、程よい成長に支えられた先進国にふさわしい安定感ある社会を構築する」ということです。

どうも御清聴ありがとうございました。

4 全体会　トークセッション

San-En-Nanshin Summit 2017 in Minamishinsyu

○トークセッション
テーマ「三遠南信のトップリーダーが語る地域の未来」
コーディネーター：学校法人梅村学園　常任理事・学術顧問
国土審議会会長　奥野信宏　氏
発言者：　愛知大学理事長・学長　川井伸一　氏
豊橋技術科学大学　理事・副学長　大貝彰　氏
学校法人高松学園理事長、飯田女子短期大学学長　高松彰充　氏
豊橋商工会議所会頭　神野吾郎
浜松商工会議所会頭　大須賀正孝
飯田信用金庫　理事長　森山和幸　氏
愛知・長野県境域開発協議会会長　天龍村長　永嶺誠一
浜松市長　鈴木康友
豊橋市長　佐原光一
飯田市長　牧野光朗

コーディネーター
学校法人梅村学園常任理事・学術顧問
国土審議会会長　奥野　信宏　氏

トークセッションのテーマは、「三遠南信のトップリーダーが語る地域の未来」です。先ほどの基調講演では、新たな国土形成計画で描いている国土構図はどういうものか、その中で、三遠南信というのはどういう意義を持っているのかといったことについて全般的な話をさせていただきました。このパネルでは、トップリーダーの方々から、三遠南信の各都市と各分野の連携をどう進めるか、具体的にどのような地域をつくるか等々について話をしていただき、さらに理解を深めてもらいたいと思います。

ステージには、先ほど御紹介のありました10名の方々に座っていただいております。時間が限られておりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

トークセッションセッションは全体を大きく二つに分けております。

第1部では、各分野について関心を持っておられることについての状況、課題、将来等についてお話をいただきます。

第2部では、第1部についての追加の御発言、それから、他のパネリストの御発言についての感想、意見等をいただいて、必要に応じてディスカッションを行うということにしたいと思います。

早速、第1部に入ります。第1部では、パネラーの方が産官学について関心を持っていらっしゃることにつきまして、状況、課題、将

来等について御報告をいただきます。

それでは、最初に川井先生お願いします。

愛知大学理事長・学長　川井　伸一　氏

まず1点として、中部圏における三遠南信地域の戦略的な重要性という点です。

中部圏の変化は、リニア中央新幹線による名古屋の都心の変化が大きいとみられています。三遠南信地域は、広域連携の先進的な地域という評価をいただいておりますが、その三遠南信地域のこれからの目標、戦略も、名古屋の変動と連携しながら、世界で戦える中部圏を形成していくべきではないかと考えております。

そのためには、飯田地域や県境山間地域及び豊橋市、浜松市の沿海都市地域のそれぞれの戦略を明確にしていく必要があるのではないかと思います。その点におきまして、SENAの役割は非常に大きい。昨年の9月になりますが、本学はこのSENAと協定を結んで、本学にSENA の事務局の分室を置くことになりました。この役割をさらに強化していきたいと考えております。

以下、大学としての考えにつきましては、簡単に3点ばかり申し上げたいと思います。まずは、今申し上げましたが、愛知大学には、このSENAとの関連で言えば、三遠南信地域連携研究センターがございまして、三遠南信地域をテーマにした研究を進めている組織です。文部科学省の共同利用研究拠点として、この越境地域政策研究の全国的な拠点の一つとなっています。

やはりこれは、将来の地域社会像をいかに描くかということが課題で、それにつきましては、いろいろな分野からの学際的な取り組みが重要ではないでしょうか。本学は人文系、人文社会科学系の総合大学ですが、各分野からの学際的な取り組みが重要であるということがまず第1点です。

第2点は、大学として、当然人財育成ということが主要な課題です。その点におきまして、地域創造型の人財育成に努めていきたいと思います。人口減少の局面にありまして、地域の人財をいかに育成するかということが、これからの重要な課題の一つでございます。

その際に特に注目したいのは、地域が抱えている課題を発見し、それをいかに解決していくのかということについて、フィールドを重視した産官学の連携による人財育成の枠組みやシステムを構築していくことが必要ではないかと思います。

本学は、建学の精神といたしまして、地域社会に貢献する人財の育成、地域社会・地域文化への貢献ということを掲げています。それは全学部での共通課題でありますが、とりわけ、そういう課題をカリキュラムにも強く反映しているものが、本学にあります地域政策学部でありまして、地域の課題を担う人財を育成するということを主眼にしています。

したがいまして、そのような人財育成プログラムを作成し、今後も、それを発展させていく必要があります。

最後になりますが、3点目といたしまして、この三遠南信地域をいかに位置づけるかということで、いろいろな視点があるかと思います。中部圏におけるということが一つの視点でありますが、さらに広くは、やはり国際的な視点ということも重要ではないかと思います。愛知大学は海外の多くの大学・研究機関と協定を結んでおりますので、そういうネットワークも生かしながら、この地域の国際的

な視野から見た、その比較や特性ないしはお互いの協力ということも含めまして、世界の中の三遠南信という視点を大切にしていきたいと考えております。

コーディネーター

ありがとうございました。

愛知大学の三遠南信地域連携研究センターと地域政策学部は、重要な役割を果たしていらっしゃると思います。あまり名前を挙げてはいけないかもしれないけれども、三遠南信地域連携研究センター長の戸田先生などは国の会議などへもいつも来ていただいて、貴重な話をしていただいています。

それでは、豊橋技術科学大学　大貝先生、お願いします。

豊橋技術科学大学理事・副学長　大貝　彰　氏

個人的には、この三遠南信地域に二十数年、ほぼこのサミットの開催の回数と同じくらいかかわり続けてきておりますが、本日は大学の立場ということで、少し発言させていただきたいと思います。

本学、いわゆる工学系の単科大学です。そういった大学が、この三遠南信地域あるいはこの地域に対して、どう貢献ができるかという立場から、2点ほど発言させていただきたいと思います。

当然ながら、今、愛知大学の川井先生からも御発言がありましたように、今の日本の大学の置かれている状況としては、人財育成あるいは研究という点において、国際化ということは、もう外せない視点になっているわけです。国際化と地域という、その両立をさせていくことは大事なことですが、本学のような工学系の大学として大事な点が一つ、大きな点は産学連携、あるいは行政も含めて産学官の連携です。これを大学としてどう進めていくかということは非常に大きな課題でもあり、本学、昨年、開学して40周年を迎えましたけれども、開学以来、その推進をずっと進めてきておりますが、なかなか思うように進んでいないという課題もあるのが実情です。

本学としては、産学連携を頑張っております。平成27年度、文部科学省が産学連携の実施状況というデータを取りまとめておりますが、例えば、研究者が300名未満の小規模な研究機関の中で、民間企業との共同研究費の受入額は全国2位です。実は、ほとんど差はないのですが、1位はもう一つの兄弟校の長岡技術科学大学です。

それから、同一圏内企業、あるいは地方公共団体との共同研究、受託研究などの実施件数についても、東海地方の研究機関の中では6位です。

また、最近はURAという研究をコーディネートする方が大学におられますが、そういったURAが比較的少ない大学の中では、本学は全国1位の共同研究の受け入れ額となっております。

そういった意味で、かなり積極的に産学連携を進めてきているわけですが、実は、もっともっとこの拡大を強力に進めていく必要があるかと思います。ただ、そのためにどうすればいいのかということが、なかなかその答えがまだないところです。こうすればうまくいくということは、そう簡単ではありません。

実は昨日も、豊橋市で本学主催の産学連携をテーマにしたシンポジウムを開催させていただきました。その中で、こちらにおられま

す豊橋市の佐原市長と豊橋商工会議所の神野会頭にもパネラーとして御登壇いただいて議論をしてきたところです。

そこで一番御指摘があったのは、やはり大学の先生と地域の企業の方々の間をつなぐ役割を担える人がなかなかいないというところです。こういった人財をこれからどう育成していくのか、あるいはそういった人財をどう見つけてくるのかということが、これからの産学連携にとっては非常に重要になるのではないかと考えております。そういったことができれば、この地域のますますの発展、先ほど奥野先生から大学に対するこれからの期待、熱源という御発言もありましたが、そういった意味で、熱源になり得るのかなと思っております。

コーディネーター

ありがとうございました。

豊橋技術科学大学は、私の記憶では、日本の産学連携のモデルとしてまずつくるのだということで、行政の協力もあってできたと思っておりますが、三河や遠江等々の企業のバックボーンとして活躍していらっしゃるわけです。私は前の大学にいるときに、そういうワンストップサービスを名古屋大学でできないかと思って始めました。一般の方々にとっては、大学の敷居は高いのだそうですが、それをやりかけて、名古屋大学を辞めたので、現在どうなっているかわかりませんが、なかなか豊橋技術科学大学のようにはいかないのだろうと思っています。

では、続きまして、学校法人高松学園飯田女子短期大学　高松先生、お願いいたします。

学校法人高松学園理事長、飯田女子短期大学学長
高松　彰充　氏

こちらにおられる方々は、飯田の方が1番多いのだと思いますが、飯田女子短期大学は産業系の学校ではありません。置かれている学科は、看護であり、介護であり、あるいは保育でありという、そういう何かをつくるというよりも、むしろこの社会を支えて、先ほどの奥野先生の言葉で言えば、安心や安全といったものを確保していくという学校です。だから今後、この未来に何ができるのかということを話すのは、申し訳ありませんけれども、立場上、非常に難しいなと思います。私自身は、大学に通っていた時間以外の時間を全てこの飯田で過ごしておりますから、約50年近くこの飯田にいることになります。大変不躾でございますけれども、一飯田市民として感じたままの飯田のことを語らせていただきたいなと思います。

私が生まれたのは昭和39年、東京オリンピックの年で、非常に社会が揺れ動いている時期でした。私が生まれてから後の自分が思い出すのは、飯田がどう変わっていったかというところであり、この点について言えるのではないかなと思います。

まず、私の感覚ですと、飯田の流通の歴史は、交通の改革で随分変わりました。私が幼少の頃は、この飯田市と外部を結ぶものは、細い道を除いては、JR飯田線しかなかったわけです。東三河と遠州と南信州のつながりは、

そのときが一番強かったと思います。

冬にミカンが来れば、まず三ヶ日のミカンというように、当時は多くが遠州地域から来ていました。そして、私たちはどこに行くにも必ずＪＲ飯田線で豊橋まで出なければならなかった。だから、東三河と遠州と南信州はＪＲ飯田線で自動的につながっていたし、私どもが何かを買ったり、どこかに行ったりするときには必ず通らなければならない道だったのです

ところが、私が小学校のときに中央自動車道が開通しまして、まず名古屋とつながりました。途端に流通が一変して、東三河と遠州に向いていた道が一気に名古屋圏、中京圏へ流れるようになりました。ですから、しばらくの間、飯田は名古屋圏、中京圏を中心に回っていたかと思います。私も東京に行くときに、わざわざ名古屋に出て、そこから新幹線に乗っていったことが何度もありますから、その道が一番、この地域と外部を結ぶ道になりました。

その後、中央自動車道の全線開通で東京にもつながっているわけです。したがって、今、私どもは、例えば、ネットショッピングをすれば、東京あるいは中京圏から来ることになりますから、二大都市圏からこちらにつながっているということになります。

そういう観点からいきますと、三遠南信自動車道、とても魅力的な道なのですが、では実際に開通して何が変わるのかと考えてきたときに、流通の大もとである東京と名古屋とはもうつながっているので、では、あの道に一体何が通るのだろうということを考えてしまうわけです。

一番考えられるのは、それぞれの地域でしか買えないものが来るという、いわゆる特産品流通道路ということになりますよね。あるいは観光道路になります。

しかし、例えば、豊橋市や、浜松市のように非常に大きくて魅力ある都市と飯田市が本当に現時点で肩を並べて「飯田市だぞ」と言えるのかというと、非常に不安を感じてしまいます。ここから豊橋市、ここから浜松市に遊びに行くことはあるけれども、果たして、例えば、浜松市や豊橋市の方が三遠南信自動車道を通って飯田市に遊びに来るのか、私の感覚からいくと、例えば、飯田市を通り越して、中信、北信のスキー場に行くため、あるいは山登りをするためなど、いわゆる飯田市は単なる通過点になってしまう可能性が非常に高いのではないかと危惧をしているのです。

数年後にはリニア中央新幹線も開通します。リニア中央新幹線の拠点と先ほどから何度も声が出ています。私、新幹線に何度も乗りましたが、一方で1度も降りたことがない駅があります。乗客があまり乗り降りしたところを見たことがない駅もあります。もしかしたら、今のまま、ただ通っただけと、飯田市がそういった単なる駅だけあるところになってしまう可能性があるのではないかと、とても不安なのです。東京や名古屋へ出ていくことはあっても、南信州地域へ入ってくることがないということになりますと、とても寂しいことになってしまいます。

今、我々がしなければならないことは、飯田市の魅力とは何だと見つけることであり、そして、それを積極的に育てていくという、マクロだけではなくて、ミクロな視点も非常に重要になってくるのではないかと思います。

私が「飯田の魅力は何ですか」と学生に聞くと、答えが何も返ってこないです。学生の8割近くは飯田市周辺の出身なのですが、これは寂しいなと思いました。皆様はきっと、何かしらを答えられると思います。でも、それが果たして、例えば、浜松市や豊橋市の人を引きつけるのにふさわしいレベルのものなのか、そうでなければそこまで育てていかなければいけないと思います。リニア中央新幹線が開通し、三遠南信自動車道が開通する時代を前に、まず私どもが考えなければならない

のは、飯田市を単なる通過点にしないことにほかならないのではないかなと思います。

では、何を育てていけばよいかと言われてもなかなか私も思いつかないのですが、一つだけ言えることは、私も飯田市に住んでいて、いろいろな意味で大き過ぎず、小さ過ぎず、暮らすにはちょうどいいと感じており、結構捨てたものではないなと結構好きなのです。

飯田市は、皆様も御存じだと思いますが、日照時間が非常に長く、晴れの特異点ですよね。全国的にも珍しいレベルで晴れの日が多い、そういう場所ですよね。昭和36年に大きな災害がありましたが、そのときに大きな整備をしたおかげで、今、飯田市では、ほとんどそういう災害が起こらないです。

災害に強くて、例えば、どんなに日照りが続いても水も枯れません。私が生まれてからこの方、水道が断水で止まったという経験はほとんどありません。ですから、そういうところを生かして、しかも、これからリニア中央新幹線が開通し、高速道路が四方八方から向いてくるというこの地の利を利用することができるわけですから、例えば、物すごく極端な例で言いますと、首都の移転やあるいは省庁を積極的に呼び込もうとか、そこまでいかなくも、流通や経済などいろいろなものの拠点となるという考え方ができるのではないか、もちろんそれをするには大変なものが必要だと思いますが、もっともっと「飯田市というところはこんなところなのだよ」ということをアピールしていくことによって、そういう生き残りの道もあるのではないかと思います。もちろん私のざれごとではありますけれども、飯田市が今のままだけですと、少し寂しい未来が待っているのかなと思います。

ただ、今の飯田市も私、十分好きですので、この雰囲気を残しながら、ぜひ発展していただく、そのような道を歩んでいきたいと思うわけでございます。

コーディネーター

ありがとうございました。

私は、リニア中央新幹線ができれば、通過点というよりも、ゲートウェイとしての意義が大きいと思うのですね。北の駒ヶ根市から南の浜松市のゲートウェイとしての意味は大きいですし、東京までは近いし、名古屋までも15分か20分です。電車賃の問題はありますが、先ほどのワーク・ライフ・バランスの拠点として、これは飯田市だけでなく、甲府や中津川などでも注目しているところです。

どうもありがとうございました。

では、続きまして、豊橋市商工会議所　神野会頭、お願いいたします。

豊橋商工会議所会頭　神野　吾郎

経済・産業界の立場から、経済をどうやったら活性化できるかということを考えているわけですが、今、お話がずっとありましたように、やはりそれぞれが持っている価値、つまり会社の価値だったり、地域に住みたいという価値だったり、学校の価値だったり、そういうのを高めることが第一だと思います。

それだけでは足りなくて、人が住むためには多様性などいろいろなことが大事ですので、そういった意味では、ネットワークが必要だというようなことで、豊橋商工会議所が音頭を取っている東三河広域経済連合会では、様々な連携を進めています。まず、皆様からお話がございました産学官の連携、それに加えて、農工商医の連携を進めております。も

う一つは、やはり地域連携です。地域連携は、東三河という単位もありますし、この三遠南信という単位もあると思いますが、こういった地域連携においてそれぞれ違ったものと連携をすることによって新しい価値が必ず生まれるということを思いますし、今はそういった時代ではないかなと思います。その連携等を可能にする人、ファシリテートできる人、これをやはり実践の中で育てていくことが極めて大事だと思っています。

そういった中で、本日は二つ提案をしたいと思っています。

一つは、豊橋市がパートナーシティ提携していますドイツのヴォルフスブルグというフォルクスワーゲンの本社がある都市です。フォルスワーゲンの車を輸入している三河港があるということで、30年くらい、私もかかわっているのです。ヒトラーがつくったフォルスワーゲンの工場のある町ですが、もともと工場しかない小さな町で、90%以上がフォルクスワーゲンに勤めているというような町だったわけです。

1990年代の中くらいから、海外移転やドイツの産業構造の変化の中で非常に疲弊をして、失業率が20%近くまであったのですが、そのときにヴォルフスブルク AG という、まちづくり会社、地域づくり会社みたいなものを産官でつくりまして、都市計画であったり、商業であったり、教育のことであったり、流通のことであったり、スポーツのことであったり、いろいろな取り組みを全部行いました。それによって、今では大変魅力的な町になりまして、ドイツでも有数の住みたい町になっているということです。個人としてのファシリテーターも必要ですが、株式会社がいいかどうかわかりませんけれども、ファシリテートできる組織の存在が必要かなと思います。

もう一つは、JR 飯田線についてです。本日午前中の経済界の会議でもそういうお話がありましたが、この豊橋市、浜松市、飯田市をつなぐ JR 飯田線を、運行は JR 東海にやっていただくにしても、DMO みたいな運用組織、こういったものを地域でつくってみるというようなことで、その JR 飯田線をシンボリックな象徴として、三遠南信地域がいろいろな切り口を考えると、それは全国、また、世界から人を呼び込むことができ、面白いのではないかと思います。

コーディネーター

ありがとうございました。

豊橋市は何といっても、オンリーワンというか、ナンバーワンというか、車の輸入港である三河港がございまして、私は、三河には国際スクールのようなものが要るのだろうと感じています。

ありがとうございました。

それでは、続きまして、浜松商工会議所大須賀会頭、お願いいたします。

浜松商工会議所会頭　大須賀　正孝

経済界から言いますと、浜松という町の工業は、自動車産業、ピアノ・楽器産業、あと光産業という三つで成り立っています。皆様、そして浜松の人も、浜松市は工業都市と思っているけれども、実際は、浜松は農業も、商業も、結構バランスがとれている町です。そういった視点から考えると、浜松はこの三遠南信自動車道が開通したら、様々な産業が交流できる本当に夢の道路だという感じがします。

今朝もここへ車で来ましたが、豊田経由で行きますと、3時間もかかり、お金も非常にかかります。これが、三遠南信自動車道ができると、時間もお金も半分になり、経費全部が下がっていきます。時間も半分、コストも半分になるということはものすごい経済効果です。それと、この長野・飯田の方が1時間で浜松まで来ますと、夏場になると海水浴も簡単に来られます。道路ができて近くなるということは、こうしよう、ああしようではなく、そのときに「あれもできる、これもできる」ということで、今は思いつかないようなことがいっぱい出てくると思います。

したがって、三遠南信自動車道は、絶対に夢の道路であり、三遠南信地域の交流が本当に上手くいくためには、この道路を何が何でも早く開通させなければいけないということです。

コーディネーター

ありがとうございました。

今、会頭から、速く行けることの大事さの話がありましたが、大事なことですね。高速道路ができることによって、距離が離れていても産業に集積の利益が出てくると思います。いろいろな産業が一つの町の中に集約すると効率的になりますけれども、それと同じ効果を持つわけです。今、その効果がどういうものかについて国土交通省で分析を始められたところです。今からそういう点についても注目すべきだろうと思っています。

ありがとうございました。

続きまして、飯田信用金庫　森山理事長、お願いいたします。

飯田信用金庫理事長　森山　和幸　氏

本日は、南信州エリアの産業界代表ということですので、私は金融機関ではありますが、産業界の立場で話をさせていただきたいと思います。先ほど来、お話がありますように、2027年にはリニア中央新幹線が開通します。それと同時に三遠南信自動車道が全線開通できる見通しになっており、この地域が非常に大きく変わることは明白なわけです。

ただいまもお話がありましたように、時間あるいは距離の短縮ということですので、このアドバンテージは非常に大きいと思っております。これを産業振興あるいは地域の活性化に生かしていくことが必要であるということです。

具体的な取り組み策はいくつかありますが、時間の関係もありますので、一つに絞って詳しくお話ししたいと思います。

道路開通のメリットの一番は、南信地域と浜松あるいは豊橋地域との距離が縮まるということで、そちらの地域の企業とのお取引が活性化することが最も大事だと思っております。

そのためには豊かな自然を生かした観光等での交流人口の増加や、今は働く場所が少なくて若い人たちが都市部へ流出しているのですが、道路開通による地域の魅力を生かして、若い人たちを戻してくるというような取組みを考えたいと思っております。

また、東海エリアの企業の皆様との取り組みについてですが、先ほどの基調講演でも、

東京一極集中という中で、国が災害に強い国をつくっていくというお話がありました。現在課題となっている首都圏での直下型地震や東南海沖の地震などに対する対応策は、リスク分散機能の視点や、IT 化がどんどん進んでいる中でデータ等のバックアップ機能といった面から多くの企業の重要な課題になっていると思います。

企業や行政機関の BCP 対策の最適な地域として、これから情報発信して、この地域へ企業、あるいは出先機関を持ってくるということに取り組んでいけばいいかなと思っております。

現在は単なる長野県の南の県境が、三遠南信自動車道やリニア中央新幹線によって長野県の南の玄関口、それから三遠南信地域の北の玄関口という位置づけになることによって、東京や名古屋、また浜松、豊橋地区に企業や行政の拠点を集中させなくても、この飯田に分散して置いてもらっても全く困らない地域になるのではないかと思います。

現状、この地域は非常に高齢化率も高くて、若年労働者も少ないという弱みもありますが、三遠南信地域の連携による力と、リニア中央新幹線及び三遠南信自動車道の開通による時間と距離の短縮効果という強みを生かすことで、産業振興、ひいては人口の移動といったところにもつなげていければと考えております。

コーディネーター

ありがとうございました。

飯田信用金庫には、もう一つ、別の顔といいますか、本日は時間がなくてあまりおっしゃらなかったかもしれないけれども、地域や市民団体の取り組みに対する金融支援を熱心にやっておられると理解しておりまして、これは、全国の中でも有数の信用金庫だと思っております。

飯田信用金庫理事長　森山　和幸　氏

ありがとうございます。後程お話しをさせていただく機会があるそうですので、そのときに少しお話させてもらいたいと思っております。

コーディネーター

ありがとうございました。では、続きまして、愛知・長野県境域開発協議会　永嶺天龍村長、お願いいたします。

愛知・長野県境域開発協議会会長　天龍村長　永嶺　誠一

まず、私どもの協議会につきましては、愛知県と長野県の県境にある町村が、現在は5町村でございますが、相互協力と、それから、交流を通じまして県境地域の開発・振興を図りますとともに、県境を越えた新たな山村づくりを目指すために、昭和52年に発足をし、今年で40周年目を迎えるところでございます。この間、先人の皆様方の御尽力によりまして、道路交通、それから産業振興、住民交流など、様々な取り組みがなされてきています。

このたび、愛知大学三遠南信地域連携研究センターの御支援・御協力によりまして、「県境をまたぐ共生圏の創生」という冊子を発刊することができました。共同研究や御支援を賜りました研究センターの戸田センター長をはじめ、愛知大学の関係者の皆様に、この場をおかりしまして御礼を申し上げるところでございます。

内容につきましては、後ほどごゆっくり御覧いただきたいと思いますが、本日は、その冊子の中にも掲載をしてございます、本年1月11日に、「県境地域連携による地域づくり」と題しまして議員の研修会が行われたわけでございますが、その折に、三遠南信の地域づくりへの期待、あるいは次期三遠南信地域連携ビジョンへの期待についての議論にも及んでおりますので、本日は、私からその点のことを踏まえてお話をさせていただければと思っております。

御承知のように、私どもの地域につきましては、長野、愛知、静岡の県境にある山間の地域でございます。現状では、人口減少、それから高齢化が極めて厳しい状況にありますが、県境地域の各町村では、これまでに教育、それから林業、農業、観光、スポーツ、移住措置など、それぞれ独自の地域づくりを実践してまいったところでございます。

県境地域につきましては、三遠南信地域の中心部にちょうど位置しておりまして、歴史的にも東西南北の交通が交差する地域でもございまして、リニア中央新幹線が整備される時代の中にあっても、その特性を失うことなく、地域の将来に結びつけることが必要であると考えています。

また、SENAが推進します三遠南信地域連携によりまして、ハード面では三遠南信自動車道をはじめとする道路整備、そして、ソフト面では、ドクターヘリや防災体制、広域的な文化・観光の情報発信や誘客に結びついており、山間部と都市部の連携の基盤が整備をされてきたところでございます。

その反面、これらの効果には都市部から山間部に及び切らない点が多々ございまして、特にリニア中央新幹線、それから、三遠南信自動車道の全通に際しましては、通過地域にならないための対応が今後必要になってこようかと感じているところです。

これらを踏まえまして、私ども愛知・長野県境域開発協議会としましては、地域の持続性を確保するため、県境地域が一体となった計画の確立と、計画実現に向けた活動を進める決意でございまして、ぜひ次期三遠南信地域連携ビジョンにおきましても、次の取り組みにつきまして、ぜひ御支援いただければありがたいと思います。

一つ目は、三遠南信自動車とのダブルネットワークとしての国道151号の整備、近隣リニアへのアクセスの確保、東西道路の整備、これが1点です。

2点目としましては、山間部の観光資源を生かしたJR飯田線の活性化。

3点目は、県境地域での茶臼山等を中心とした広域観光事業の促進。

4点目は、山間部定住促進と移住事業促進として、特に県境を越えた医療特性、山間部小規模企業への支援、結婚に対する後継者対策の都市部との共同事業の推進。

5点目としましては、地域の担い手となる人づくりのための教育の連携。

6点目としましては、流域圏における都市部市民、企業、行政など、様々なネットワークの構築。

以上の六つの項目でございます。

コーディネーター

ありがとうございました。

私の理解だと、最近、JR飯田線は移動手段というよりも、沿線の秘境をゆっくり走る鉄道としての全国的評価が高いようですね。移動手段としても大事だろうと思います。

続きまして、SENA会長　鈴木浜松市長、お願いいたします。

浜松市長　鈴木　康友

三遠南信地域の連携は、県境を越えた広域連携ですが、まず県とは何かということを考えたいと思います。これは私の勝手な県の解釈でございますが、県には大きく二つの役割があると思います。

一つは、国のいろいろな方針や施策を確実に市町村に実行させて、そういう指導監督、あるいは財政的な面も含めての支援というある種、国の出先機関としての役割です。

もう一つ、防災や工業、農業、観光などといった広域の振興を広域行政として行うという、大きくはこの二つではないかと思っています。特に、このうちの後半の部分、いわゆる広域行政の部分を私はこの三遠南信地域の連携がむしろ主体的に担っていくことが必要ではないかと思っています。

例えば、私ども浜松市がございます静岡県は、もともとこの静岡県ができた経緯から言っても、浜松県と静岡県と足柄県という三つが合併させられて今の静岡県になっているものですから、東、中、西という三つの区域分けがあるのです。

では、私ども西部が何か東部地域と具体的な連携事業をやることがあるかというと、これはほとんどないのです。では、静岡県が担うべき広域行政は何だというと、あまりないのですね。ですから、必ず県としても、東部に対する施策、中部に対する施策、西部に対する施策と三つに分けなければいけません。むしろ私どものところは、例えば、産業政策などでも、国の知的クラスターは東三河地域と組んで浜松・東三河のクラスターで認定を取っていますし、経済産業省の経済クラスターの場合は、三遠南信地域で認定をいただいています。これは県の境目というものは、いったい何だろうという話になるので、これからは、むしろこういう広域で行う施策については、県ではなく、もうこの三遠南信地域が主体的にこれを推進していく必要があるだろうと思います。

冒頭、私の挨拶のときに申しましたけれども、国もこうした地域連携や広域連携について大変高い価値を見出し始めていますので、むしろこの三遠南信地域がさらに実体を持って、今進めている広域連合などの実体をつくっていって、国の支援の受け皿になり、あるいは主体的に産業政策、観光や防災といった広域的な施策をこの地域が一体となって行っていくということです。

おそらく、南信州地域などもそうだと思うのですが、長野県一体でやるこういう行政はあまりないと思います。愛知県の場合は多少違うかもしれませんが､いずれにしましても、私はもう県という境目は、これからはあまり意味がなくなってくるのではないかという気がいたしまして、そうした時代を先取りする取り組みとしても、この三遠南信連携というのは大いに推進をしていくべきだと思っております。

コーディネーター

ありがとうございました。

先ほど、三遠南信地域は広域連携のモデルと申し上げました。特徴は、今、市長がおっしゃったとおりでして、カバーされている分野の範囲が非常に広いですね。広域連携の例としていつも挙げているのが、例えば関西の歴史街道計画ですが、これは広域観光に特化しています。それから、グレーター・ナゴヤ・

イニシアチブも成果を上げてきておりますが、これは海外企業の誘致ということでして、そういう意味では、三遠南信は一つの行政体のような、非常に広い分野だというところが大きな特徴だと思っています。

では、続きまして、SENA副会長　佐原豊橋市長、お願いいたします。

豊橋市長　佐原　光一

実は東三河の地域が遠州地域と南信州地域にずっとお待たせしましたという状態を20年近くつくっていたのです。それは、いろいろな広域の取り組みをするときに、浜松を中心とした遠州地域のまとまりと、飯田を中心とした南信州地域のまとまりに比べると、東三河は一体どうなっているのかという話がずっと残っていました。それを解消する答えとして東三河広域連合を発足して2年ですけれども、やっと動き始めました。

原点は、なぜ広域で連携してやるかということの答えみたいなものなのですが、私たち市町村は、基礎自治体と言いまして、都道府県とは違い、直接市町村民と向き合っていろいろな仕事をやるという特徴を持っています。

でも、そういう仕事の中に、市町村同士が手を携えてやったらより効率がよくなる、効果的にできる仕事がある一方で、それぞれの市町村でなければわからないようなこともあります。そういったものを総合的に一番上手にやれる仕組みは何かということを考えたときに、東三河広域連合という道を歩むこととしました。

東三河地域は、先ほど来のお話で言いますと、一番北には茶臼山のスキー場、南の太平洋岸には、冬でもサーフィンをやっているところがあるような多種多彩な特徴を持った地域です。地域の人たちがそれぞれの伝統・文化に則って行っているいろいろな行事や、仕組み、仕掛けがあります。こういった部分は、これまでどおり、それぞれの市町村が担っていけばいいし、それぞれの市町村民と直接対話する部分は、役場や市役所にお任せしてもいいけれども、一緒にやることで効率がすごく高くなるものについては、ぜひ一つのプラットホームの中で一緒にやりましょうということで広域連合を始めました。

成果を皆様にお見せするということが、これからの大きな課題ではありますが、私たちは自信を持って、成長する広域連合として、ますます住民と直接向き合う仕事について都道府県から権限をいただいてやれることは広域連合で行い、市民に、町民に、村民に、より近いところでお届けしていこうではないかと思っています。

そして、もう一つ、広域連携をこれから三遠南信地域でも進めていこうとする中で、次のような事例が過去にありました。

私たち豊橋市も、先ほど浜松市長がおっしゃったように、実は農業の町なのです。また田原市は日本一の農業の町なのです。一緒になって、香港、シンガポール、クアラルンプールなど海外の都市へ販路拡大に出かけていきますと必ず「リンゴはありませんか」と言われます。すぐお気づきですよね。「リンゴは、南信州と組めば用意できるじゃん」。これが私たちの三遠南信地域で一緒にやる答えの一つの典型的な事例かなと思います。私たちが一緒に取り組んだら、すごい力を持っています。日常生活の中で、皆様が普段何げなく感じていることが、外から見たら素晴らしいことだということになかなか気づかないでいます。

それをそれぞれの地域が連携し合うことで気づき、その素晴らしいことをみんなの力として届けることができる、それが三遠南信地域の広域の取り組みの未来像であろうかと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

大変力強い御意見でした。そのためにぜひとも、三遠南信もそうですし、全国どこの地域もそうなのですけれども、ミッシングリンクをなくしていくことを早期に実施することが大事なのだろうと思っております。

では、最後になりましたが、SENA 副会長牧野飯田市長、お願いいたします。

飯田市長　牧野　光朗

今、いろいろな皆様方からのお話をお聞きして、やはり、三遠南信地域というものは非常に結びつきが強い地域だということを改めて感じたところです。それぞれの地域は、もちろん特徴があるのですが、圏域全体で何かまとまっていきたいというある種の求心力が働く。こういった県境地域では、いろいろな県境域の取り組みがあり、今は全国で、そういったことを先生方にも調べていただいていますが、一番強力に推進しているのは、この三遠南信圏域ではないかと改めて思うところです。

私どもの飯田、南信州地域は、リニアの時代に入ってくれば、当然、三遠南信地域の北の玄関口としての機能を果たしていくことになると思うのです。東京品川まで約45分、名古屋まで約25分という位置関係になるということは、言ってみれば、通学や通勤ができるわけです。また、現在、北陸新幹線沿いで移住・定住が進んでいる状況を見れば、先ほど高松学長からお話がありましたように、住むには実にいい地域だという見方をする方が多分大勢出てきて、そういった方々が我々の地域に移住･定住していくということになると、またいろいろな可能性が出てくるだろうと考えております。

特に、私が期待していますのは、本日も大学の先生方が何人もいらっしゃっていますが、そうした学術研究をされている皆様方は、大都会のごみごみしたところだとなかなかリフレッシュできなくて、休日に頭を休めるためにリフレッシュできる空間を求めるということがあると思うのです。先ほど神野会頭から御紹介いただいたドイツのように、欧米などはみんなそうなのですが、およそ学術研究をやっている皆様方は、週末、山や海に入っていってリフレッシュして、そして頭を休めることをするわけです。そういう意味では、まさに海もあれば山もあるという三遠南信地域は、学術研究者にとっては非常に活動がしやすい、住みやすい地域になっていくのではないでしょうか。なおかつ、大都市圏との距離も近いわけですから、そういった地の利を生かす中で、学術研究都市圏をこの三遠南信地域の中にしっかりとつくっていくことができれば、私は大きなポテンシャルが顕在化してくると思います。

実際、そういった地域にこそ、私は、むしろ優先的にとあえて申し上げますが、社会資本整備を促進させて、ミッシングリンクを解消させ、早くそういったポテンシャルを顕在化させることをやっていかないといけないと思います。奥野先生からお話がありましたが、均衡ある発展はもちろん結構なのですが、今

の右肩下がりの状況ということを考えたときに、ポテンシャルを引き出せる地域に対しての社会資本整備というものは、イノベーション誘発剤としてしっかりと優先的にやっていくことこそが必要ではないかと思います。

三遠南信自動車道をはじめ、この地域の社会資本整備につきましては、ポテンシャルを引き出してイノベーションを誘発させるのだという姿勢で望むことがいいのではないかと考えております。本日は中部地方整備局の塚原局長もいらっしゃいますので、その前であえて大きな声で申し上げさせていただきますが、この地域こそ日本を引っ張る、それだけのポテンシャルがある地域ですから、ぜひそうした目でこの地域を見ていただきたいということを申し上げさせていただきます。

コーディネーター

ありがとうございました。

私は、第1次国土形成計画でも、今度の第2次国土形成計画でも、「国土の均衡ある発展」という言葉はやめようということを主張してやってきたのですが、両方とも失敗いたしまして、現在も生きております。北海道の総合開発計画の会長もしておりまして、北海道のミッシングリンクは大事業で、最近は「国土の均衡ある発展のフレーズはやめた方がよいのではないか」とあまり言わないようにしております。

皆さんの話を聞いていますと、「第2部があるから話を残している」ということでして、ここでやめたら後で怒られそうなので、もう一回り話をさせていただきたいと思います。

では、川井先生、お願いします。

愛知大学理事長・学長　川井　伸一　氏

先ほどの補足として2点、お話をさせていただきます。

1点は、先ほど、SENA と愛知大学との提携の話をいたしました。愛知大学の中に SENA の事務局分室を置き、事務局の機能強化ということをお話ししましたが、ポイントは、SENA の次期地域連携ビジョンについて、その企画・立案について、愛知大学の中の三遠南信地域連携研究センターがお手伝いをするという役割を担うことです。これ自体は、やはり極めて注目されることではないかと思います。地域連携と大学とのあり方を考える一つの典型的な事例ではないかと考えております。

もう一つの点でございますが、地域連携にかかわる地域に役立つ人財の育成という点で地域政策学部のお話をいたしましたが、一つだけ言い忘れたことがございました。地域政策学部の中に、「食・農・環境」という新しいコースを2018年度に設置するということで、今、準備を進めているところでございます。これも、地域政策学部が単に東三河に限らず、三遠南信地域の農業関係の産業に役立つ人財の育成につながっていければと考えているところです。

コーディネーター

ありがとうございました。

今、川井先生から「食・農」にも取り組むという発言がありましたが、これは本当にすばらしいことで、豊橋技術科学大学は、企業の窓口ということでしたが、三河は西三河も東三河も、日本きっての高付加価値の大農業地帯でして、その農家の相談役に愛知大学がなっていただけるということは大事なことだと思います。名古屋大学の農学部は、かつての安城農林ですが、名古屋に移ってしまいました。三河には農に関する研究機関が要るのではないかとずっと思ってきたところです。

では、大貝先生、お願いします。

豊橋技術科学大学理事・副学長　大貝　彰　氏

三遠南信地域がこれまで長い間、この地域のいろいろな広域連携の取り組みをやられてきましたし、この後の分科会でいろいろな議

論をされるわけですが、そういった中で、いわゆるアカデミックな立場からしたときに、データの整備がなかなかできていないというか、この地域を客観的に捉えるためのデータが整備されていないとつくづく感じています。

最近はIoTであるとか、AIであるとか、コンピューターの能力が極めて高まっていますし、ぜひ、特にこの三つの県境をまたいだエリアのGISを活用した空間データの整備ということをきっちりやっていただいて、それをもとに、本当にこの地域がどうなっているのかということを見える化し、それをもとに新たな広域連携の展開をお願いできたらなということが私の言いたいところです。

コーディネーター

ありがとうございました。

続いて、高松先生、お願いいたします。

学校法人高松学園理事長、飯田女子短期大学学長　高松　彰充　氏

我々は、この地域に住む人、そして、入ってくる人たちの安心と安全を守り続けることにこれからも尽力し続ける、それだけでございます。

一つだけお願いしたいのは、県境、無視できるものは全部無視して、ぜひ一緒にやっていただけるとありがたいなと思います。長野県は、「ほとんど長野、時々松本」で、飯田にはほとんど何も入ってこないのです。ですから、南信というところは長野県ではないと思っている方もいらっしゃって、私も時々会議に行って、「愛知県飯田市の高松でございます」とよく言ったことがあるのですが、それが冗談ではないくらいに、長野市へ行くよりも名古屋市のほうが近いのです。

それが、三遠南信自動車道が通ることで、とても近くなります。だから、これだけ近くて、県境があるから違うところという考え方はむしろ不自然ですから、一体化したものとして、例えば、同じ市として、同じ県としてというような感覚でぜひおつき合いさせていただけるとありがたいと思います。

コーディネーター

ありがとうございました。

続いて、神野会頭、お願いいたします。

豊橋商工会議所会頭　神野　吾郎

先ほどもお話ししましたが、三遠南信自動車道は物理的にまだ少し時間がかかると思います。ですので、JR飯田線をシンボリックな象徴として、沿線各地の観光資源を南北に結びつけるということとともに、本当の意味での日本の美しい山だったり、村だったり、そういった原風景を楽しめる資源ですし、これは、日本全国、また、世界中から人に来ていただけるような魅力のあるものになると思います。それらを通して、いろいろな活動、いろいろな活動、新しい価値創造ができるプラットホームになってくるのではないかと考えます。その一つの成功体験を通じて地域をつくっていくというようなことが非常に近道ではないかと思います。

コーディネーター

ありがとうございました。

続いて、大須賀会頭、お願いいたします。

浜松商工会議所会頭　大須賀　正孝

三遠南信地域の連携として、私は何か一つ、形をつくってみたいと思うのです。やはり、経済などいろいろありますが、飯田、豊橋、浜松など三遠南信地域が一緒になって観光のルートをつくってみるなど様々な可能性を探ってみて、口で言っているだけではなく、行動に移すことで、様々な事が見えてきます。例えば、本年のNHK大河ドラマは、井伊直虎を主人公として浜松が舞台ですが、三遠南信地域内にはほかにも縁の土地が沢山あります

し、そういうものをまとめて、一緒になって活動すると、本当に三遠南信地域がすばらしいと感じることができるでしょう。先ほどの飯田信用金庫の三遠南信地域に関する調査のデータの中で、知らない市町村が同じ地域の中でもいっぱいあるから、そういうことのないように、三遠南信地域内のどこもこのようないいところがあることがわかるように、私は観光等で一体に行なって良いと思いますので、一生懸命努力していただきたいと思います。

コーディネーター

ありがとうございました。

観光としては、政府は昇龍道に注目しておられますが、これは非常にいいアイデアだと思うのです。昇龍道のルートとして、浜松を起点にして、飯田を通って、それから、馬籠、妻籠を通って、東海北陸自動車道に抜けるルートがあるのではないかと思っています。昇龍道の「龍」は、尻尾でも胴体でも、かなりくねくねできるのがいいので、大事なことだと思っております。

それでは、続いて森山理事長、お願いいたします。

飯田信用金庫理事長　森山　和幸　氏

本業である金融機関の立場で少しお話をさせていただきます。本日、三遠南信サミットは24回目ということでございますが、実は、三遠南信地域に本店を置く八つの信用金庫が三遠南信しんきんサミットという取組みをやっておりまして、これが平成28年度で9年目になります。

そのような中で、昨年の夏に三遠南信自動車道に関するアンケート調査を八つの信用金庫が協力して行いました。その結果は冊子にまとめてありますので、もし必要であればそれぞれの金庫へ言っていただければいいのですが、その中でわかってきたことをお話しいたします。

一つは、地域間の意識の差がまだ非常に大きいということです。これからそれぞれの金庫が中心になって地域間の情報交換や人の交流などに積極的に取り組んでいきたいと思います。

それと、もう一点、観光というキーワードで三遠南信地域の八つの信用金庫はどう取り組むことができるかということで、実は私どもも本年5月から7月にかけて、浜松地区へお客様を1,000人ほど御紹介させていただきます。三遠南信地域のネットワークの事業としてこうした取組みを金融機関同士がやるということも、交流人口の増加につながるものと考えて取り組んでおります。

それから、もう一つ、地域連携の事業の事例としてお話させていただきます。先ほど来、お話が出ています田原市、採石所の跡地の活用策としてサツマイモの栽培に取り組まれる中で、そのサツマイモを何とか生かせる方法はないかということで焼酎をつくったらどうかということになったそうです。しかし、田原市には酒造会社がないことからお取引信用金庫を通じて私どもに御照会がありまして、飯田の酒造会社を紹介して、「亀若」というブランドの焼酎ができております。このようなことも我々金融機関ができることとして取り組んでおりますので、こうしたことをこれからも広げていけたら地域金融機関としての役割を果たせるのではないかと思っております。

コーディネーター

ありがとうございました。

続きまして、永嶺会長、お願いいたします。

愛知・長野県境域開発協議会会長　天龍村長　永嶺　誠一

では、私から要望ということで1点だけお願いしたいと思います。今回、私どもは愛知・長野県境域開発協議会としてこの場に寄せさ

せていただいたわけでございますが、なぜかと考えますと、40年前から、県境をまたいだ、こうした連携や交流をずっと続けてきたという、その評価をいただいたのではないかと感じるわけでございます。当地域につきましては、三遠南信地域の地図を見ていただいてわかるように、ちょうど中心部にあるわけでございます。冒頭、開会の挨拶の中でも出ましたが、次回のサミットで9巡目を迎える時期にもありますので、ぜひ可能であれば、この機会に、三遠南信地域の山間部での開催をぜひ御検討いただければありがたいかなということをお願いいます。

コーディネーター

ありがとうございました。

続いて、鈴木市長、お願いいたします。

浜松市長　鈴木　康友

手短に問題提起だけとなりますが、先ほど府県の話をしましたが、そろそろこの府県とは何かということを少し考える時期が来ているのではないかと感じています。これは、明治になってから305できた府県が、最初の第一次合併で75になります。明治9年の大合併で38まで減るのですが、それから分離運動が起きて明治21年に香川県が愛媛県から分離して47になるのです。明治21年に47府県体制ができ上がって、129年間、微動だにしないのです。これだけ世の中が変わって、人口移動もしているし世の中も変わったのに、府県だけは変わらないということです。ちなみに、基礎自治体と言われる市町村は、当時、1万9,000弱あったのが、今、約1,700です。世の中がこれだけ変わって、129年変わらないこの府県がどういうものかということをそろそろ問う時期ではないかということが、私の問題提起でございます。

コーディネーター

ありがとうございました。

続きまして、佐原豊橋市長、お願いいたします。

豊橋市長　佐原　光一

第一点は、先ほど少し言い残されていたインターナショナルなグローバルな動きの中で、地域の企業が、外国から優秀な幹部を呼び寄せるのに学ぶところがないと。もう一方で、我々の地域で、これから世界に羽ばたきたい人たちが学ぶところがないということで、英語を学べる小中高までは我々が責任を持つので、大学についてはぜひ奥野先生たちに責任を持っていただきたいと思います。我々は高校までに責任が持てる体制を何とか切り開いていきたいということで、第一歩、本年4月から動き始めます。

もう一点は、先ほど来、出ている三河港です。三河港は貿易額で言いますと、全国で成田空港や関西国際空港を入れても9番目、港だけですと7番目です。そのくらい大きな港です。清水港よりも、四日市港よりも大きな港ですので、ぜひ誤解なく、安心してお使いください。

コーディネーター

正直申し上げて、三河港というのは大事な港です。三遠南信の基幹の港であり、さらに、三遠南信自動車道ができるということは三河港にとっても大事だと思います。

それでは、牧野市長、お願いします。

飯田市長　牧野　光朗

最後になりましたが、やはりこういった三遠南信圏域のつながりをしっかりと確かなものにしていくために、人とのつながりをもっともっと深めていく必要があると思います。

特に、行政としてのつながりをどう深めていくかということにつきましては、これから

が非常に重要になってくると捉えております。

私ども南信州広域連合の市町村長は、毎月1回、必ず本人が出席して、地域の広域的な課題について話し、それに基づいた様々な取り組みをずっとやってきております。行政のトップがそうした機会をいかに多くしていくかということが大事になっていくと思います。

ちなみに、私が市長になったころは、本日いらっしゃる浜松市長や豊橋市長とは、このサミットで会って話をする、まさに年に1回の行事というような感がありました。今は、年に少なくとも4、5回は3人で会って話をしているくらい関係を深めております。

私が申し上げたいのは、その3人だけではなくて、やはり三遠南信圏域全体でこういった首長の皆様方の関係をつくっていくためにはサミットだけでは不十分であり、だからこそ三遠南信地域の広域連合をしっかりと検討し、設置することこそが、これからこの地域のポテンシャルを引き出すために、行政としての役割を果たすために非常に重要であると思っています。ぜひそういったことをここでもう一度強調させていただきまして、私からの話とさせていただきます。

コーディネーター

ありがとうございました。

パネラーの皆さんには協力をいただき、ポイントを絞った興味ある発言をいただいたように思います。スーパーメガリージョン構想によって、三遠南信地域には、これまでとは違った未来が待ち受けていると思います。大学教員として言いますと、一つは、牧野市長から話がございました研究環境です。大学に近いということは大事であり、三遠南信地域はいいポジションにあると思います。

それから、2番目にワーク・ライフ・バランスで、皆さんから移住という言葉がでましたが、居住地域で選ばれる可能性は高いと思います。愛知県が、東京に単身赴任している方を対象に、「リニア中央新幹線が開通した場合こういう条件になるけれども、あなたは単身赴任しますか、通いますか。」と質問したところ、4割弱の人は「通います。」という回答でした。リニア中央新幹線が開通すると、飯田から品川まで行くのにかかる時間は、多分20分から30分だと思います。これは非常にいい条件でありまして、電車賃の問題があるけれども、居住地域の選択肢が変わってくると思います。

それから、安全・安心です。今、国土の強靭化では、海の地震と津波の南海トラフの次のテーマとして、内陸部の巨大地震の話をしております。山が崩壊して天然ダムができる等々のことでして、この地域にもきちんと整備をしなければいけないところがたくさんありますので、その辺にもぜひとも関心を持って安全・安心な地域をつくっていただきたいと思います。

本日のトークセッションで、今後の三遠南信地域の取り組みにおいて考えるヒントを皆様が得られれば、それで役目を果たせたと思います。

パネラーの皆様には、時間に御協力いただきました。以上で終わらせていただきます。

ありがとうございました。

■SENA 報告

「三遠南信広域連携研究会に関する報告」

「三遠南信地域連携ビジョンの評価検証にかかる中間報告」

SENA 事務局長　藤野　仁

昨年のサミット宣言に盛り込まれました広域連携強化に向けました研究会を本年度立ち上げ、活動してまいりました。その研究成果を研究会でまとめましたので、SENA 事務局からその内容をお伝えいたします。

この研究会は、三遠南信地域の35市町村全ての行政の担当課長で構成し、本地域に適した広域連携事業と、それを実現するための体制について、情報の研究・整理を行いました。

研究会は3回開催し、その間、構成市町村へのアンケート調査を実施しております。

アンケート調査によりますと、この地域では地方自治法に基づきます共同処理が173件、任意の広域連携が59事業実施されておりました。これらの広域連携事業を調査したところ、観光、防災、移住・定住、そして、農産品といった分野に期待が多いという回答がございました。これらの4分野の事業を例に、現行の制度による体制に適するものを想定いたしました。

観光につきましては、地域一体の観光プランの策定やプロモーション事業をイメージしまして、体制として、協議会、事務の委託、広域連合などの相性がいいだろうということになっております。

その他の三つの分野については、御覧のとおりでございます。

今後でございますが、この研究会の活動につきましては、例えば、体制ごとの財政シミュレーション等のメリットとデメリットの比較、さらにはモデル事業のいずれかを試験的に運用していくことで具体的な検証などが考えられるだろうという報告書になっております。

詳しくは SENA ウェブサイトに公開しておりますので、御覧ください。

続きまして、三遠南信地域連携ビジョンの検証報告をさせていただきます。

資料の「中間報告概要版」を御覧ください。

三遠南信の地域づくりの指針とも言うべき現在のビジョンの計画期間が平成29年度をもっておおむねの満了を迎えます。このことから、現在、ビジョンの検証を行っているところでございます。

この検証作業は愛知大学に進めていただいておりますので、愛知大学三遠南信地域連携研究センターの村山研究助教から報告します。

愛知大学　三遠南信地域連携研究センター研究助教　村山　徹

次期ビジョン策定に向けた愛知大学と SENA の共同研究の中間報告について、簡単に資料案内だけさせていただきます。

資料「中間報告概要版」の中に、それぞれ資料①②③と番号が書かれているかと思います。今年度、共同研究としまして、三つの調査研究を行いました。資料それぞれ①②③が、その調査結果の概要版になります。各調査の完全版は、SENA ウェブサイトからダウンロード可能になっておりますので、詳細はそちらで確認いただき、後の議論等々で御活用いただければ幸いかと存じます。

加えて、三遠南信地域連携センターでは、現在、「図説三遠南信の姿」というデータブックの作成を進めております。このデータブック完全版は次年度はじめの発行を予定し、現在準備を進めております。本日はそのパイロット版の資料を配布させていただいておりま

すので、もし御興味がおありでしたら、愛知大学三遠南信地域連携研究センターにお問い合わせください。

最後になりますが、今回の参加者の皆様を対象としたアンケート調査として1枚のA4用紙を配布しております。こちらに御記入いただいた情報は、次期ビジョン策定に向けて役立てる方針でおります。ぜひ御記入いただき、会場にありますビジョンブースの回収箱に御提出いただきますよう御協力のほど、よろしくお願いいたします。

6 「道」分科会　要旨

San-En-Nanshin Summit 2017 in Minamishinsyu

テーマ「交通ネットワークを生かしたまちづくり」

（敬称略）

コーディネーター	飯田市	市長	牧野　光朗
報告者	国土交通省　中部地方整備局 飯田国道事務所	事務所長	中平　浩文
議会	浜松市議会	議長	花井　和夫
議会	豊橋市議会	議長	坂柳　泰光
議会	飯田市議会	議長	木下　克志
行政	新城市	市長	穂積　亮次
行政	湖西市	市長	影山　剛士
行政	阿南町	町長	勝野　一成
行政	喬木村	村長	市瀬　直史
経済	浜松商工会議所	会頭	大須賀　正孝
経済	豊橋商工会議所	会頭	神野　吾郎
経済	駒ヶ根商工会議所	会頭	山浦　速夫
経済	田原市商工会	会長	河合　利則
住民	座光寺地域自治会	相談役	湯澤　英範
住民	NPO 法人浜名湖クラブ	理事	小林　昇

■はじめに

コーディネーター／飯田市　牧野市長

本日は三遠南信サミット2017in 南信州の「道」分科会に御参加いただき、誠にありがとうございます。

本日の三遠南信サミットのテーマが原点に返っての「“みち”がはぐくむ三遠南信の未来」ということですので、「道」分科会はそういったテーマの、言ってみれば一番中心の部分を議論していただく分科会になるかと思います。

そうしたこともありまして、議会の皆様方、行政の皆様方、産業界の皆様方、そして住民の代表の皆様方、それぞれ本当に御意見をしっかりと出していただける皆様方にお集まりをいただいたと思っております。私はもう先ほど、しゃべるだけしゃべっておりますので、

今度は皆様方にぜひよろしくお願いしたいと思っております。

その前に、本日は国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所の中平所長に来ていただきました。中平所長は、3年ほど前までは飯田市の建設部長も務めていただいておりましたので、本当に気心が知れておりまして、飯田市竜丘出身ということでもございます。本日は「交通ネットワークを生かしたまちづくり」について、最初に御報告いただけるということで、ぜひよろしくお願いします。

その後、それぞれの皆様方から意見を出していただきたいと思っておりますので、どうかよろしくお願いいたします。

まず、事務局から前年度の議論等について説明をしていただきたいと思います。

事務局

それでは、事務局から、前年度の議論につきましておさらいをさせていただきます。

前年度の議論のまとめ、3点にまとめてございます。

まず、1点目といたしまして、新東名高速道路の開通や三遠南信自動車道の整備により、中央自動車道、東名高速道路、浜松三ヶ日・豊橋道路などといった広域幹線道路ネットワークと、将来的には、飯田市に整備されますリニア中央新幹線長野県駅と連結することにより、沿線地域の交流にとどまらない広範な交流ネットワークが期待されるということです。

2点目といたしまして、三遠南信地域の南北軸の交通基盤であります JR 飯田線を活用し、広域的な観光の資源化を図るとともに、有機的に幹線道路と結びつけ、リニア中央新幹線の開通後の経済効果が三遠南信全域へ波及する取り組みを進めることが重要であるということです。

3点目といたしまして、医療機関への搬送路や災害時における緊急輸送路の確保の観点から、三遠南信自動車道の整備促進が重要であり、三遠南信地域の創生の観点からも高速幹線道路ネットワークを活用し、地域への新たな人の流れづくりに結びつけることが重要であり、加えて、幹線道路へのアクセスを確保する周辺道路の整備も重要であるということです。

以上の3点として、まとめたところでございます。

今回の議論のテーマといたしましては、以上の3点を踏まえまして、「交通ネットワークを生かしたまちづくり」としたところでございます。

コーディネーター

それでは、中平所長に、御報告をお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

■報告

国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所中平事務所長

最初に、本日お集まりの皆様方には、日ごろから中部地方整備局の事業に御協力いただいておりますことを、この場をおかりしましてお礼を申し上げます。

本日、私からは「交通ネットワークを生かしたまちづくり」ということでお話をさせていただきますが、ポイントは二つでございまして、1点目は、現在、国土交通省が進めています三遠南信自動車道の整備状況、2点目が、交通ネットワークを生かしたまちづくりという視点でお話をさせていただきます。

これは三遠南信地域を中心とした中部地域の広域的な道路網を示しておりますが、この三遠南信地域では太平洋側を中心としまして、東西の高速交通網が充実しているという状況でございます。特に沿岸部におきましては、昨年度、新東名高速道路が供用をしたことによりまして、ダブルのネットワークが確

保できているという状況でございます。

また、この南信州地域では東西の交通、それから南北の交通を担う一部として中央自動車道が供用しておりますし、また、昨年度からはリニア中央新幹線の工事が着手されたこともあって、今後、東西の交通網がさらに発展していくということでございます。

一方、南北の交通軸を見てみますと、非常に弱いという状況でございまして、三遠南信自動車道が地域連携の重要な役割を果たすということでございます。

これは三遠南信自動車道の現在の整備状況を示したものでございます。現道活用区間を含めまして、現時点で全体の約9割の区間で事業に着手をしております。そのうち5割の区間が開通をしている状況でございます。ここに赤色で旗上げをしている区間がございますが、これが平成29年度から平成31年度までに今後順次開通する区間をお示ししております。大まかな区間について、これから御説明をさせていただきます。

まず、長野県側でございますが、まず飯喬道路、天龍峡から今整備を進めているわけですが、天龍峡から龍江インター間につきましては、平成31年度という供用目標を昨年の11月に発表させていただいております。そういった中で今、天龍峡大橋を含めて全面的に工事を展開しているところでございます。

その先になります龍江インターから飯田東インターまでの区間につきましては、平成29年度ということで開通目標を示させていただいております。現在は工事が最終段階に入っている状況でございます。

それから、静岡県境、長野県境をまたぐ青崩峠道路の区間でございます。全体で約6キロメートルの延長でございますが、このうちトンネル区間が約5キロメートルを占めている状況でございます。現在は、このトンネルのうち調査坑、最終的に供用した後には避難坑になるのですが、この調査坑の掘削を進めておりまして、現在、大体半分ぐらいの掘削が終わっている状況でございます。

それから静岡県側に入りまして、水窪から佐久間までの区間については、現在、環境影響評価の手続を行っているところでございます。

さらにその先、佐久間道路と三遠道路でございますか、佐久間インターから東栄インター間につきましては、平成30年度の供用を目指して現在工事を行っております。

また、東栄インターから鳳来峡インターまでについても、用地買収とか橋梁等の工事を実施しているところでございます。

ただ今お話ししたように、計画的に事業を進めている状況でございますが、三遠南信自動車道の整備が順調に進んでいけば、飯田市、豊橋市、浜松市などの都市間と中山間地域の速達性が向上されまして、地域連携がより加速するという効果が出てきます。

また、三遠南信自動車道に並行するような道路につきましては、非常に脆弱な現道区間でございますので、これにかわって災害に強い地域ネットワークが構築されることになりまして、日常生活や観光面において信頼性が飛躍的に向上していくだろうと考えております。

また、これは長野県側の飯喬道路で天竜川をまたぐ区間で天龍峡大橋という橋梁の架設工事を進めているのですが、この橋梁には実は添架歩廊というものを飯田市が設置する形になっております。こういうことになりますと、三遠南信自動車道そのものが観光資源として活用できるようになってきますので、今後観光客など多くの皆様に来ていただくことも期待できると思っております。

続いて、実際に、今まで供用した区間でどのような効果が生まれているのかというものを、三つほど御用意しております。1点目は、飯田市の遠山郷、旧上村、旧南信濃村の区域ですが、ここは飯喬道路や三遠道路、または長野県に事業を進めていただきました現道活

用区間の開通により、観光客が順調に増加をしております。この8年間で見ますと約5割増加している状況でございます。

また、飯田市の天龍峡インター周辺には、これも飯田市の御協力のもとで産業団地の整備が進められている状況でございますが、天龍峡インターに近いところの産業団地の例を出しておりますが、飯喬道路の開通によりまして、新たな企業進出が着実に進んでおりまして、現時点で分譲地の約8割が完売をしているといった状況でございます。

さらに三遠道路の開通によって出ている効果でありますが、これは全国的にも珍しい沿岸部と中山間地域の農業連携というものでございます。三遠地域、特に田原市や浜松市周辺では、洋ランの出荷量が全国第2位ということでございますが、夏の高温時期に標高の高い地域、これは南信州の阿智村に治部坂高原というところがあるのですが、ここに苗を移しまして開花を促進し、また再び低地に戻して収穫する山上げ栽培というものが実施されている状況でございます。

それからもう一つが、浜松市はミカンの栽培出荷量というのが全国1位になっておりますが、浜松市で収穫したミカンを長野県の松川町に送りまして、ジュースに加工するといったようなことも現在行われている状況でございます。

このように三遠南信自動車道が効率的な輸送を支援している状況でございます。このような効果を地域全体に促進するためにも、計画的に事業を促進してまいりたいと考えております。

それでは、2点目の「交通ネットワークを生かしたまちづくり」という観点から、少しお話をさせていただきます。

これは、先ほどの全体セッションの中でもお話があったと思いますが、日本全体は人口減少社会に転じているということでございまして、特に中山間地域での進行は著しい状況でございます。この飯田下伊那地域を見ましても、全国平均よりも大きく減少するという予測が出ております。地域を維持・発展させていくためには交流人口の拡大が非常に重要だと考えております。

一方、外国人の観光客数は非常に大きく伸びておりまして、日本全体で見ると、ここにあるように既に目標の2,000万人に達しまして、2030年度までに6,000万人を新たな目標にしている状況でございます。ただ、飯田下伊那地域の外国人観光客を見てみますと、このグラフのとおりで横ばいの状況でございまして、今後、地域が取り組むことによって伸び代はかなり大きいと考えております。

この飯田下伊那地域を見ますと、観光に関連する産業は全体の約5割あり、観光需要の増加が地域全体にとって大きなメリットをもたらす産業であるということが言えると思います。

また、この地域の産業形態を見てみますと、県外からの日帰りの観光客が非常に多く、均衡の中京圏が主たる客層となっている状況でございます。

今後、この中京圏もそうなのですが、人口規模の大きな首都圏、それから今お話しした外国人の観光客の誘客に取り組んでいくことができれば、さらに大きな観光事業となり、新たな産業創出も考えられるということでございます。多分、それの起爆剤になるのが、三遠南信自動車道とあわせて、現在この地域で進められているリニア中央新幹線の事業だということでございます。これも御案内のとおり、昨年度からリニア中央新幹線の工事が本格的に稼働している状況でございます。この整備により、大都市圏とのアクセスが飛躍的に向上し、この長野県域の利用客数というのは約250万人と予測をされております。

どのぐらい向上するのかということを、圏域の拡大という形で示させていただいたものでございます。これはリニア中央新幹線と三遠南信自動車道に関する工事が計画どおりに

行われていけば、一般的に日帰り圏、2時間圏域と言われていますが、これが三遠南信地域の中心部まで拡大し、それに伴い特に首都圏からの来訪者が非常に大きくなるだろうと予測ができます。

ただ、交流人口を増やすという観点から見ますと、アクセスの強化だけでは一時的な効果となりかねないというものでございまして、この表は観光消費額への影響をアクセス強化、観光資源という視点から示したものですが、アクセス強化のみでは、その効果は非常に限定的になるだろうということを示しております。アクセス強化とあわせまして、各地域が観光資源の魅力を向上させる取り組みを行うことによりまして交流人口の増加を促し、また、あわせて必要なインフラ整備を同時並行的に整備することが観光消費額の増加につながると考えております。そのためには官民が一体となりまして、必要な取り組みを進めていくことが非常に重要だと考えています。

今お話しした一例でございますが、27年3月に北陸新幹線の金沢駅が開業をしております。大都市圏と結ばれた金沢におきましては、観光客が対前年度で約1.5倍に増加をしております。また、金沢から1時間ぐらい離れました世界遺産の白川郷におきましても、バス路線などの強化によりまして、観光客が1割ぐらい増加しているといった状況でございます。

こういう交流人口の増加を一時的な効果としないためにも、現在進められております三遠南信自動車道、リニア中央新幹線をうまく利用しまして、地域資源の魅力向上を行い、それを発信していくことが非常に重要だと考えております。

そういった意味で、我々国土交通省も三遠南信自動車道整備そのものについては当然でございますが、地域づくりにおいても地域の皆様と一緒になって、必要な取り組みを進めていきたいと考えておりますので、引き続きの御支援をお願いいたします。

■意見交換

コーディネーター

ただいま交通基盤の整備状況につきまして、中平所長からも御報告をいただいたわけでありますが、各地域の交通基盤の整備状況とともに、地域振興に与えた効果につきまして、課題、あるいは今後の取り組み等についてお考えをお聞きしていきたいと思います。

まずは、それぞれの地域での道路等の交通基盤整備にあわせて進められておりますまちづくり等の取り組みにつきまして、4名の方々からお聞きをしてまいりたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。

それではまず、浜松市議会の花井議長、よろしくお願いいたします。

浜松市議会　花井議長

私から、本市での道路整備の効果といった点についてお話をさせていただきたいと思います。

浜松市におきましては、昨年2月に新東名高速道路の浜松いなさジャンクションから愛知県内の豊田東ジャンクションまでの約55キロメートルが開通したことによりまして、高速交通ネットワークが一段と強化されました。そうしたことによりまして、先ほど来、お話がありましたように観光客の増加や、あるいは企業立地の促進など様々なストック効果が現れている状況にもございます。

また、三遠南信自動車道の整備につきまし

ては、愛知県、静岡県、長野県、3県の県境を越えた地域連携を強化するためには、どうしてもなくてはならない不可欠な道路整備であり、地域活性化の切り札ということで、これからの地域創生にはなくてはならない道路だと思っております。

そうした中で、道路整備に関しましては、産業界あるいは経済界、また市民からのそういった点の要望は大変大きなものがございます。先ほどの全体会のトークセッションでも浜松商工会議所の大須賀会頭からもお話がありましたが、三遠南信自動車道は時間やお金などの本当に様々なコストの削減にもつながるということで夢の道路であり、浜松市としても大変期待が大きいということでございまして、私どもも全く同感でございます。我々議会としても、その整備に向けて今後ともしっかりと後押しをしていきたいと思っているところでもございます。

また、道路の整備に関しましては、そうした産業や防災・医療、あるいは観光といった面だけではなくて、やはり歴史・文化の面でも大きな役割があるのではないかと思っております。

三遠南信地域は、御存じのとおり民俗芸能の宝庫であり、民俗学者の柳田國男先生や折口信夫先生が絶賛するほどの民俗芸能の宝庫で、全国的にも注目される地域だということでございます。しかしながら半面、後継者不足など様々な課題を抱えております。浜松市議会としましても、昨年の2月に浜松市の民俗芸能を守り育て、これから振興するということで、議員提案の条例として制定をしたところでもございます。議会としても、しっかりと民俗芸能を守り、魅力を上げていくためにも大変重要ではないかと思っております。

また、NHK 大河ドラマ「おんな城主直虎」の放映が始まっております。浜松市でも大河ドラマ館、あるいは歴史資料を展示しております地域遺産センター等々がございまして、観光客が大変たくさん訪れていただいております。そうした歴史、あるいは文化といった面を強化することによって、アクセス強化だけではなく、この地域の魅力を大きく上げていくものだと確信をしているところでもございます。

昔から、塩の道や秋葉街道などの道路を通して文化、あるいは人との交流が大きくなされてきたという点であり、我々も三遠南信自動車道の1日も早い供用に向けて努力してまいりたいと思っておりますので、どうぞ皆様御協力をよろしくお願いいたします。

コーディネーター

それでは引き続きまして、飯田市議会の木下議長、よろしくお願いします。

飯田市議会　木下議長

飯田市ではリニア中央新幹線長野県駅設置にあわせて、現在、リニア中央新幹線長野県駅周辺整備基本計画を策定中であります。中央自動車道座光寺パーキングエリアにスマートインターチェンジの設置、県事業によるスマートインターチェンジと駅周辺を結ぶ、いわゆる座光寺上郷道路の建設や、また国道153号飯田北改良も予定されておりまして、議会側への状況の報告を受けているところです。

リニア中央新幹線長野県駅周辺の基本理念は、「信州伊那谷（ローカル）の個性で世界（グローバル）を惹きつけ、世界に発信する玄関口（ゲートウェイ）」であり、もとより飯田は地形的にも長野県の南の玄関口、また三遠南信地域の北の玄関口にも当たり、リニア中央新幹線の開通により東西交通を含めた結節点、玄関口となるわけです。観光や産業面も含めまして、名実ともに玄関口となる施策に取り組んでいく必要があります。議会といたしましても、市側とともに検討を進めているところです。

コーディネーター

続きまして、市長に就任されて初めてのサミットになりますが、湖西市の影山市長、よろしくお願いします。

湖西市　影山市長

皆様、初めましての方も多くいらっしゃるかと思います。湖西市長の影山剛士と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

湖西市は静岡県の一番西にありまして、浜松市と豊橋市という大変大きな市の間にあるものですから、浜松や豊橋の隣、浜名湖の西岸と紹介する機会が多くて、何とか湖西市の知名度を上げようと思っております。本日は少し道の話とともに、時間の限りのある中ではありますが、湖西市の紹介もさせていただければと思っております。

湖西市は昭和30年に周辺の町や村が合併して湖西町となりました。昭和47年に湖西市になり、平成22年に新居町と合併をいたしまして、現在の湖西市となっているという経緯がございます。そのためにいろいろな集落と集落、もともと点と点であったものが、現在いろいろな県道や市道、もちろん国道などの道路で集落をつないでいる状況にある市になっております。

その中で、先日、トヨタグループの創始者である豊田佐吉翁の出身地ということで、本年は豊田佐吉翁の生誕150年を迎えましたので､150年の記念式典を豊田章男代表取締役社長、章一郎名誉会長、スズキ株式会社の湖西工場もある関係で鈴木修代表取締役会長等々にお越しをいただきまして、湖西市内で記念式典を行いました。おかげさまで自動車産業製造業とゆかりの深い市になっております。

そのために道路の整備というものが前からも行われておりますし、現在新たに行おうと思っていることは､新産業拠点という形で、全体会から話が上がっている三遠南信自動車道から南におりてきて、さらに新東名・東名高速道路から南におりた浜松三ヶ日・豊橋道路を早期に整備するということとともに、太平洋岸に浜松から西に行って豊橋、さらには国道23号、三河湾につながる道路である浜名バイパス、ここからアクセスのいいところに都市計画道路を整備しまして、そして新産業都市、具体的には工業用地を中心に50ヘクタールほどの企業誘致の市内工業の集約や新産業の誘致をする区画整理を行っています。そちらへの都市計画道路や新たな道路の拡幅等も行って、そして浜松三ヶ日・豊橋道路や三遠南信自動車道とも連携をさせていただいて、新たな企業の拠点やその周辺の住宅地、現在人口6万人ほどの決して規模は大きくない市でありますので、もっと住民や企業が集積するような都市にしていきたいと考えております。その拠点としての都市計画道路や浜松三ヶ日・豊橋道路、もちろん三遠南信自動車道との連携をさせていただきたいと思っております。

コーディネーター

続きまして、飯田市の座光寺地域自治会相談役の湯澤様、よろしくお願いします。

座光寺地域自治会　湯澤相談役

私からは住民を代表して、住民の立場で南信州の交通インフラの大変革を見据えまして、地域の宝物を生かした地域づくりに取り組んでいる事例について発表させていただきます。

その宝物とは、お手元に「2000年浪漫の郷」というパンフレットがございますが、詳しくはこれを見ていただきたいと思いますが、二つの国指定の史跡、恒川官衙遺跡と高岡第1号古墳、築造の姿が完全に残されている山城の南本城や多くの参拝客をいただいている元善光寺などがございます。

そこで、これらの宝物を生かして住民主体で「2000年浪漫の郷」と称して、地域づくりを取り組んでいるわけでございますが、まだ

まだ歩み始めたところでございまして、正直模索しているところでございます。

現在、飯田市では国の史跡指定を受けました恒川官衙遺跡の保存活用の基本計画を策定中で、その中で史跡公園とガイダンス施設の整備のあり方を検討しているところでございます。そこで、現在、地域として、住民としてどのような整備を求めていくかを議論し、現在、住民意見をまとめているところでございます。恒川官衙遺跡は2000年浪漫の郷構想の中核施設になるだけに、住民の思いを強く行政にお願いしていきたいと思っております。

次に、具体的な取り組みといたしましては、それぞれの史跡施設の環境整備のためにボランティア活動として遊歩道の整備、花木の植栽、ごみ拾い、草刈り作業などのほか、行政から補助金をいただきながら、統一された案内看板を各所に設置し、さらに史跡広場の土地取得に向けた寄附金活動や史跡の見学会、学習会などをこれまで行ってきたところでございます。

今後は、浪漫の郷の回遊ルートや街並みのあり方等の検討や、イベントや学習会の開催、案内ボランティアの育成・養成などを行っていきたいと思っております。

そして数年後には、活動の積極的な展開を促すためにＮＰＯ法人などへの移行も検討しています。

さらに、将来目指すものとして、この構想を着実に実現するためには、住民自身が地域の宝を十分認識し、行政と連携して学習活動を行い、地域に根差した、地域全体での取り組みを心がけていきたいと思っております。その上で2000年浪漫の郷の魅力を南信州地域と連携して、インターネットなどを駆使して国の内外に情報発信し、交流人口の増大を目指して地域の魅力をアップしていき、それがやがて住んでみたい地域につながるものと確信しています。

コーディネーター

これまで4名の方にお話をいただきました。引き続き交通基盤の整備、道の駅なども含めて、そうした交通基盤の整備が地域振興に与えた効果についてのお話を4名の方からお聞きしたいと思います。

まず、阿南町の勝野町長、お願いします。

阿南町　勝野町長

先ほど、県境域の町村の話で天龍村長の話があったわけですが、我々は県境域というくらいで、峠越えのところは非常に地理・地形が厳しいものがあります。そうした中で愛知県と県境を接しておりまして、愛知県の豊根村も一緒に加わりまして、愛知・長野県境域開発協議会の活動をしてきたわけなのですが、昭和55年ごろまでは、阿南町の高校生は飯田市中心の高校へ行くにも下宿をしないと通えない、大学並みの学費が要る状況でした。そして、さらに国道151号は遠州街道と言われて、古くから遠州や三河とつながりがあり、大勢の人が嫁入りもし、通院など様々な場面で行き来もしたわけなのですが、昔は非常に難儀なことだったことを覚えております。

そういったことから、三遠南信自動車道の鳳来峡インターチェンジから浜松いなさジャンクションまでができたことで、愛知県境に近い地域にあります道の駅新野千石平周辺の交通量が30％アップしました。平成24年頃には道の駅を訪れる人が48万人だったのが、平成27年末の調査では55万人です。すごい人の動きが、三遠南信自動車道の完成と共にできて、利便性が向上したということで変わったわけであります。我々の地元も農業法人が夏場の野菜を静岡市の静鉄ストアという中心部へ卸させていただいております。始まったころは、たった1,000万円にも満たない野菜の出荷額は、我々のところはそう大きなところではないのですが、それでも5,000万円を超えるようになりました。静岡から来る皆様からも、

「町長、近くなったな」や「時間に余裕を持って来ているわ」と言うお話がありました。我々にとっては大きな変化が出ているわけであり、もう我々は道なくして物が語れないというのが現状であります。

あと、愛知県は予算が豊富であるものですから、愛知県と長野県の県境まで国道151号を改良してくれてあるのですが、長野県側がまだ未改良部分があって、遠州や三河から来る皆様からいろいろ言われるわけです。何とか早く国や県のお力添えで、国道151号の長野県側を改良してくれとお願いしているわけです。愛知県から長野県側のへ医療関係でお勤めをいただく方も出ておりますし、また医療の関係でも、愛知県側の豊根村でも活動できるようになりまして、道の力というものは物流から文化、経済といったものに大きな影響があるということを非常に感じている地域でございます。

コーディネーター

引き続きまして、浜松商工会議所の大須賀会頭、お願いします。

浜松商工会議所　大須賀会頭

私は物流の仕事もしていますので、道路は本当に大事だということを痛切に感じます。昔東名高速道路が出来まして、便利でしたが、渋滞がすごかったものです。工事や事故があったらとんでもない状況であったのが、新東名高速道路が開通した現在は、工事や事故があっても物流が滞ることなく、経済的にも非常に良くなりました。昔は長野県と浜松は、天竜川を介してすごく交流がありました。しかし、佐久間ダムが完成しましたら、天竜川を介した交流は無理になり、一気に交流が止まってしまいました。今度はこの三遠南信自動車道が出来ると、本当に経済というのは、みんなで「しなさい、しなさい」と言わなくても、できたら勝手にどんどん進んでいくという意味で、三遠南信自動車道ができたら、それはすばらしいものになると思います。

やはり三遠南信地域に関して、私はいつも思うのですけど、観光は、飯田、豊橋や浜松が一緒になってルートをつくって、みんなでこの地域を世間にもっと知ってもらうように宣伝をしていくことが必要ではないでしょうか。長野県は海がないけれども、三遠南信自動車道ができたら1時間で、また日帰りで海へ行って帰ってくることができます。それと、みんなが思いつかない観光が新たに生まれるかもしれない。私は、まず途中に少しでも開通した区間があれば、その地域を宣伝するということが一番だと思います。こうした連携活動を通して、形を早くつくっていきたいと思いますので、ぜひよろしくお願いします。

コーディネーター

続きまして、田原商工会の河合会長、お願いします。

田原市商工会　河合会長

三遠南信自動車道に関連したお話をさせていただくのが一番よろしいかと思うのですが、いかんせん、三遠南信地域の一番南の端ということで、その効果が届くにはまだまだ先の長い話ということです。その中で特に、浜松いなさ北インターチェンジから鳳来峡インターチェンジまでの開通があったということで、先ほどトークセッションの中でも花の話がありました。イチゴやランの栽培にとって夏場の渥美半島の環境は厳しいものでございまして、実際には奥三河地域に移して調節をしているということ、また、観光の面では、30分ぐらい時間が縮まったということは聞いております。

しかしながら、田原市の場合ですと、一番大きな交通基盤は三河港でございまして、港があるから海の道があるということで、トヨタ自動車を中心とした臨海工業地帯は、2兆円

を超す工業出荷額を持っています。港ももちろん大事なのですが、将来的には三遠南信自動車道をつないでいくと思いますが、国道23号バイパス、それから臨海部の整備が進んできまして、臨海部に関してはかなりの効果が上がってきております。田原市の臨海部におきましては、この後もトヨタ自動車関連以外にも、今バイオ発電などの新しい産業の話があります。これは船で燃料を運んでくる海の道と、臨海部が整備されてきたということで陸の道と、あとバイオ発電という電気の道が開かれてくるというところだと思います。

このほかに先ほど御紹介をいただきました農業の生産額が、この間、発表されました統計で約813億円ということで、市町村としては日本一の農業規模を誇っております。一方で、観光においても、昭和63年には560万人ぐらいの観光客の方が見えていますが、平成23年あたりですと250万人ということで半減をしております。これはもちろん観光に対する考え方が多様化してきた影響もあると思いますが、やはり道路網の整備がもう少し進んできますと、リピート客の来られる確率は高まるのだろうということで、この三遠南信自動車が連結し、さらにもともとお話としては、飯田市から豊橋市を通って伊勢湾口道路という構想が一番初めにもあったと思いますので、そちらに関しては、この後の議論の中で進めていただければ結構だと思いますが、港にしても道路にしても、その存在がいかに産業に影響を与えるかということは、本当に強く感じておりますので、なるべく速やかにつないでいただけるとありがたいと思っております。

コーディネーター

これまで7名の皆様方から御発言をいただきましたが、その内容から交通基盤、あるいは交通ネットワークの整備によりまして、非常に具体的に良い効果があらわれているということが確認できたのではないかと思います。

それでは続いて6名の皆様方から、広域道路ネットワークの形成をこれから展望していただきまして、そうした整備効果をさらに高めていくために、SENAあるいは関連組織、地域が連携して取り組んでいく課題としてはどういったものがあるのか、御意見をいただければと思います。

まず、豊橋市議会の坂柳議長、よろしくお願いいたします。

豊橋市議会　坂柳議長

先ほど来からお話が出ていると思いますが、我々豊橋市議会といたしましては、南北軸を形成する広域幹線道路の整備が必要との認識を持っております。豊橋市からであれば国道23号名豊道路があり、そして東名高速道路、新東名高速道路などが整備されておりまして、東西方向の広域幹線道路ネットワーク整備は一定の進捗が見られておりますが、その整備効果をさらに高めるためにも、東三河地域の豊橋市や田原市におきましては、その発展をつなげていくためには、三遠南信自動車道や浜松三ヶ日・豊橋道路といった南北軸の道路基盤整備が不可欠であります。

三遠南信自動車道につきましては、先ほど来、説明をさせていただいたように着々と工事が進んでいるわけでございますが、しっかりと予算をつけていただきまして、早期の全線開通を望むわけでございますが、浜松三ヶ日・豊橋道路につきましては、静岡県と愛知県と浜松市により実施された三遠地域の連携支援調査でも、新たな連携軸の必要性が明らかになっております。

また、平成26年度から27年度には中部地方整備局によりまして、広域的な視点からの調査が行われております。こうしたことから、やはり我々といたしましては、浜松三ヶ日・豊橋道路の調査実施から計画路線へと位置づけられ、東名高速道路の三ヶ日ジャンクションから国道23号名豊道路へつなぐ浜松三ヶ

日・豊橋道路の地域高規格道路ができることによって、飯田市からの、さらなる南北軸の広域幹線道路ネットワーク整備ができれば、さらに整備効果が高くなると認識をしておりますので、こういった部分でしっかりと三遠南信自動車道の整備と同様に、浜松三ヶ日・豊橋道路が計画路線へと位置づけされて進んでいくことを行政、経済界、そして議会が一体となって取り組んでいくことが重要であるかなと思っております。

もう一つは、我々豊橋市、田原市にとりましては、先ほど、田原市商工会の方の話がございましたように、国道23号名豊道路がございます。この道路は名古屋と豊橋市を結ぶ8市1町を通過する延長73キロメートルの大規模バイパスでございますが、この沿線には自動車産業やものづくり産業を支援するという形の中で、地域の産業、経済を発展するストック効果をもたらす大変重要な路線であります。そしてこの沿線の自動車関連企業の物流は国道23号名豊道路を利用させていただいておりまして、このことから国道23号名豊道路は名古屋港、三河港への自動車産業物流を担っています。

先ほどのトークセッションでも、我が豊橋市の佐原市長が「三河港は結構良いのです」という話をさせていただきました。具体的に言えば、三河港にはトヨタ自動車の田原工場や海外自動車メーカー7社も立地いただいておりまして、海外からは年間約19万台が輸入されております。簡単に言うと国内で販売されております輸入車の4割程度が三河港で陸揚げされている状況でございます。また、トヨタ自動車は北米へ年間約80万台輸出をしておりますし、あるいはスズキも輸出をしておりますので、自動車港湾としての三河港がございます。一方で、名古屋港、三河港へ自動車産業物流を担っている国道23号名豊道路につきましても、まだ全線開通いたしておりませんし、暫定で2車線となっている部分がありますので、さらに効果を上げるために早期の4車線化を望むところであり、要望活動をする必要があると認識をいたしております。

コーディネーター

続きまして、新城市の穂積市長、よろしくお願いします。

新城市　穂積市長

ちょうど昨年の三遠南信サミットの開催の時期が新東名高速道路の開通直後だったと思います。その折には、「ようやく開通しました。」と御報告したわけですが、私ども新城市は新東名高速道路を静岡県方面から愛知県に入ってきて最初のインターチェンジである新城インターチェンジがございます。そこに隣接した道の駅「もっくる新城」も1年前から整備をしておりましたが、新東名高速道路の開通効果は既に皆様方御指摘のとおりで、新城市は一番恩恵を受けた市の一つではないかと思います。いろいろな史跡や観光施設、歴史の保存館などの入込客は、開通前と比べますと、大体3割から5割増加しております。

なお、先ほど来、浜松市を中心に直虎のお話がありましたが、新城市は、愛知県の中では唯一「おんな城主直虎」推進協議会に入らせていただいておりまして、直虎が育てた虎松、後の井伊直政でございますが、追手を逃れて15歳まで教育を受けたのが私どもの地域にある鳳来寺でございます。江戸幕府の中枢を担った井伊家の精神は新城市でできたということで御理解いただいて、一緒になって奥浜名地域の皆様と何とか盛り上げていきたいと思っています。

そして、新東名高速道路ができて大きな効果を実感している一方で、これからの課題といたしましては、やはり奥三河地域、あるいは北遠地域とのしっかりとした連携、特に二次交通が非常に不足をしています。整備が弱いということから、二次交通、それからイン

バウンド対応というのは、この地域はまだまだだと思います。先ほど昇龍道の話が少し出ましたけれども、それらも含めて、前回の三遠南信サミットで新東名高速道路の開通と併せて JR 飯田線のことについてちょっと触れさせてもらいましたが、本日は全体会のトークセッションで豊橋商工会議所の神野会頭からも発言がありました。JR 飯田線の活用、観光での一本筋を通すということは非常に魅力的だし、ぜひやらなければいけない。特に JR 飯田線は本当のローカル線で、通勤、通学に多く使われていますけれども、この頃いろいろな地域で観光としての観光列車がずっとはやってきておりますので、SENA で1両しっかり自分でつくって運行すれば、JR 東海は絶対嫌とは言わないはずです。新城市内にも JR 飯田線の駅がたくさんございますので、大いに歓迎したいと思いますし、一翼を担わせていただきたいと思っています。

また、先ほど国土交通省が発表しましたインターチェンジの賢い料金所システムというものが夏から試行されます。それはインターチェンジをおりて、すぐ近くに道の駅等があった場合には、おりてまたそこで道の駅に滞在して、また乗っても料金がそのまま乗っていたままと同じ料金になるという仕組みで、全国で3か所試行されますが、中日本高速道路株式会社管内では新城インターチェンジと道の駅「もっくる新城」が選定をされておりますので、これもまたぜひいろいろな面で観光に生かしていきたいと思っています。

いずれにいたしましても、この地域のこれからの発展のためには、三遠南信自動車道、そして先ほど、湖西市の影山市長がおっしゃっていただきましたが、浜松三ヶ日・豊橋道路で飯田北遠から南信州北遠、三河湾を通って遠州灘、三河湾へ直結するような1本の道路、それから既存の JR 飯田線の利活用、そしてリニア中央新幹線に結びついていくという構想をみんなでしっかりと盛り立てて、枝葉もつけながら肉づけをしていくという大きな絵図面を SENA で一緒に描いていければと思っております。

コーディネーター

続きまして、喬木村の市瀬村長、お願いいたします。

喬木村　市瀬村長

喬木村は、飯田市に三方を囲まれた小さな村で、国道もない、鉄道もないという、何もない、ないない村なのですが、今回、三遠南信自動車道が当村を通るということで初めて道分科会に参加をさせていただきました。一方方向のみ通行可能な地域振興インターを含めて、二つのインターチェンジをつくっていただけて、また、リニア中央新幹線の長野県駅から数分で村の中心部まで来られる立地ということで、これから先、大いに期待をしたいと思っているところです。

今回、整備効果をさらに深めるために、この地域は何をしなければいけないかということなのですが、先ほど来、お話がありますように、南海トラフを想定した災害のときの交通路の中央自動車道とあわせたダブルネットワーク化や緊急医療圏、これも圏域を越えて協力し合うことができるのではないか、あるいは観光、産業といった部分があると思っているところです。

ちょっとショッキングなのは、平成28年2月に SENA でウェブアンケートの調査をした結果、三遠南信地域を知っているかというアンケートに対しまして、「名前も場所も知らない」とか「場所はわかるけど、名前は知らない」と答えた方が全体の約7割いらっしゃるということで、我々が思うほど三遠南信地域というものが一般の方々になかなか伝わっていないという思いがします。「三遠南信地域という名前も知っているし、場所も知っている」とお答えになった方は、わずか25％しかいら

っしゃらなかったということなので、地域の課題は、まずは三遠南信地域の知名度を上げていくことだという気がしております。

全体会のトークセッションで浜松商工会議所の大須賀会頭がおっしゃっておられましたように、最初にヒットするのは観光なのだろうと思いまして、四季折々の観光周遊ルートを開発することによりまして、できるだけ多くの方に、まず三遠南信自動車道が開通する前に、この地域をわかっていただくための努力はしていかないといけないと思っているところです。

特に、長野県にとりましては、海がないところが、北は日本海から南は太平洋まで一直線で南北軸が通るということで、東海道新幹線や三遠南信自動車道を使って、山の雰囲気を味わっていただいて、リニア中央新幹線を使えば日帰りもできるという夢のような周遊ルートもこれから先構築できるわけでありますので、ここは浜松市長がおっしゃっていましたように、県の枠を超えて、この地域が大きな広域連合組織でもつくって、また地方創生の交付金でも使って、大きな枠組みの中で現在取り組めることに取り組む、まずは何か動き出さなければいけないなという思いがしております。

コーディネーター

続きまして、豊橋商工会議所の神野会頭、よろしくお願いします。

豊橋商工会議所　神野会頭

皆様が、いろいろな観点からそれぞれお話になっておりますが、私は経済界からの立場で、お話をさせていただけたらと思います。

1点目は、まず道ということで言いますと、現在の経済価値をより高くするためには、現在ボトルネックになっているところが、道に関してはいろいろあります。それをどうしても解消しないとつながらないところがあり、これをやるためには国、それぞれの県、それから市町村、そこにまたいろいろ工事をやったり、いろいろな地主さんだったり、そういう方々の了解というかコンセンサスをどうとるかが結構地道で一番大切なところです。これをやるためには、やはりみんなの熱意というか、これは公のことだというコンセンサスが要るのではないかと思います。そういった意味で、まだまだボトルネックになっている部分がたくさんあって、それを明確化して徹底的にみんなでやるということが必要かと思います。

2点目は、幹線道路だけではなくて、さらに地域内の道です。これはやはり価値創造のためにはもう一つ重要なことで、それはそれぞれの地域がきちっと幹線道路と地域内の道路という関係性をきちんと持つことが重要かと思います。

3点目は、大きな道の部分は、成熟化社会とはいえ、まだまだ大きなグラウンドビジョンが必要かと思います。先ほど、田原市商工会の河合会長がおっしゃっていましたが、三遠南信自動車道はその後、渥美半島縦貫道路で伊勢に渡り、昔、僕らが子供のときには、伊勢湾架橋というのができると思っていたのです。これは船の形でも何でもいいのですが、伊勢につながり、さらに伊勢から名古屋に上がってくるという、グレート中部圏という外環状みたいな大きなグラウンドビジョンも非常に重要ではないかと思います。そういった意味で浜松三ヶ日・豊橋道路も、地道にきちんとやっていかなければいけないと思います。

それから道だけではなくて、先ほど、穂積市長からも話がありましたように、二次交通や中山間地域における交通手段は、これからはローカルなタクシーや小さなコミューターバスなどは地域の人たちだけではなく、観光などでも非常に有効に働くのだと思います。そういうソフト部分での事業をどのようにやっていくかということや、シンボリックな意

味での JR 飯田線のプロジェクトなどをあわせて並行的にやれると非常に魅力的でいいのではないかと思います。

コーディネーター

それでは続きまして、駒ヶ根商工会議所の山浦会頭、よろしくお願いします。

駒ヶ根商工会議所　山浦会頭

連携して取り組むべき課題ということで話をさせていただきます。

駒ヶ根地区は国道153号伊南バイパスが完成しておりまして、中川、飯島地区も平成30年には繋がる予定となってきております。既に完成しております駒ヶ根地区は、その道路を中心にしまして町並みが変わり、大変活性化ができており、本当に品格のある町並みもできており、俗に言う駒ヶ根のビバリーヒルズとして非常に若い者が期待をして持っている土地であります。

道路は地方に住む者、また地方の経済にとってはまさに生命線であり、命の道だと思います。三遠南信自動車道のような広域幹線道路の早期全面開通に向けて取り組むことが必要でして、何しろ道路は全面開通してこそ、その効果が出てくるものと思っております。まずは三遠南信地域の自治体及び経済界がより一層連携をいたしまして、三遠南信地域の道路計画の早期完成と全面開通に向けて、国土交通省を初めとする関係機関に対して陳情・要望活動を強化していかなければならないと思っております。そのためには、それぞれの地元出身の国会議員を通じて、政府与党に今まで以上に強力な働きかけを行っていかなければならないと思っております。

また、広域幹線道路のネットワーク整備後は、東三河地域や遠州地域と南信地域の時間距離が大幅に短縮されますし、特に標高差1,000メートル近いところが1時間ぐらいで行けるということで、リンゴの里からミカンの里、ミカンの里からリンゴの里ということで、観光に、また自動車産業等につながる製造業にとっても大変重要な道路であります。

これらの交流を活発化して、地域連携を強化して、一つの経済圏として観光や産業をはじめとして地域を活性化させるために、今から広域産業連携のための組織を官民協働して立ち上げていく必要があると思います。交通政策、産業政策をあわせた広域ビジョンを策定することが必要と考えております。

さらに私たち民間の経済人も、また地域に住む住民も、その道路が開通した後に自分たちがそのチャンスをつかんで、どうしてその地域が発展できるかということを、もう一度、掘り下げて考えながら取り組んでいく必要があると思っております。

コーディネーター

それでは、この6名の中では最後になりますが、NPO 法人浜名湖クラブの小林理事、よろしくお願いいたします。

NPO 法人浜名湖クラブ　小林理事

道というテーマなのですが、浜名湖は水面ですので、浜名湖の水上の道について意見を述べたいと思います。

静岡県西部の遠州地域は、マリン産業における世界一の湖、浜名湖があります。世界一というところの概略を申し上げますと、浜名湖には世界企業であるホンダ、スズキ、ヤマハが、約半世紀ですけれども、ここに開発基地を設けて、浜名湖で開発されたマリン機器は世界の市場の概ね65％以上の占拠率を持っています。したがって、よく言うのですが、多少、市が潰れても世界に影響はないのですが、浜名湖が潰れると世界のマリンはなくなってしまうというと、大体市長が「うーん」と言うのですが、そういう場所です。

そしてまた、今、世界で大体150カ国ぐらいで使われている水上オートバイも、浜名湖

が誕生地です。このように浜名湖はすばらしいところです。浜名湖の南側の湖面には、鷲津、新居、弁天島という JR の駅が三つあります。浜名湖の北側には天竜浜名湖鉄道が通っており、湖面に面したところに約10の駅があります。そして湖の中央部には、東名高速道路の浜名湖サービスエリアや国道1号が通っています。しかしながら、この浜名湖周辺には、陸上と水上を結びつける交通ネットワークはほとんど存在せず、観光や産業に生かせていないというのが現状です。これについては水上交通を活用した駅と道路とのネットワークづくりを考える必要があると思っています。そのために湖岸の整備や、昔走っていた定期船の発着場の見直しや、特に大事だと思うのは不定期船としての水上タクシーです。先ほど話があった三河湾では水上タクシーがあって、港に着いて電話すると、5分前後で来てくれて島へ渡してくれます。定期船に比べると、非常に便利なのです。浜名湖でもそういうことができるということです。

また、水上のことをもう少し深く考えると、防災の面でも東北大震災のときに、先ほど言った浜名湖で生まれた水上オートバイですが、1隻で100人以上を救助したのです。これは新聞等によく出ておりました。したがって、水上のネットワークは、防災技術の面でも大変重要なのです。この辺が日本ではちょっと忘れられているということがあります。

もう一つ、少し夢物語になるかもしれませんが、天竜川の水上の道について意見を述べたいと思います。

天竜川は信州と太平洋側の都市、浜松等を最短で結ぶ水上の道です。現在、科学技術が向上している点や交通の観点から、再度天竜川を見直すことが必要かと思います。水面だけではなくて、川の上部の空間まで含めて考えていただけるといいと思うのです。例えば、海外では、天竜川みたいな浅瀬を走れるジェットボートというものも走っていますし、それから空飛ぶゴムボートというものがありまして、ゴムボードが空を飛んでいるのです。そういうものに着眼して考えるのも良いと思います。ただ、天竜川にはダムもございますから、ダムには川の駅というものをつくって、その間はバスでつなげて、観光と産業の道として水上の道の活用を考えたら大変いいと思います。

コーディネーター

ありがとうございました。一通り、それぞれご参加の皆様方の道に対する御意見をお聞きしたところでございます。あと時間が10分ちょっととなりましたが、せっかくの機会ですので、まだもう少し意見をという方がいらっしゃったら、お聞きかせいただければと思いますが、いかがでしょうか。

会場にいらっしゃる皆様方、今までの御意見をお聞きして、もし何かこういったのはどうだという御意見があれば、この際ですので、出していただいてもいいかと思うのですが。どうぞ、お願いいたします。

傍聴者 1

中平所長の説明資料で最初に圏域を越えて広いネットワークが出ている図があったと思います。三遠南信自動車道の整備は本当に重要であり、一層の整備促進を期待するところでの意見ですが、そのネットワークを御覧いただくと新東名高速道路と東名高速道路、そして中央自動車道を結ぶ南北軸のラインを見ていただくと、一つは東京方面にある中部横断自動車道がありまして、もう一つが中京方面に三遠南信自動車道があるという中で、中部横断自動車道の双葉ジャンクションと新清水ジャンクション間が、たしか平成30年頃の全線開通見通しとなってきますと、やはりもう1本の縦軸である中央自動車道と新東名高速道路及び東名高速道路を結ぶ三遠南信自動車道の早期開通の必要性が、益々あるので

はないかと思います。その点からも整備促進に大いに期待をしているところであり、そんな点も踏まえて要望をさせていただいたところです。

コーディネーター

中平所長、中部横断自動車道は30年度だという話がありましたが、いかがですか。

国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所中平所長

私も詳しくは存じてないですが、今言われたように30年度供用とはお聞きしています。

コーディネーター

三遠南信自動車道としても、やはり南北軸のつながりは大事ということだと思います。どうぞ、お次の方発言をお願いします。

傍聴者２

中央自動車道を走って実感するのは、すごく狭くてカーブが多く、また特に甲府から東京に行くエリアは受け入れられる交通量も限界で、慢性的な渋滞がすごいです。そういう面においても、三遠南信地域における南北軸というのをきちんとつくらないとだめではないかと思います。

コーディネーター

大須賀会頭お願いします。

浜松商工会議所　大須賀会頭

三遠南信自動車道は、通行料が無料の道路です。これは現在までに開通している区間だけでも、そこを通って飯田まで来るのに何分かかる、今通ってくるところよりも近いということで、途中に様々な地域を通過することになるから地域の宣伝になります。開通してしまうと、通過するだけになってしまい、地域を全然知らないのです。だから現在開通しているところが、また今後三遠南信自動車道が開通すると何分で、もっとこっちの経路が近いですよというPRを今から行えば､町や地域が全部よくわかっていくと思うのです。私はそういう方法を行うと非常に良いのではないかと思います。

コーディネーター

これは勝野町長にお話しいただいた方が良いですね。

阿南町　勝野町長

新東名高速道路を経由しますと、道路の規格が違うものですから、負担も少なく東京へ入れるわけなのです。距離的、時間的にそう違いはないと思うのですが、ただ、中央自動車道はどうしても混んでしまって、なかなか計画どおりに都内へ入れないこともあります。また、中央自動車道は冬の雪には弱いところがありまして、新東名・東名高速道路は雪の影響を受けることが少ないものですから、計画通りに移動するために時々新東名高速道路や東名高速道路を経由することもあります。

コーディネーター

おそらく、浜松いなさジャンクションから鳳来峡インターチェンジを経由して､国道151号を北上する場合と、新東名高速道路から豊田東ジャンクションを経由する場合とでは、ほぼ同じぐらい時間がかかるという感じがします。三遠南信自動車道が整備されれば、もちろん早くなります。阿南町もそうですけれど、伝統文化芸能の宝庫ともいえる地域をずっと通っていくことになりますから、それだけ楽しみも増えるのではないかと思います。

それでは、「道」の分科会としての報告をさせていただくための取りまとめをさせていただきます。

本日、お話がそれぞれございましたが、やはり三遠南信自動車道の整備を一つの基軸と

しながら、浜松三ヶ日・豊橋道路の実現、それから圏域内外を結びます既存の道路ネットワークや鉄道、つまり中央自動車道や新東名・東名高速道路、それからJR飯田線、そして将来的にはリニア中央新幹線との連結をしっかりとしていくことによって、三遠南信地域のポテンシャルがしっかりと引き出されていくのではないでしょうか。

特に、人・モノ・情報がうまく好循環していく中で、産業面においても、あるいは観光面においても、そして住民の皆様方の生活面においても非常に大きな効果が期待できます。まさに三遠南信圏域全体の活性化が期待できるのではないかと思っております。そのためには、三遠南信地域をもっと知ってもらうためのブランドづくりということも、喬木村長からも御指摘があったところであります。こうした地域のブランド力を、もっと、もっと高めていくことも大事になってくるだろうと思います。

それから、三遠南信自動車道を初めとした高規格道路の整備促進をさらに推進していくためには、新たな人の流れをつくっていく取り組みを進めていくことも一緒になってやっていかなければならないと思います。道路を待っているのではなく、人の交流を積極的に進めながら、交通ネットワークを生かした人の流れをつくっていくことが大事になってくると思います。まさにそういった意味では、こうした三遠南信サミットのような積み重ねが道路ネットワークをしっかりと形成していくためにも大変重要になっていくのではないかと感じたところでございます。

そういった方向性でまとめをさせていただきたいと思いますが、後はこちらに一任させていただければと思いますが、いかがでしょうか。

どうもありがとうございました。皆様方の御同意をいただきましたので、「道」分科会からの報告を私に一任とさせていただきます。

それでは、以上をもちまして、「道」分科会を閉会とさせていただきます。

7 「技」分科会　要旨

San-En-Nanshin Summit 2017 in Minamishinsyu

テーマ「ネットワーク強化による産業振興」

（敬称略）

コーディネーター	公益財団法人南信州・飯田産業センター	航空宇宙プロジェクトマネージャー	松島　信雄
報告者	飯田市	産業経済部長	高田　修
行政	豊川市	市長	山脇　実
行政	田原市	市長	山下　政良
行政	大鹿村	村長	柳島　貞康
経済	飯田商工会議所	会頭	柴田　忠昭
経済	豊川商工会議所	会頭	小野　喜明
経済	新城市商工会	会長	本多　克弘
経済	飯島町商工会	会長	下平　陸昭
経済	阿智村商工会	会長	藤倉　陽太郎
住民	サンガラトナ	代表	大島　たまよ
住民	奥三河自然と歴史にふれあう会	代表	加藤　博俊

■はじめに

コーディネーター／公益財団法人南信州・飯田産業センター
松島航空宇宙プロジェクトマネージャー

本日は、豊川市の山脇市長、飯田商工会議所の柴田会頭をはじめ、皆様に御参加いただきまして、このディスカッションができますことを、大変光栄に思っております。

本日の進行ですが、事務局からまず前回の議論のおさらいと、今回のテーマについて説明をいただきます。次に飯田市産業経済部の高田修部長から地域産業のプラットホームを目指してと題しまして、御報告をいただきます。そして、その後、御出席の皆様からの御意見を承りながら、論議を進めていければと思っております。それでは、最初に前回の三遠南信サミットでの、「技」の分科会で行われました論議について、おさらいをしていただきたいと思います。

事務局

それでは、前回の三遠南信サミット「技」分科会での議論について、おさらいをさせていただきます。

前回の「技」分科会では、各地域には地域資源を活用した特色ある産業が存在しており、そういった地域産業の特色を生かした地域ブランドの育成や、販路開拓に向けた取り組みや、こうした活動を三遠南信地域全体で支援するための取り組み、特にそれを支える人材育成について、議論をいたしました。まとめると以下の3点となります。

1点目が、三遠南信地域創生を図るため、地域内に雇用を創出し、新たな人の流れをつくることが求められる。

2点目、雇用を創出し、新たな人の流れをつくるためには、それぞれの地域が有する、特徴ある産業や歴史、文化、風土に根ざした魅力ある地域資源を活用し、三遠南信地域内での連携、例えばマッチング、独自産業化、産業の集積などにより、新たな価値を加えた産業、商品、サービスに発展させていくことが有効です。

3点目、あわせてこれら新産業、商品、サービスを創出するための人材育成及び、その確保が極めて重要であり、引き続き三遠南信地域内の大学、行政、企業、市民団体が連携しながら仕組みづくりを進めていく。

ただいま申し上げましたことを踏まえ、今回の議論のテーマにつきまして、御説明をさせていただきます。

経済活動のグローバル化が進む中で、県境を越えた地域のネットワークを生かした産業競争力の強化を図り、三遠南信自動車道など、交通ネットワーク整備の効果を最大限に活用するための産業振興の方策を議論するため、ネットワーク強化による産業振興を今回のテーマとさせていただきました。

コーディネーター

それでは、次に、地域産業のプラットホームを目指してと題しまして、飯田市産業経済部の高田修部長から御報告いただきます。よろしくお願いいたします。

■報告

飯田市　高田産業経済部長

本日のテーマが、ネットワークの強化による産業振興でございますので、飯田市産業経済部の立場とともに、この地域の公益財団法人南信州飯田産業センター、あるいは広域連合等、少し広域的な取り組みも含めて、現在取り組んでいることの御報告をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

資料集の22ページからになっておりますが、最初のコマはこの地域の特色ある産業、あるいは製品がありますけど、早速その次のコマからいきたいと思います。

資料集の23ページ下段になります。

初めに、この地域の少し広域的な取り組みの状況から見ていただきたいと思います。

この地域は、飯田市と下伊那郡13町村で、平成21年に定住自立圏の協定を結び、南信州定住自立圏を形成しています。飯田市と下伊那郡は、ともに生活圏、経済圏が一緒ですので、古くから一緒に行政も広域連携に取り組んできています。昭和44年から広域市町村協議会を設立しておりますし、その後常備消防や特別養護老人ホームあるいはごみ処理という形で、一部事務組合を経て、平成11年に南信州広域連合という形で、広域行政を進めてきています。ここに、左上には、医療、救急医療の関係で、どのような取り組みをしているか。それから、右側が産業センターですが、この産業振興の部分について、次のコマで見ていただきたいと思います。

この地域では、飯田市と下伊那郡内の町村、長野県、それからこの地域内の企業あるいは、業界団体の皆様の出資で昭和58年にその当時の名称でいきますと、飯伊地域地場産業振興センターという法人が設立をされています。この法人は、この地域、市町村の枠を超えて、産業振興を図るための法人として設立をして、その拠点となる産業センターが、昭和59年に

完成をしています。それぞれ、市町村の負担だけではなく、国、県の支援、それから地域内の企業の皆様にも御出資をいただいて、この施設もつくられています。

昭和58年当時からこの地域は一市町村ではなくて、広域的に産業振興、特に地場産業や製造業の分野で一緒に取り組むという風土がずっと育ってきている地域です。この中の、産業センターの取り組みとして、特に最近注目を集めておりますのが、航空機に関する部分です。この地域は精密機械をはじめとした産業が盛んであったわけですが、どうしても中小の下請け型という形でした。そういう中でグローバル化、あるいは生産拠点の海外シフトという形で、どんどん付加価値が下がっている状況の中で、この地域の製造業をどうしようかということがありました。その中で2006年に飯田航空宇宙プロジェクト、あるいは飯田産業技術大学がスタートすることになります。それは、ねらいとすれば二つあります。一つは、航空機分野を目指して地域内の企業が協力をするという地域内の製造業、特に精密機械の関係企業が協力する風土をつくろうというのが、この真中です。

それから、この地域には高等教育機関がありませんので、技術者にそういった場所を提供しようということで、飯田産業技術大学が2006年にスタートをしております。

なぜ航空機かということですが、この地域は非常に精密機械が強い分野でありした。それから、特に航空機産業は、その当時から成長が注目をされておりましたので、その分野に取り組んでみようとなりました。また、この地域は航空機産業の中心である中京圏に近いというメリットがあります。それからもう一つは、この地域に多摩川精機株式会社というリードしていただける会社があることです。いろいろな要件の中で、航空機産業を選択して、航空宇宙プロジェクトがスタートしたのが2006年でした。それ以来ずっと取り組んできているわけですが、この地域は部品加工の分野が強い一方で、それをユニットとしてつくり上げるにはこの地域の中でできない部分がありました。それを、地域の中で一貫生産できるにしようということで、この航空宇宙産業クラスター拠点工場を産業センターが借入をし、国や県の支援を受けて建設をしました。この工場が整備されたことによって、熱処理や表面処理、非破壊検査という、それまでできなかった部分も含めて、この地域の中で航空機の部品にかかわる一貫生産をする体制が、ようやく整ってきたという状況です。

次に、この航空機以外の部分ですが、この地域にはその精密機械以外にも伝統的に食品、お菓子類の食品、あるいは味噌、醤油などの発酵の分野、あるいは、高野豆腐という食品系に非常に強い企業があります。

今申しました機械工業もありますが、そうした企業の皆様が健康長寿社会に貢献をしようと、企業の枠を超えてネットワークをつくったのが飯田メディカルバイオクラスターです。目的は、健康長寿社会を支える新しい産業を作り出すことです。

それを目指すために、二つの分科会をつくっています。一つは、医療機器系分科会、もう一つは食品系分科会で、現在それぞれに取り組みをしております。医療機器系分科会では、例えば市立病院の医療機器は大変ですが、その周辺機器で何か困っている部分はないか、それをこの地域で何かできるものはないのか、という研究をしています。

それから、食品系では、この地域内の食品の皆様が一緒になって、介護食品やのどに詰まらないような嚥下食品などについて地域の食材を使った食品ができないかという研究をできるだけ実用化に向けて取り組んでいます。産業界、医療機関、あるいは飯田女子短期大学などのいろいろな機関、団体がメディカルバイオクラスターというネットワークを組織して、取り組みをしているところです。

そういう中でこの地域、平成24年だったと思いますが、リニア中央新幹線のルートが決定、それから長野県駅の場所もおおむねわかってきました。この地域として三遠南信自動車道とリニア中央新幹線という高速交通網が整備される時代が、十数年後にはやってくるわけですが、この地域をどうしていったらいいのかが課題となってきました。

そういう中で、産業振興の方向を考えたときにこれからの産業センターの役割は何だろうかということを、4点整理してあります。

1点目が、技術の高度化、新たな分野へ挑戦を支援する研究開発機能です。2点目が、企業の研究開発を支援する公的試験場としての試験検査機能です。3点目が高い技術力を持つ人材を育成する機能です。4点目が、インキュベートや情報発信等によって異業種連携や起業家の育成という部分をこれからしっかりやっていくことによって、この地域のものづくりの高度化、付加価値を高めようじゃないかということで、産業センターの役割を確認したときに、現在の場所では少し手狭であり、老朽化が目立つという課題がありました。

もう一つの視点ですが、旧飯田工業高校というものがあります。これは、リニア中央新幹線の長野県駅の予定地から1キロメートルほどのところにあるのですが、県立高校の統合によって、この高校が廃校になりました。広い敷地、頑丈な建物でございますので、何とか地域で産業振興や人材育成に使えないだろうかと検討が始まったのも同じころです。

その中で、この工業高校の建物の利活用の一つの方策として、産業センターの機能をそっくりここへ移すことはできないだろうかとなってきたわけです。ただ、これは県の施設でございまして、それを私どもの地域で使わせていただくためにはどうしても県の支援が必要ですし、これだけの施設を改修するにはどうしても費用がかかりますので、国からの支援もぜひ引き入れたいと考えてまいりました。その中で、現在注目されている航空機産業をリード役にして、国、県と連携できないだろうかと考えるに至りました。

先ほども申しましたように、目的の一つは産業センターの機能を高めていきたいということですが、その中でも国等から注目されておりましたのは、この地域の航空機産業にかかわる取り組みについてです。地域から見れば航空機の部品製造という部分から、もう少し付加価値を高めていくためには、航空機システム装備品分野へ挑戦をすることが大事だということで、そのためには、二つの柱が必要です。

一つ目の柱は、人材育成のために大学の力を呼び込むこと、それからもう一つの柱は、公的試験場としてしっかりと試験評価ができる機能を持つ必要があるということです。この公的試験場の機能部分をこの旧飯田工業高校の施設を活用する目玉にできないだろうかということで、国や県と相談させていただきました。そういう中で、先ほどの旧飯田工業高校の施設を県から譲り受けて、この地域で航空機産業を進めていくための核をつくっていこうということがようやく県と話が進んでまいりまして、長野県には航空機産業振興ビジョンをつくっていただいて、しっかり支援をいただけることになりました。

それから、先ほどの旧飯田工業高校施設の改修につきましても、国の地方創生交付金を14市町村、この地域全部の市町村が共同で手を挙げて申請をし、交付金を受け、現在改修工事に入ったところです。そういう形で拠点をこれからつくっていこうということです。

それからもうひとつ、信州大学の力をお借りして、航空機システム共同研究講座という信州大学工学部の新たな大学院生を養成するための講座を、この旧飯田工業高校でやっていただけることになりました。当面は寄附講座という形で、地域内の企業、行政、それから金融機関がそれぞれお金を出し合って、こ

の信州大学の講座設置をお願いして、資金は地域でつくるから、ぜひ講座をこの地でやってほしいということで、信州大学と話がまとまって、本年の4月からこの講座はスタートいたします。

この信州大学の講座の専任教授として、ここに名前はありませんが、昨年の春、JAXAを退官された工学博士の柳原先生を、この講座の専任教授としてこの地にお迎えすることができて、この4月から航空機システムにかかわる大学院生の養成が始まります。

航空宇宙システム研究センターとありますが、ここは地域と信州大学の教授の皆様と一緒になって、研究開発を進めるためのセンターという機関を信州大学の中につくっていただいて、大学と地域企業のネットワーク構築も進みつつあるという状況であります。

旧飯田工業高校の施設を使いたい、改修したい、それを県から譲ってほしいということのために、航空機産業が前面に出ておりますが、産業センターの役割として重要なことは、地域にある資源を使った様々な産業をしっかり高度化し、付加価値をつけていくことだと思っています。そのための拠点づくりとして、航空機産業を前面に出して外からの支援も受けながら、この地域全体の技術力を高める、あるいは産業の高度化を図っていく、付加価値を高めていくことを取り組んでいきたいと拠点づくりに頑張っている状況であります。

■意見交換

コーディネーター

高田部長から飯田市の産業振興、特に新しい「知」の拠点構想を中心に御説明いただきました。

それでは、意見交換の時間に移らせていただきます。

まず、最初の設問でありますが、地域内の連携によって現在取り組んでいらっしゃる産業振興策について最初に御紹介をいただければと思います。

最初に日本で最も美しい村連合の大鹿村の柳島村長からお願いいたします。

大鹿村　柳島村長

最初に御指名をいただきましたので、光栄と思いつつ、この「技」分科会のお話に合うかどうかわからなくなってしまった私の原稿を読ませていただきますが、よろしくお願いいたします。

大鹿村は、これまでは、三遠南信地域の一番北側だとお話ししていたのですが、駒ヶ根市などが加入されましたので、ちょっと横にそれたのかと思っているところであります。大鹿村は山間地であり、村の中心を中央構造線が通って、非常に土質等が脆弱なところで、災害は非常に多く、結構昔から、国の直轄の砂防事業などが入っている村です。

現在は、人口1,000人ほどですが、村の産業は、約半世紀前ぐらい前まで夏場は稲作と養蚕、冬場は炭焼きで生計を立てて住民は生活していました。ただ、燃料の変化によって冬場の仕事が変わってきました。先ほど言いましたように、脆弱な地質のために、土木事業が盛んにありましたので、夏場は農業で頑張り、冬場はそういうところに出て、収入を得るということで村の人口も減りつつではありましたが、2,000人程度を維持してきました。

しかしながら、最近は、そういうやり方が

通用しなくなってきました。まず、農業での所得が得にくくなってきました。それから、臨時的な建設業や山の仕事等の冬場に現金収入を得ていたその仕事が、ちゃんとした教育を受け、通年雇用でないとそういう仕事にも携われないという厳しい状況になってきました。仕事がなくて、収入が得られないために村を離れる人たちが多くなってきていると、私は思っております。

現在、大鹿村が一生懸命取り組んでいるのは、農業を目指すＩターン者の転入です。先ほど日本で最も美しい村連合といわれましたが、私の家の周りも大変な耕作放棄地があったのですが、これをＩターン者5名ほどが耕作してくれており、最近見えなくなりました。

そういう方たちが作る農産品を加工等するための施設をつくりながら、また、産品のブランド化を目指し、認定ルールや、ゆるキャラのシールを作成し、今後も村のPR、販売につなげていくという、本当にささやかですが、村にとっては重要なことに取り組んでおります。

コーディネーター

次に阿智村商工会の藤倉会長、よろしくお願いいたします。

阿智村商工会　藤倉会長

まず、最初に高田部長のお話がございましたが、実は、私の本職も精密関係であり、この航空産業にお手伝いをさせていただいているところでございます。阿智村から多摩川精機株式会社への納品のために、たまにですけれども、阿智村からお邪魔をしている状態です。しかしながら、何と言っても阿智村は観光地としての取組みを進めていただいているところでございます。大鹿村の柳島村長ではありませんが、ちょっと論点とずれるかもしれませんが、御了解をいただきたいと思います。

三遠南信自動車道の開通によりまして、圏域間の移動時間がやはり短縮されますので、南信地域に企業誘致の施策を充実させ、企業におけるコストの低減を図るとともに、地元の雇用の増進を図りたいと考えております。また、販路の開拓にも期待されるところでございますので、あと9年後といわずに、もう少し早くに開通ができればいいと思っております。

コーディネーター

阿智村は、観光面でも「日本一星空の美しい村」ということで、今、大変人気を集めていると思います。

次に、サンガラトナの大島様、お願いします。

サンガラトナ　大島代表

私の活動は、伝統文化や衣食住にまつわる手仕事の技から、最先端の再生可能エネルギーの活用というところまで手掛けております。自分のコンセプトとして、伝統と未来の融和、経済と環境の融合というところで、キーワードは、持続可能な社会の構築を目指しております。

具体的に再生可能エネルギーの活用というところで申しますと、今、茶畑のソーラーシェアリングを天竜区で行う準備をしております。ソーラーシェアリングとは、畑をつぶさずになおかつ、畑の生産力をアップさせ、しかも、農家の手間を軽減でき、さらには、農家の収入増を図るという取組みです。農家の収入が上がらなければ、農業に根ざす若者という人口も増えないですし、またそのソーラーシェアリングをする茶畑に関しまして、百古里地区というところなので、百古里めぐりという地区の活性化を図る事業も手掛けております。

地域が元気になることが第一で、その先に移住、定住があると考えており、行政の整え

る諸条件も大変重要だと思うのですが、どのような町、地域に人が住みたいと思うかということを大前提に考え、そういう町の活性化の事業も手伝わせていただいております。

また、生産品に関しましても、私はお茶の事業を手掛けているのですが、日本の茶葉は欧州で大変評価が低いということで、その理由が、農薬が欧州基準に引っ掛かっているということなのです。その国際基準に合う茶葉の生産にも引き続き取り組んでいきたいと思っております。

コーディネーター

ありがとうございました。

続いて、三遠南信地域の産業振興、それから産業競争力の強化を図る上で、先ほどまではそれぞれの地域内の連携を主体でお話をいただきましたが、今度は圏域内での連携に取り組むことによって、さらに効果が期待できる点を中心にして、御紹介をいただければと思います。

最初に豊川商工会議所の小野会頭からお願いいたします。

豊川商工会議所　小野会頭

まず、本日は三遠南信サミットということで、トップの方がお集まりで、お話があるのですが、産業振興は基本的には民間の仕事でありまして、行政や政府がどのようにかかわるかということに、私は大変疑問を持っております。やはり、製造業でも何でもいいのですが、想像力、開発研究などアイデアをいかに醸成させるかが大事であり、これは日本の補助金行政や経済産業省の政策で致し方がないところはあると思うのですが、民間に任せるところは、どんどん民間に任せていかないとなかなか進みません。

もう一つの方法は、大学研究機関からのいわゆるスピンアウト、もしくは共同研究でありまして、大学研究機関をこの地域に誘致、また新しく産業に結び付けることはなかなか難しい。東三河でも豊橋技術科学大学の有効活用、先ほども大貝副学長が言っていましたが、現実の姿として地域との産学連携はできてないことが問題になっていますので、非常に難しいのです。

やはり、産業強化というのであれば、インフラが一番大事ではないかと思います。全体会のトークセッションにおいて、かつては鉄道が唯一の道だったという飯田女子短期大学の高松学長のお話もありましたが、今後は道路、さらには空港の誘致が非常に必要ではないかと考えております。浜松市には航空自衛隊の基地があるのですが、これからMRJ等が行き来できるような、ハブのその先の空港をこの地域に持ってこないと、アクセスという点では、いわゆるグローバルに戦おうとする企業にとっては航空機のアクセスは必要になるのだろうと思います。

そういう意味で、三遠南信自動車道は、その先にある、航空機、空港を目指していくアクセスとして非常に重要ではないかと思います。

それからもう一つは、日本の今の産業界の状況を踏まえた上での、施策を考えなければいけないということでありまして、グローバル展開の中で海外進出をして、企業がどんどんなくなるという中で、衣食住に関するような国内に目を向けた産業の振興が私は大事じゃないかと思います。むしろ、住や食、住みやすさに関連する医療などについての集積を考えていくことが、長期的には非常にあり得るのだろうと考えております。人口が、2050年、60年で8,000万人、7,000万人になるという報告もありますので、やはり国内重視、国内での付加価値を高めるべきではないかと思います。

それ以外のグローバル競争にいかにこの行政や商工会議所がかかわって、一民間企業にグローバル競争に勝つような施策があり得

るのかどうかという点が、私は非常に疑問です。私自身が一企業として海外でやっている中でそのような感想を申し上げました。

コーディネーター

引き続いて奥三河自然と歴史に触れ合う会の加藤代表からよろしくお願いいたします。

奥三河自然と歴史にふれあう会
加藤代表

私は、設楽町からやってきました。午前中は、三遠南信住民ネットワーク協議会の住民セッションにおいて、いろいろな情報や意見を交換してまいりました。

今回は、地域間の連携についての発言ということで、それに結びつくか、ちょっと難しいところもありますが、三遠南信圏という大きなくくりで考えますと、発展をしているところも多々ありますが、実は発展していない場所のほうがずいぶん多いと思います。設楽町は、残念ながら発展していない場所に当たりますが、何とか頑張ろうという意識は住民にも高まりまして、観光産業について、2点ほど重点的に報告したいと思います。

一つは、圏域内の連携によって、互いの長所、短所を情報交換することで、人と人、物と物がつながり、循環することに取り組むことを続けてきました。最近では、わずかではありますが、若い人たちが都会から移り住んで定住するようになってきました。その若い方たちは、本当に自分たちで自立をする力を持っている人たちが移住してきます。我々は何らかの形で、できるところは応援したいと思っております。

二つ目は、地域に合った食物を生かす特産品の開発です。食と風土を感じられる、うまい、気持ちがいい、独特の気分が味わえる、そういった食と場所をつくり上げることで、地域の産物やまた都会では味わえないものをつくり上げ、地域で暮らす仕組みをつくり上げることで、過疎・少子化を緩やかに、都市中心型も緩和できるように臨んでおります。

当地域には段戸高原というところがあります。標高が900メートルくらいあるのですが、ここの環境は北海道の札幌や、軽井沢と非常によく似ております。地域の人たちがこの地域でとれるメープルシロップの生産、段戸牛の放牧を行っているほか、設楽町が高原内の原生林にビジターセンターなどをつくって、役場と地域住民が連携を取りながら、活動する「軽井沢構想」などに取り組んでおります。

コーディネーター

引き続きまして、飯島町商工会の下平会長、よろしくお願いします。

飯島町商工会　下平会長

私も長い間、飯島町に住んでおりまして、東京から飯島町へ移住してきておりますが、その中で昭和47、8年頃、中央自動車道がようやく開通するかしないかという時期でありまして、名古屋方面から少しずつできてきて、その後飯島町を含むこの上伊那、下伊那の伊那谷と呼ばれるところは、すごい変化を遂げてきたわけです。

これが、三遠南信自動車道ができることによって、今度は、遠州、東三河地域の関係の仕事が我々のところにどっと入ってきてくれたらいいという思いでいるところですが、いずれにしてもこの三河、遠州地域で企業がどういう仕事をやっていて、どういうことがマッチングできるかということが、最大の課題になるのではないかと私は思っております。それさえできれば、大きく変わってくるのではないかと思っています。

中央自動車道ができて大きく変わり、三遠南信自動車道ができて大きく変わる、大きな転換期に来ていると思いますので、我々もそれに向かって、しっかりと準備をしていかなければいけないと考えています。

また、それぞれの商工会、企業、あるいは公共団体等において、いかに自分のまちが住みよいまちであるかを PR しながらやっている現状の中で、一番大きく影響してきているのが、地域おこし協力隊というシステムです。飯島町には13人の方が来てくれて、これは3年間の活動期間なのですが、2年の活動を経て企業を興す方も出てきました。少しでもまちに活気が取り戻す最大に考えながらやってきましたので、これから先が非常に楽しみだと思っています。

コーディネーター

引き続きまして、新城市商工会の本多会長、よろしくお願いいたします。

新城市商工会　本多会長

私は、まずもって新東名高速道路の新城インターチェンジができたおかげで、新城市は放っておいてもよくなると以前から言っていたのです。奥三河自然と歴史にふれあう会の加藤さんのお話にもあったように、もうインターチェンジからものの10分、20分でエアコンの必要ないところがいっぱいあるわけですから、日本のど真ん中、東京まで2時間ちょっと、大阪まで2時間ぐらいです。

私も製造業をやっていますので、自分の会社を例にとってお話ししますが、U ターン組が増えてきています。実家に帰ると立派な家があり、大学を出してくれたのだけど、いい人は就職口がなかったから、昔は学校の先生になったのですね。先生が公務員で、働き場がないものだから、教育レベルが非常に高い。だから、そういうことがわかってきて、本当にUターン組がふえてきたのがありがたいと思います。

環境によって、ものすごく変わることがあるわけで、先ほどの高田産業経済部長の話は大変いい話で、リニア中央新幹線の効果は大変なものがあると思いますし、今、政府が地域再生と言っていますが、まさしく飯田市などに大きく投資するべきだと思います。先ほども、空港の話もありました。地理的な条件はあるわけですが、これから空の時代が絶対来るわけですから、タイムディスタンス、時間、距離、何キロありますかではなくて、何時間、何分で行けますかという時代になってくると思います。そういう意味で、私はこの三遠南信地域は、別に悲観することはないし、今後ヘリコプターの時代どころか、飛行機の時代がきて、一遍に10人、20人が移動できる時代が来るわけですから、決して悲観することはないし、私はこの場を借りて、政府に飯田市のような可能性のあるところにどんどん投資し、そういうところがリーダーシップをとって産業振興し、いろいろな産業が生まれ、モデルとなるまちとなってほしいと思います。

私は、まちおこしは市長で決まるとつくづく思っています。本日、豊川市と田原市の両市長がお見えですが、2人とも一生懸命トップセールスをやっていらっしゃいます。

田原市の山下市長や豊川市の山脇市長のようにトップセールスが必要だということは、本当に学ぶ点が多いと思います。

飯田市のように可能性のあり、いろいろな希望を持つことができ、しかも、環境がいいという点は、本当にうらやましく思います。奥三河から、新野峠を越えただけでもう空気が違い、山の緑の色が違うのです。これは、セールス産業にうってつけの場所だと思います。諏訪周辺が精密産業の中心という時代がありましたが、こんなに環境のいい場所ということに加え、リニア中央新幹線が開通すれば東京まで20分かそこらで行くわけですから、私も本当は、営業所などを移したくなるほどいい場所だと思います。私は、本当に可能性のある地域に国は投資すべきだという運動を起こすべきだと思います。

豊橋市で牧野市長の講演を聞いたこともありますが、大変トップセールスがすばらし

い市長だと僕は思い、楽しみにしております。私は、ぜひ、この地域を引っ張るリーダーシップを発揮し、モデル都市になってほしいと期待をしています。

コーディネーター

まずはそれぞれの地域の良さを生かしながら、人、情報、ものの交流について、交通インフラの整備が大きく時代を変えていくというお話ではなかったかと思います。

そういう面では、それぞれの地域が特徴を生かして、ぜひ先端を走っていただければと思います。

まだ、三遠南信自動車道は完成していませんが、南信地域においては、精密加工業が集積しており、東三河、あるいは遠州地域の自動車産業等との交流が高まっております。そういったことも私からも情報をつけ加えさせていただきたいと思います。

特に豊橋市、湖西市、それから浜松市、磐田市で開催してくださっている展示会には、多くの皆様に参加していただいて、かなり活発な技術交流が始まっております。こういうことをさらに促進するためにも、三遠南信自動車道の開通が待たれるのではないかと思います。

次に3番目の課題として、三遠南信自動車道やリニア中央新幹線をはじめ、地域内で計画されている交通ネットワークの整備が各地域内の産業振興に及ぼす効果を高めるために、さらに取り組むべき課題を中心にして、残りのお三方に御意見をいただければと思います。

最初に豊川市の山脇市長からよろしくお願いします。

豊川市　山脇市長

実は私ごとになりますが、南信州地域にピュアホワイトというトウモロコシがありまして、これを4年ほど前に食べたら本当においしかったのです。生で食べられるという点も初めての経験でして、こんなすばらしい食べ物があるから、毎年7月下旬から8月上旬にかけて来るのです。やはり豊川から来ますと、中央自動車道を経由しても2時間、国道151号を通っても2時間以上と大変時間がかかりますが、時間がかかっても食べに来たいと思います。それで、このトウモロコシがこんなにおいしいということをほかの地域で知らない人が多いのではないかと思いますので、この地域に来る人を増やすために、やはりそれぞれの宣伝をしっかりとしていただければと思います。

豊川市は、バラの生産量では日本一を誇っており、今 PR を強化しているわけですが、それぞれの地域のすばらしい財産をお互いに大いに宣伝して、販路を広げることが大事だと思います。

田原市で収穫できたサツマイモを飯田市の酒造会社で焼酎としてつくってもらった亀若の事例もあります。まずは農のほうで、自分のところ、おらが町のすばらしいものをお互いに宣伝して、これから使えるようになったらよいのではないかと思っております。

そして、そういったものをつなぐには、やはり交通インフラが大変重要だと思っております。豊川市でいいますと、国道151号が南北軸を支える重要なルートだと思っておりまして、こちらのインフラ整備についても三遠南信自動車道とともにしっかりと進めていただきたいと思いますし、我々もしっかりと要望していきたいと思っております。

それと、南信州地域はリニア中央新幹線が開通予定ですが、豊橋駅に停車する東海道新幹線のひかりは2時間に1本しかありません。浜松駅に停車するものも1時間に1本です。これをもっと増便していただければ、東京や大阪への所要時間も大変短くなりますし、交流機会がたくさんできると思いますので、しっかりと進めていっていただきたいと思います。この点については JR 東海にお願いすること

になりますが、この地域の発展のためには、インフラ整備は大変重要な課題だと認識をしております。

これからも皆様方と、この三遠南信地域で一緒になって頑張ってまいりたいと思っているところであります。

コーディネーター

引き続いて田原市の山下市長、よろしくお願いいたします。

田原市　山下市長

何といっても、道路インフラの必要性を痛感しております。渥美半島ほぼ全域が田原市になっておりまして、現状では東名高速道路の最寄りのインターチェンジまで1時間以上という地理的なハンディを負っておりまして、それは産業面においても大変大きな課題となっております。交通ネットワークなどのインフラの整備が充実されれば、製品、それから生産物などの物流や日常生活での交通面においても利便性が格段に向上するなど、直接的な面での課題は十分に解決されるものと思っております。

一方でインフラが整備されれば、地域外からの流入人口の増加が見込まれますので、いかに効果的にもてなすかが本市の課題と考えております。せっかく訪れた観光地が期待外れであったり、また食や文化、レジャーが期待にこたえられなかったりしては、リピーターも増えませんので、そんなことが起こらないよう、昨年度から田原市の地域ブランドづくりに取り組んでおります。

その中の一つが今、山脇市長も言っていただきましたし、先ほどのトークセッションの飯田信用金庫の森山理事長もおっしゃっていただきました。

田原市でつくった芋を、飯田市の喜久水酒造に持って行きまして、芋焼酎の亀若をつくっております。これも田原のブランドとして、大変好評をいただいているところです。地域資源や特性を生かしたすぐれた産品やサービスを渥美半島田原ブランドとして認定することで、地域経済の発展や田原市の知名度の向上、そして田原市を訪れる人を満足させるための取り組みとして開始をいたしております。

認定品といたしましては、特産品のメロンを初めとした肉や魚、加工品など78品目を認定しております。

また、各景勝地の駐車場や施設の改修なども計画しておりまして、ソフトとハードの両面からおもてなしの取り組みを進めることが必要であって、これがまた課題でもあると感じています。

コーディネーター

それでは、一通りという面では、最後になりますけども、飯田商工会議所の柴田会頭よろしくお願いいたします。

飯田商工会議所　柴田会頭

テーマは、交通ネットワークの整備がこの地域内の産業振興に及ぼす効果を高めるためにどんな課題が必要かということですが、交通インフラの整備をちょっと整理してみたのですが、二大プロジェクトであるリニア中央新幹線と三遠南信自動車道は、もう皆様御案内のとおりですが、リニア中央新幹線関連につきましては、国道153号の整備、それから中央自動車道座光寺パーキングエリアにスマートインターチェンジを併設し、そのスマートインターチェンジからリニア中央新幹線長野県駅までのアクセス道路の整備が大きな交通インフラの目玉になって、これはもう着々と進んでおります。

先ほどのトークセッションでもお話がありましたが、リニア中央新幹線は人と情報を運び、それから、道路は人と物を運ぶということで、その開通した後の相乗効果は計り知れないものがあります。

それに向けて、まず、一つ目の結論といいますと、この地域の特色や強みを生かした産業づくりということを考えていく必要があるのではないでしょうか。その大きな流れについては、先ほど飯田市の高田産業経済部長のお話にありましたとおり、航空宇宙産業、それから、メディカルバイオクラスターなどといったものを伸ばしていくことが非常に大切な方向性の一つだと思っております。

それから、二つ目には、産業競争力を高めるための戦略的な企業の誘致、先ほど新城市商工会の本多会長が本社などを移したいという話がありましたが、戦略的な企業の誘致、それから地域の連携による産業振興ということが非常に大切になるのではないか、と思っております。全体会のトークセッションに参加をされた方もたくさんいらっしゃると思いますが、そこでは、パネラーの方々がそれぞれ別々の切り口で、いろいろお話をされました。

その中では、この飯田の地域には魅力もなく、さみしいところで、リニア中央新幹線が開通すると、地域外へみんな吸い取られてしまうのではないかと心配する御意見とともに、この地域が非常に魅力的な地域の場所になるので、その魅力を生かして、この地域の発展を目指そうという御意見もありました。大変心強いお話でありましたので、この地域の産業振興の効果を高めるために、もう一度繰り返しになりますけども、この地域の強みを生かした産業づくり、産業競争力を高めるための戦略的な企業誘致、地域連携、こういうことが非常に必要だと考えております。

コーディネーター

皆様から貴重な御意見をいただきました。本日のテーマである、ネットワーク強化による産業振興について、それぞれ、すばらしい地域のよさ、あるいは取り組みをしていらっしゃることをお話しいただきました。それをリニア中央新幹線、あるいは三遠南信自動車道の開通促進、さらに関連するインフラの整備、こういうことを含めてどうネットワークを強化するかという連携ですね。この辺が残された大きな課題ではないのかなと感じております。

そういう面で、一時期、浜松商工会議所が中心になって進めてくださった三遠南信クラスター推進会議という国の委託事業がございました。その中で、次世代の産業振興を図ろうということで、次世代輸送用機器、それから2番目が光・電気・電子産業、3番目が健康医療産業、4番目が新農業、それから5番目が航空宇宙産業、こういう五つのテーマをもって、数年間一緒に連携事業として進めていた時期がございました。これから、三遠南信自動車道とリニア中央新幹線という二つの主要幹線が整備されるについて、先ほど高田部長からも説明がありました機能拠点という構想も飯田市で進めておりますが、今こそ、この三遠南信地域全体の連携をさらに強化し、こうした将来に向けた新産業育成のためにもう一歩踏み込んだ連携が必要なのではないかと感じております。これはどちらかといいますと、SENA への宿題ということで、私から最後に投げさせていただきます。

皆様からいただいた様々な意見を一つにまとめるには、やや乱暴ではあるかもしれませんが、本日のまとめをさせていただきたいと思います。

まず、1番目が三遠南信地域に広がる多様な資源、あるいは、地域のすばらしさを生かした、地域ブランドを確立し、そして、PR しながら地域の連携をさらに強化することで、更なる産業発展が期待されるのではないかという点です。

2番目が、三遠南信自動車道やリニア中央新幹線などの交通ネットワークを生かした戦略的な企業誘致、あるいは産業振興を進めるとともに、この三遠南信全域にまたがる広域

連携の強化によって、将来成長性のある未来産業への取り組みも必要ではないかということです。

そして、3番目が三遠南信地域の産業の発展を支えるための人材です本日は人材のお話が比較的少なかったのですが、やはり産、官、学、金の連携によって、産業競争力を支える人材の確保、あるいは育成、そして定着、誘導に取り組んでいく必要があるのではないかということです。

皆様の御了承をいただいたということで、本日は大変限られた時間ではありましたが、皆様の御協力で円滑にしかも密度の濃い意見交換ができましたことを改めて御礼を申し上げたいと思います。

以上をもちまして、「技」分科会を閉じさせていただきたいと思います。

8 「風土」分科会　要旨

San-En-Nanshin Summit 2017 in Minamishinsyu

テーマ「三遠南信地域の魅力を磨く～交流人口拡大への取組み～」

（敬称略）

コーディネーター	特定非営利活動法人 しんきん南信州地域研究所	所長	林　郁夫
報告者	浜松市	文化振興担当部長	寺田　聖子
行政	豊橋市	市長	佐原　光一
行政	駒ヶ根市	市長	杉本　幸治
行政	松川町	町長	深津　徹
行政	高森町	町長	熊谷　元尋
行政	阿智村	村長	熊谷　秀樹
行政	下條村	村長	金田　憲治
行政	天龍村	村長	永嶺　誠一
経済	蒲郡商工会議所	会頭	小池　高弘
経済	喬木村商工会	会長	藤本　芳男
住民	天龍村柚餅子生産者組合	組合長	関　京子
住民	合唱劇「カネト」をうたう合唱団	普及委員長	清水　良文

■はじめに

コーディネーター／特定非営利活動法人しんきん南信州地域研究所
林所長

豊橋市の佐原市長をはじめ参加者の皆様にはどうぞよろしくお願いいたします。

まず、私の挨拶と自己紹介を兼ねて少しお話をさせていただきたいと思います。

私どもしんきん南信州地域研究所は、飯田市と飯田信用金庫が地域活性化パートナーシップ協定を締結して、平成21年に設立された組織です。

昨年は飯田信用金庫との共同により、三遠南信地域内の信用金庫の連携事業ということで、三遠南信しんきんサミットにおいて三遠南信地域に関する意識調査を実施しております。

三遠南信しんきんサミットは、三遠南信地域に本店を置く八つの信用金庫それぞれが地域金融機関としての存在と役割を地域にアピールするということを主眼としておりますが、もともとは平成19年の三遠南信サミットにおいて採択された三遠南信地域連携ビジョンに

ある「持続発展的な産業集積の形成」という項目の一つに挙げられている「地域金融機関による三遠南信ビジネスマッチングの促進」を具現化するものと認識していただければと思います。

このしんきんサミットでは地域経済活性化に関する講演会、あるいはシンポジウム、物産展を開催しておりますが、昨年新たな連携事業ということで三遠南信地域に関する意識調査というのを実施したというところが経緯でございます。

今回のアンケート調査の結果、二つのことが言えるものと考えております。一つは、三遠南信地域内での他地域からの、それぞれの地域の地域資源への認知度、あるいは三遠南信自動車道に対する認識や意識といった面でまだまだ地域間に温度差があるのではないか、もう一つが、三遠南信自動車道に関する情報だけではなくて、それぞれの地域資源情報あるいは具体的な取り組みの内容についての情報発信や情報提供、そして、人的なものも含めて交流の機会の場の積極的な創造といったものが求められているという結果となっております。

したがいまして、ここに御列席の皆様によりまして積極的な情報発信をしていただきながら、当サミット、そしてこの分科会が情報発信あるいは交流機会の創造機能を発揮できるような場となりますように、よろしくお願いしたいと思います。

それでは、まず前年度サミットでの本分科会の取りまとめ結果、それから、今回のテーマについて、事務局に説明を求めます。

事務局

それでは、前年度の議論の取りまとめ結果につきまして、簡単に御説明申し上げます

昨年度の「風土」分科会では、本地域の多様な地域資源を生かした地域経済活性化と雇用創出を中心に活発な御議論をいただき、次の3点が結論とされております。

1点目、平成29年のＮＨＫ大河ドラマが地域を舞台とする「おんな城主直虎」に決定するなど三遠南信地域の活性化に関し、歴史・文化を大切にし、民俗文化遺産を守っていく取り組みが必要であること。

2点目、地域が有する多様な地域資源を生かすためには、情報発信力を高めていくとともに、SENA の枠組みを中心に一層連携を強化していくことが必要であること。

3点目、三遠南信地域の歴史や風土、文化などをまとめ、遡及力あるストーリーとしてアピールするため、日本遺産の認定を目指すことが有効である、といった3点でございます。

次に、本日のテーマについてですが、民俗芸能、自然、物づくり文化など、三遠南信地域に広がる多彩な資源を磨き上げることによる誘客の促進などの交流人口拡大に向けた取り組みを探るため、三遠南信地域の魅力を磨く交流人口拡大への取り組みをテーマといたしました。

なお、出席者の皆様には、全体会で報告いたしました現行ビジョンの評価が机上にございますので、議論の中での参考にしていただけたらと存じます。

コーディネーター

それでは、日本遺産申請に向けた取り組みにつきまして、浜松市市民部文化振興担当部長、寺田聖子様から御報告いただきます。

■報告

浜松市市民部　寺田文化振興担当部長

日本遺産申請に向けた取り組みについて、取りまとめをさせていただいております浜松市から御報告をさせていただきます。

三遠南信地域につきましては、皆様御承知のとおり、民俗文化財の宝庫と評されているところでございます。こちらの写真は、南信

州の祭りに登場します重要人物でございます。近年ではこうした神々の世界が宮崎駿監督のアニメにも紹介され、世界中から注目を集めるようになっております。これは新野の雪祭りの神様です。

そして、皆様と昨年の三遠南信サミットでこうした無形民俗文化財を中心としまして文化庁の日本遺産としての認定を目指すという方針をまとめ上げたところでございます。これを受けまして、平成28年度当初に35市町村の皆様に日本遺産への参加意向、また構成要素となり得る文化財の推薦をお願いしたところ、御回答いただいた市町村からの構成要素の候補が300件を超える数となりました。文化庁との調整では、連携の意義、この地域の文化財の特色の明確化、構成要素の更なる絞り込みをはじめとして、日本遺産としてのストーリーを確立するように求められております。

日本遺産について、もう一度振り返りますと、単体の文化財ではなく地域の中で共通するテーマの文化財をつないでストーリーをつくり、新たな見どころを模索、提案していくのものが、国の考え方でございます。これは文化財の保護だけではなく、地域振興の活用にも着目しようという制度でありまして、文化庁とその他の官公庁が中心になって進めている事業です。

平成27年度の申請が登録されたエリアは、18か所になります。平成28年度の申請により登録されたエリアは19か所となっております。静岡県、愛知県は認定が0件、長野県は木曽地域の1件となっております。

今のところこういう状況ですが、文化庁は2020年までに全国100か所程度を万遍なく認定すると言っております。後の申請になるほど狭き門になると予想をしているところです。

三遠南信地域ですが、SENAの連携によりまして無形民俗文化財の継承、活用について早くから協議が重ねられてきました。それぞれの集落に伝えられてきた文化財は、少子化や過疎化など集落の抱える問題とともに次世代の継承が大変課題となっております。実はこれは中山間地域だけの問題ではありません。都市部におきましても、町内人口の流出、また新たに住んでいただいた方が実は地域の活動への参加率が大変低いという状況もあり、中山間地域同様の問題が都市部にも生じていると私たちは認識しています。

こういった問題に対して、浜松市がどう取り組んでいるか、参考に6件ほど御案内をさせていただきます。

浜松市内では無形民俗文化財保護団体連絡会が発足しております。それぞれの代表が定期的に情報交換を行い、お互いの課題等を共有し合っています。「谷(や)が違う」という表現が使われるのですが、それまで山を越えた向こうには別の暮らしがあるという認識だった世界が、交流を深めることでお互いを理解し、共通の課題を協力して解決しようとする働きかけが進んでいると考えています。この写真は大河ドラマの舞台でもあります「川名ひよんどり」の会場を連絡会の皆様が視察をされているところでございます。

無形民俗文化財をどのように継承していくかというところで、小中学校の行事の中でそれを形にしていこうという試みでございます。市内天竜区と北区の2校で学校、地域、行政、教育委員会が連携したモデル事業を実施しております。

浜松市は昨年度2月議会におきまして議員提案となります新しい条例、民俗芸能条例を制定いたしました。これは市内に豊富に継承された無形民俗文化財を守り振興するために、市民、関係団体、行政の役割を示しているものであります。当時の議長からは、議会終了後、こちらの新聞にも記載がありますが、この条例が日本遺産認定の後押しになるというコメントもいただいております。

これは「ザ・山フェス」というイベントでございます。浜松駅前で開催しております。

市内の中山間の産物や文化を紹介し、都心部の交流を図る事業であります。赤い部分が舞台でございますが、舞台には佐久間町の浦川歌舞伎に参加した地元の小学生がそろい踏みをしております。舞台の上と舞台の下の部分になります。白波5人男の一場面です。大変好評をいただきまして、御来場の皆様からは、市内に継承された郷土芸能を改めて認識されたとの声もありました。

こちらは静岡文化芸術大学を会場とした日本中世文学会の浜松大会の模様です。こちらにおきまして、浜松市にある懐山という地域があるのですが、その「おくない」の皆様が一場面を演じているところです。この「おくない」で唱えられているセリフが、実は古今集などから古い歌を引くなどして文学的にも注目されているというところで、この学会での注目を受けたものでございます。

私どもは、平成28年度から新たな認定文化財制度を導入いたしました。浜松市認定文化財というものです。皆様のお宝、地域のお宝、これを浜松市が認定するものです。お金は何も出しません。要は何も出さないのですが認定をいたしますので、どうぞ、地域の個性を生かした地域おこしの活動にこれを生かしてくださいという取り組みを進めております。今年度は約100件の申請がありまして、3月末には第1期の認定を公表できると思っております。

以上6件の事業を紹介させていただきました。このように継承、そして未来へつなげる取り組みにとって、2020年の東京オリンピック、パラリンピックは世界に発信できる大変大きなチャンスととらえております。この日本遺産に向けての申請はオリンピック、パラリンピックの文化プログラムのテーマとしても、また本日の「風土」分科会のテーマにも合致するものと考えております。既にそれぞれの市町村で取り組まれている事業も数多くあるかと思いますが、広域連携の取り組みにより、回遊性を持たせて相互にメリットがある活動になればと思っております。今後は文化庁の事前指導にありますように、来訪者の興味にこたえられるストーリーをブラッシュアップしていきたいと考えています。

まだ素案ではありますが、三遠南信地域の無形民俗文化財の多くが古い時代の特色を残しているだけでなく、広域での連携ができれば、山から海の民俗までバリエーションに富んだ祭礼を御案内することが可能となってまいります。祭礼の多くは1年に数日のみの開催ですが、これだけ多くの地域が連携すれば、365日いずれかの祭礼を御案内することができます。ごく一部の祭礼と季節の名産を御紹介しているものを見ていただきますと、1年中魅力のある、途切れない地域であることを御紹介できると思っております。

また、多くの観光客をお招きしたいお祭りと外部からあまり来訪者をお招きできないお祭りがあるかと存じますが、谷（や）を越えた場所に同様のお祭りがあれば、相互に補完し合うこともできると考えています。現時点では日本遺産に見合う構成要素の精査、ストーリーの構成を進め、皆様の御協力をいただき、平成 29 年度の申請を目指してまいりたいと思いますので、どうぞ引き続きの御協力をお願い申し上げまして、私の御報告とさせていただきます。

コーディネーター

ただいまの報告に関しまして、何か御質問、御意見等はございますか。

豊橋市　佐原市長

ちょうど出ているところに1年のお祭りのマップというものがあるのですが、三遠南信地域の花火系のお祭りが、あえて入っていないところについて、この日本遺産の取り組みという中では何らかの要件に当たらないものなのかどうか、教えていただけたらと思います。

コーディネーター

その点いかがですか。

浜松市市民部　寺田文化振興担当部長

国指定、県指定といったものを一つの基準とすることを考えています。また、どのように絞り込むかという点について皆様と御相談を申し上げていきたいと思っております。

今、300件というのは、実は国・県レベルの指定で300件というところです。

皆様とこれからどういった要素とするか決めていきたいと思います。花火も様々ありますので、要素として生かしていくか御検討いただきたいと思っております。

コーディネーター

その他、ほかに何か御質問、御意見等はございますか。

豊橋市　佐原市長

いつもここが問題になるのですが、後継者不足であと5年､10年すればなくなってしまう祭りがあるということがずっと懸念事項であるわけです。

今後、どのように継承していくのかという視点が、例えば都市と山村の交流によって一緒に習うとか、例えば花祭りは前習いがあったりして、東栄町でも都市部の人たちに前習いをし、本番にも参加している例があるわけです。

今後、地域が受け入れるかどうかという問題はあるわけですが、この中に組み入れていかないと、実態のあるものとして厚みを持たせていくということが必要ではないかと思いましたので、指摘させていただきました。

浜松市市民部　寺田文化振興担当部長

まさに連携の意味合いがそこにあるかと思っております。谷を越えてというか、そちらでの取り組みがこちらにも谷を越えて伝わり、いいところを取り入れながら、また連携できるところを探る、そういった点で皆様とまたお話し合いをしたいと思っております。

喬木村商工会　藤本会長

これは日本遺産へ向けてのピックアップについて、全国で100か所ということは、観光資源として掘り起こしということですね。

商工業者から見ると、また視点が違うと思うのです。例えば、飯田地方に「オコギ」があります。「ウコギ」とも言い、タラの芽やコシアブラと同じウコギ科です。

これは例えば伊那市へ行くとそんなにないですね。飯田下伊那地域の人たちはまともに食べているので、飯田下伊那地域の人だけは全国どこにでもあると思うのですが、長野県では飯田下伊那地域だけです。また、びっくりするのは、山形県へ行くと垣根に使ってあって、ウゴキ茶があります。これは鯉もそうなのですけれど、山形県へ行くと、鯉も飯田下伊那地域と同じで、上伊那地域へ行くと鯉こくなのですが、飯田下伊那地域では鯉のうま煮なのです。このように食の文化もちょっと違った視点で見られるのではないでしょうか。

ですから、できれば産業界へも意見を聞いていただきたいと思います。

花火の話が出ました。7月ぐらいから飯田下伊那地域へ来ると毎週必ずどこかで花火が上がっているのです。清内路の花火や8月15日の諏訪湖の花火も有名ですが、小さな市町村、集落で、市町村だけでなく集落で花火を上げています。そういう花火の文化というのは、この飯田下伊那地域へ来ると必ず毎週どこかで見られます。それも、すぐ真下で見られます。

またアンケートについて、何らかの格好で食の文化なり、行事の文化について、我々の団体にも聞いていただければと思います。

このあたりは獅子舞も毎週必ずどこかで、

数十か所で獅子舞をしています。中で太鼓をたたいて、笛を吹いて、飯田の大きなお獅子も有名ですけれど、小さな50戸足らずの集落でも立派な屋台獅子をやっています。それから、山車というか、屋台といったものがありますので、ぜひまた再調査をお願いしたいと思います。

浜松市市民部　寺田文化振興担当部長

ありがとうございます。皆様の御意見がこの場で出てくることが大変うれしいと思っております。

■意見交換

コーディネーター

続きまして、本日のテーマに沿って事前のアンケートを取らせていただいておりますが、三つの論点に基づく意見交換をそれぞれの発言者の皆様からいただきたいと思います。

それでは、三つの論点のうち一つ目の論点である「交流人口拡大に向けた取り組みについて」、御発言をお願いしたいと思います。発言いただく方につきましては御指名をさせていただきますので、その順序でお願いいたします。

まず、高森の熊谷町長に「おんな城主直虎」による広域連携について、お願いいたします。

高森町　熊谷町長

昨年、NHK 大河ドラマ真田丸で長野県の上田市が大いに盛り上がりました。本年は「おんな城主直虎」の番です。高森町には直虎のいいなづけである亀之丞のお父さんが殺害されて、亀之丞の身も危険だということで、10年間、高森町内にある松源寺に逃れていました。

今、町内ではのぼり旗を道路沿いに立て、町内の事業所の皆さんにもこういった小さいのぼり旗を持っていっていただいて、町を挙げて盛り上げているところです。

高森町を大河ドラマの中で直接取り上げていただくことができれば一番よかったのですが、残念ながら10年過ぎて、もう浜松へ帰ってきた場面しか出ませんでした。しかしながら、先日、ゆかりの地の紹介で何十秒間か放映があり、現在、町にも問い合わせが来ております。昨年12月から観光客もやってきていまして、多い日では1日7台の観光バスが松源寺に来ております。これから5月頃にかけて約300台のバスがやってくると聞いております。

今回の大河ドラマに取り上げられるということで、高森町もゆかりの地として大いに盛り上げていきたいと思っています。また、大勢の皆さんに訪れていただいて交流することができればと期待をしておりますし、何より本拠地である浜松市さんとも連携をとりながら取り組んでいくことができればと思っています。

また、高森町は明治大学野球部元監督である島岡吉郎さんの出身地です。毎年8月には明治大学の野球部が夏合宿に来ています。町民との交流、また子供たちへの野球教室をしていただいています。プロ野球選手となる方もいらっしゃいますので、そういった人たちと身近に交流ができるということで、子供はもちろん、大人の人たちもとても楽しみにしています。

この明治大学野球部との交流が縁で、来年8月には東京六大学野球連盟の現役選手によるオールスター戦が飯田市で開催できる運びとなっております。これからも御縁を大切にしていきたいと思っています。

また、高森町は市田柿の発祥の里です。高森町の市田柿と川崎市麻生区に禅寺丸柿という柿がありまして、高森町のゆるキャラが「柿丸君」、麻生区のゆるキャラがひらがなで「かきまる君」です。ゆるキャラと柿が縁で交流が始まりました。

お互いのイベントにも参加していますが、麻生区には昭和音楽大学と日本映画大学という二つの大学があります。この二つの大学も、明治大学野球部と同じように合宿に来てくれるようになりました。合宿の合間を縫って町民との交流、コンサートを開催していただいたり、映画大学では町の中を撮影していただいたりして交流が始まっております。まだ始まったばかりですので、これを長く続けていくことができればいいと思っております。

私たちは普段から高森に住んでいて景色も当たり前のように見ていますが、撮影してくださる映画大学の皆さんのような都会の人たちから見ると、それは決して当たり前の風景ではないようです。東京では味わえない、川崎では見ることができない風景など自分たちの地域に埋もれているあまり気づかない資源にしっかりと磨きをかけていくことが大事ではないかと思っております。

また、友好都市である静岡県御前崎市、熊本県高森町、和歌山県高野町、そして徳島県美馬市とは、行政だけの交流だけではなく、農産物の交流や住民同士の交流も続いております。

一番嬉しかったなと思うのが、昨年の熊本地震の折に静岡県御前崎市の市長から、「高森町と熊本県の高森町が同じ名前ということで何か関係があるのか。」と電話をいただいて、「実は交流しています。」とお話したところ、御前崎市に備蓄をしてあったお米や毛布などを直接熊本県高森町に送っていただきました。普段から人とのつながり、人との交流を大事にしていきたいと考えております。

コーディネーター

続きまして松川町の深津町長にお願いします。

松川町　深津町長

民俗芸能の宝庫だということについて、先ほど藤本会長からもちょっと話がありましたが、交流人口を増やしていくために民俗芸能を生かしていくということ、様々なお祭りのお話が出ましたが、どうしても民俗芸能というのは1年中やっているわけではなく、単発的にやられている。そうすると、文化を守っていくという考え方と、それを使って交流人口を増やしていくとなりますと、論点がちょっと違ってくると思います。

本日のテーマは、交流人口を増やして、それぞれの地域の活力を見出していこうということで考えていきますと、その一つの民俗芸能に加えて自然、物づくり、あるいは食というものを合わせて、総合的に、戦略的にストーリーをつくるなかでアピールしていかないと「1年のうち、何月何日に非常にいい獅子舞をやっております。」だけで終わってしまいます。交流人口を増やすという点から考えていくならば、文化芸能を伝承することは大事なことですが、それを使って交流人口を増やしていくためには、総合的な戦略でもっていかないと非常に難しいのではないかということが、感想でございます。

私どもの町でございますが、少しでも多くの人に訪れていただいて、地域のファンを少しでもつくって、人・もの・情報が動くことで経済が動いていくと考えてやっております。

松川町は果物の町でございます。春先のサ

クランボから始まりまして、キウイ、ブルーベリー、桃、ナシ、リンゴ、12月いっぱいまで、とにかく果物のおいしいところで、日夜の寒暖の差もあり、果物について大きくアピールをしているところでございます。

多くの皆さんが年間を通じまして果物狩りに訪れていただき、直営の温泉、それから山林を生かしたフォレストアドベンチャーという施設もございます。そうしたことを総合的に、中心になるのはやはり果物だと考えております。

しかしながら、高齢化あるいは後継者不足等問題を抱えておりますが、果物の里としての情報発信を続けていきたいと思っております。

私どもも姉妹都市があって、多くのおいしい果物をアピールしてまいりました。ただ、先ほどの話ではないが、そうしたアピールがどう成果を上げて、どういうふうに動いて、どういう町を目指して戦略的に動いているかという点については、残念ながら欠けている部分もあると考えていることから、現在、DMO（観光局）の立ち上げの準備室を設け、民間の感覚も取り入れる中で検討しています。

なぜ、そうしたことをやったかというと、行政が全て観光の分野に携わっていると、行政が、どんどん大きくなっていってしまいます。そして、民間の感覚を入れる中でスピード感も持たせていくとなると、そういった組織を立ち上げて総合的に考えていくことが大切ではないかと思っております。

コーディネーター

続きまして、阿智村の熊谷村長、お願いいたします。

阿智村　熊谷村長

自分たちの取り組んでいることと、そして、サミットをずっとやっていまして提言も含めてちょっとお話をさせていただきたいと思います。

阿智村には、御存じのように昼神温泉郷があり、観光立村ということで、観光を中心になってやっている村でございます。

分科会のテーマが交流人口の増加ですので、今も松川町長から話がありましたように、村が DMO（第三セクター）に出資し、民間感覚も取り入れて観光局をつくりましてやっております。

昼神温泉が、年間70万人の方が来るものですから、昼神温泉だけではなかなか厳しい部分があり、滞在型観光をしてもらうため、満蒙開拓平和記念館や、星空が日本一きれいだと環境省から認定が取れたものですから、それも含めましていろいろな分野で滞在型観光の促進を図り、年間130万人の方に来ていただいています。

交流人口を増やすということは、旅に来た方が「阿智村はいいところだね」、そして「三遠南信地域はいいところだね」と思っていただいて、いつかは定年後にこの地域に住んでみたいと思わせることだと思っています。交流人口を増やすことは定住につながっていくと考え、地道に取り組んでいるのが現在我々のやっていることだと思っております。

そして、これからは三遠南信地域全体の滞在型観光をしてもらいたいと思います。例えば昼神温泉に泊まった方がいろいろなところへ行って見てもらいたいのです。この地域を訪れた方は、日帰りや1泊2日という日程なのですが、例えば我々が北海道や沖縄へ行ったときには、「もう2泊しないともったいないね」と思います。何とかこの三遠南信地域を2泊3日できる地域にしていくことが我々の役目ではないかと思っております。例えば松川町でリンゴを食べて、そして蒲郡市でミカンを食べられるとなれば、この三遠南信自動車道が開通すれば1時間ぐらいで結べますので、そういったことをもっと戦略的にやっていくことが非常に大事ではないかと思っております。

我々、南信州地域の人は本当に海に憧れています。東三河地域や遠州地域に行って海を見るのが楽しみです。そして、逆に東三河地域や、遠州地域の皆様は山を見るのがすごく楽しみだと思いますので、やはり交流を通じて2泊3日滞在して、これは観光だけではないと思いますので、先ほども寺田部長のお話があったように、祭りのことなど様々な切り口はあると思いますので、ぜひそういったことができるといいと思っています。

ただ、これは言っているばかりでは進まないと思いますので、先ほども全体会で牧野飯田市長が言われましたように、簡単にはできないと思いますが、三遠南信地域での広域連合という話も前々からありますし、まずは戦略的なプロモーションができる人をぜひ、これは民間人でいいと思いますので、SENA の中に1人でも2人でも入れていただいて、予算をつけて、そういった方がプロモーションをつくって、いろいろな切り口を、さっきの花火の切り口や食べ物の切り口でもいいので、例えば観光戦略で行くなど、この10年が勝負だと思っていますので、実際に動いていく、ぜひそんなことをお願いして終わりたいと思います。

コーディネーター

それでは、続きまして下條村、金田村長、よろしくお願いいたします。

下條村　金田村長

下條村は、交流人口の拡大に向けた取り組みを行わなければ、だんだんと人口が減少していきます。人口拡大に向けて、風土というキーワードが非常に大事であるということで参加をさせていただきました。

村の状況を若干述べさせていただきたいのですが、今ここに南信州地域の町村長がいるのですが、下條村の面積は約38平方キロメートルであり、一番小さい村です。かつては農業中心の村であったのですが、現在は飯田市のベッドタウン的なところがあって、第三次産業に従事する者が非常に多くなっています。

日本全国もそうなのですが、長野県も人口がだんだん減ってきている時期に、下條村は子育て支援に関する政策を前村長が早くから実施いたしまして、人口が増え、若年層の者も非常に増えていくという状況だったのですが、ここ2、3年は、人口減少の傾向が大きくなりました。現在は、何とかして人口を増やしていくための取り組みをやっています。

そのためには、交流人口をとにかく多くしなければいけない中で、一つは下條村から転出した人たち、または近隣地域から転出した人たちに働きかけていき、その孫世代をこちらに呼び込む取り組みをしていきたいということで、昨年11月頃から東京で、国、県、それから南信州広域連合で企画しているいろいろなイベントに参加させていただいているところです。

下條村では、市田柿、そばに非常に合う親田辛味という大根、リンゴ、ナシ、そば栽培が農業の中心になっております。

そばに関しましては、遊休荒廃地を解消するために、村で種子から刈り取り、買い取りまで補助を出して、約50ヘクタールのそばを作付けし、そばの城という観光資源がありますので、それを中心にして知名度を上げていきたいということが1点です。

もう一つは歌舞伎です。この間、11月に豊橋市におきまして公演をさせていただいたのですが、大鹿歌舞伎とともに下條歌舞伎も頑張っております。伝統芸能として継続していきたいと思っておりますが、いずれの地域も後継者不足で非常に悩んでおりますので、後継者育成を今後行政として支援をしてまいりたいと思っております。

そのほか、これからいろいろなものを開発

し、発見していかなければいけないかと思っております。

私どもの村内の標高777メートルのところにちょうど神社があります。それから、極楽峠のように知名度のあるものを活用し、滞在型観光を目指した取り組みをこれからしていきたいと思っております。

コーディネーター

それぞれの皆様からそれぞれの地域の取り組みを御紹介いただきました。そういう中で交流人口を増やしていくという点ではストーリーをつくっていく必要があり、総合的な地域戦略が必要であるということです。また、行政だけではなくて民間の活力を大いに活用していく中で、観光という面では連泊を促進するためには広域的な地域連携が必要ですし、それを管理し、推進していくためにもプロモーションができる人材の育成、あるいは後継者を含めて維持、活用していけるような「人」を育てていくことも必要であるということ、地域の資源を改めて再発見していくことが必要であるという御指摘をいただいたかと思います。

次に論点の二つ目ですが、地域連携による資源の活用というタイトルになっております。地域に存在する資源を活用するという上で、特に他地域と連携した取り組み、あるいは今後連携をしていく取り組むべきものにつきまして、御発言をお願いしたいと思います。

まず、駒ヶ根市の杉本市長、お願いいたします。

駒ヶ根市　杉本市長

駒ヶ根市も具体的に総合計画をつくる中で、今、駒ヶ根市に交流人口、観光客130万人、経済効果が大体50億円ぐらいですので、1人4,000円ぐらいなのです。それを三遠南信自動車道とリニア中央新幹線の開通を見越して200万人の観光客、1人1万円の経済効果、200億円と具体的な目標を定めております。

そういった中で地域の資源として、現在、観光客が大勢訪れていただいているのが中央アルプスです。この地域の資源をまず、さらにグレードアップしようと地域連携をしていまして、上伊那8市町村で中央アルプスのジオパーク化を進めようと昨年12月に推進協議会を立ち上げさせていただきました。それから、あそこは県立公園なのですけれど、今、みんなで連携をして国定公園化を目指しております。この目指す理由はインバウンドをターゲットにします。

私も先月、台中市に経済界の皆さんとともに台中空港から松本空港へのチャーター便のインバウンドに関するプロモーションに行って来ました。やはりインターナショナルがつくとつかないでは相手の反応が全く違うのです。世界のジオパーク、インターナショナル、国立ということを目指して勉強して進めております。

それから、富岡の製糸工場、こちらは世界遺産になりました。長野県もかつて大正時代から絹を中心にした産業が非常に盛んでしたので、その絹の道プロジェクトというのを立ち上げようということで、私も発起人となり、絹の道広域連携プロジェクトを立ち上げさせていただいて、県下のいろいろな市町村と連携をして、交流人口増に生かしていきたいと、ストーリーをつくっています。これは民間の方もみんな大勢入っていただいています。さっきのジオパークについても民間の人が大勢入っていただいています。

それから、信州シルクロード連絡協議会を立ち上げ、交流人口を呼ぶための観光ルートを新たに模索しております。

さらにもう一つ、地域外に発信することが非常に大事だと思っていますので、シティープロモーションの協議会が立ち上がっていますので、そこにも今、上伊那郡の市町村に入らせていただいて、いかに全国にどういうこ

とを発信していくか。また、その中で人材育成もしていったらいいかと、今、そんな取り組みもさせていただいて、連携を図っております。

もう一つ、何といっても JR 飯田線の活性化をすることが課題でもありますので、これは全ての市町村で同盟化をさせていただいて、ようやくここ2回ばかりは JR 東海の人と直接会って話ができるようになってきましたので、この辺は三遠南信との連携と仕上がっております。

それから、もう一つ、三遠南信地域の皆さんと、ぜひこれからはシティープロモーションという点は連携していって、いかに情報発信することが物すごく重要だと思います。先ほど、豊橋市長とも話したのですが、私も今度、三遠南信地域で期待していることはリンゴとミカンの交流ができる、山と海の交流ができるというストーリーをつくれば、非常にない者同士を補完し合うという意味では、まだまだそれぞれの地域の特産品や魅力をわかっていない状況です。だから、やはり今、この三遠南信というのは全ていい素材になるのですから、その素材を生かすように今から情報を共有するなど積極的に取り組んでいけば、もっと、もっと連携の力が強くなると思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

続きまして、天龍村の永嶺誠一村長、よろしくお願いいたします。

天龍村　永嶺村長

先ほどトークセッションでも発言させていただいたところですが、私どものところは愛知県と長野県の県境にちょうど位置しておりまして、愛知・長野県境域開発協議会を作っております。をこの協議会は、昭和52年に発足しまして40年が経過しようとしています。この協議会の活動の一つとして産業振興部会がございまして、いろいろな5町村の観光ＰＲ等を中心に行っています。その一つに愛知県豊根村にある茶臼山を中心としたスタンプラリーを行っています。茶臼山には年間で約45万人のお客様が来るということで、茶臼山を訪れたお客様を近隣の町村に回遊していただくスタンプラリーをやっています。三遠南信自動車道などができたおかげで交流人口が約72万人まで増えてきたという統計もあるところです。天龍村では、愛知、長野両県境の5町村が一つになって観光 PR 等にも努めてまいりたいと思っています。

本日は、先ほどの報告の中にもありましたが、民俗芸能についてもちょっと触れたいと思うのです。

私どもの村には国の重要無形民俗文化財の天龍村の霜月神楽があります。これはかなり古くから伝えられたものですが、そのお祭りをきちんと伝承しようということで、「天龍村霜月神楽等資産化実行委員会」を設立しまして、資料集のほかに DVD を4本つくりました。

なぜつくったかといいますと、1番は後継者不足なのです。この大事なお祭りを後世に何とか受け継いでいかなければならないということですが、このお祭りは踊りの所作などを記録したものが全くなかったのです。いわゆる口頭伝承でして、先人の皆様が後継者に身振り、手振りで教え伝えていくお祭りなのです。しかしながら、後継者がいないために絶やしてはいけないということで、細かい部分も今回は文章化し、あるいは映像化して残していこうということでつくりました。これは天龍村の霜月神楽だけではなくて先ほど出ましたが新野の雪祭りや、あるいは和合の念仏踊りといった国の重要民俗文化財に指定されたお祭り全てにおいて、後継者不足、あるいは資金難が1番の課題になっていると思うのです。

そこで、平成27年度から長野県では南信州広域連合と下伊那地方事務所によりまして南信州民俗芸能継承推進協議会が設立されました。こういった伝統芸能を守っていきましょうということで、今いろいろなつながりを通じまして、連携した活動を行っているところであります。天龍村もその一員として一緒になって協力をして、伝統芸能を継承していくことを現在取り組んでいます。

それから、私どもの村では地域おこし協力隊の隊員が7名活躍をしてくれています。地域おこし協力隊の OB の1人が、この祭りの担い手として活躍をしていただいております。そういった外部からの人材を生かすということも一つの手ではないかと思います。その彼は担い手としてだけではなく、民俗芸能に興味を抱く若者を村外から連れてきて、天龍村のファン層の拡大にもつなげていただく活動も行っています。これも交流人口の増加につながっている事例の一つだと思っております。

それから、日本遺産に関する部分ですが、我々のお祭りをよく見てみると、近隣市町村のお祭りと非常に似ている部分があるのです。お祭りの背景や歴史などをたどりますと、そのルーツがそれぞれつながっているのではないかと思っているのです。したがいまして、近隣市町村と一緒になって、歴史や背景を PR することによって広域的な地域の活性化つながるのではないかと思っております。

いずれにしましても、伝統あるお祭りを存続し後世へきちんと継承していくためには、より一層いろいろな面での連携が必要になろうかと思います。

コーディネーター

続きまして、喬木村商工会藤本会長、よろしくお願いいたします。

喬木村商工会　藤本会長

お祭り、伝統芸能、伝統文化を継承していくには非常に困難だという話がありました。

例えば、青森にねぶたがあります。私は東北が大好きで、ねぶたも10回ぐらい行っております。

ねぶたがなぜあそこまで有名かというと、ねぶたというお祭りを産業化しているのです。ねぶたにやってくる観光客などは何十万人という人ですが、それだけの宿泊客を受け入れるキャパシティがないので、青森市周辺の半径50キロから70キロぐらい、時間にして1時間から1時間半ぐらいの地域にある宿泊先を拠点にしています。そして、夕方に会場周辺へやってきて、お祭りは桟敷席で観覧するのです。諏訪湖の花火大会と同じようにも桟敷席、1席幾らで売るのです。

もう1点として、ねぶたは参加することによって参加費を取ります。1週間何百万人と観光客がやってくるのですが、午後9時になると一斉に宿泊先へバスに乗って帰り、ごみも何も残りません。次の日、また大騒ぎのねぶたが始まります。青森港の埠頭がありまして、そこにバスが何十台、何百台と停められるようになりまして、祭りを産業化しています。

お祭りは伝統でやっていくには必ず衰退してしまいます。集落の人口減少に伴う後継者不足に悩んでいるところもあります。お祭りをどうやって産業として生かしていったらいいのかということを考えると、どこかにヒントがあるのではないかと思って、私はいつも見てきております。東北はお祭りが多いですが、そうやってねぶた舞台をつくる大工さんがいたり、いろいろなものを売っているアルバイトの高校生がいたりしております。伝統芸能も産業になるということをお話させていただきました。

さて、喬木村は三遠南信自動車道の竜東側の出口になっております。それから、対岸の飯田市ではありますが、喬木村から5分とかからない位置にリニア中央新幹線長野県駅ができるという非常に恵まれた地域ではないかな

と思っております。

しかしながら、長野県も海の魚がいないのです。三遠南信自動車道が開通し、喬木村から1時間で三河湾へ行けるということは、リニア中央新幹線ができたら、東京のお客さんがこの地方へ泊まりながら海釣りに行ける。1時間もすれば帰ってきて、こちらで料理して食べられる。そういった意味では、三遠南信自動車道は非常に革命的な道路ですし、大いにお互いに連携をし合えば有効にやっていけると思います。

喬木にはイチゴがあります。先日、旅行先でイチゴを売っておりましたので、約500円のパックを二つ買ってきました。喬木村だと650円や680円ほどの値段です。孫が喜んで食べておりましたので、それをちょっと味見してみましたら、一口目はちょっと甘かったのですけれど、二口目には味がないのです。どこで食べても、どこのイチゴを食べても、喬木のイチゴに勝るイチゴはないです。自画自賛をしておりますけれど、一度食べてみていただきたいです。

このイチゴ狩りには、バスだけでも年間数百台がやって来ます。予約でいっぱいのため、「よそをご紹介しましょうか」と言うと、「喬木のイチゴを食べたくて電話しているのです」と粘られることがあります。そんな感じで、喬木はイチゴ狩りと、この飯田下伊那地方が南限となるリンゴ狩りをやっています。

青森には「つがる」という品種のリンゴがあります。また、フジも青森が発祥の地です。飲み屋で、長野県からやってきたというと怒られます。青森で開発したリンゴを長野県がバンバン作って売ってしまうので、青森のリンゴが売れないと怒られてしまうのです。では、青森はどうしているかというと、雪室へ入れて、あるいは冷蔵庫へ入れて、時期を変えてから売っています。そのぐらいこの地方のリンゴがおいしいのです。その理由は、日照時間が長いのです。早くに花が開花して、遅く時期に収穫できるので、当然実も大きくなるし、味も良くなるのです。喬木村だけでなく、飯田下伊那地域はリンゴの産地、果物の産地です。

また、孟宗竹はこの地域が北限で、伊那へ行くとありません。この地方を掘り起こしてみると、先ほどのウコギのほか、誇れるものがいっぱいあります。いちご狩り、リンゴ狩りのほか、市田柿などの果樹、園芸などがあり、また古くから伝わる阿島傘の伝統技術をいまだに継続しているのですが、これは産業としてちょっと成り立たなくなって観光資源として少し売れている程度です。

以上のように、私どもも工夫次第ではいろいろできるのではないかと取り組んでいるわけですが、三遠南信自動車道が開通してもリニア中央新幹線の駅に直結する道がありません。ぜひ皆さんに協力していただき、三遠南信自動車道のアクセス道路とリニア中央新幹線の長野県駅とを最短距離で結べば、三河地方の皆さんが長野県内へ行ける観光の一つの戦略的なコースになるのではないかと思います。ぜひ、この地方でお祭りと観光の一つの戦略的なコースをつくっていけたら誘客ができるのではないかと思っております。

コーディネーター

天龍村柚餅子生産者組合、組合長の関様お願いいたします。

天龍村柚餅子生産者組合　関組合長

先程から皆様のお話をお聞きしていて、豊かな自然、先人が残してくれた歴史や祭り、素晴らしい宝物のある三遠南信地域に誇りを持って活動されている事、天龍村長も私たちと同じ思いのお話をしてくださり、本当にありがたいことだと思いました。

先ほど天龍村長のお話の中にありましたが、長野県と南信州広域連合が「南信州民俗芸能継承推進協議会」を立ち上げて、私も微

力ながら一員としてお世話になっています。

人口は少なくなる一方で、後継者不足の解決方法を考えるなかで、小学生、中学生、高校生の育成についての取組みや企業や一般の人からの理解と御協力を得るためにセミナーやシンポジウムを各地で行っています。

祭りだけでなく、年中あるその他の行事も大切に伝えていくことも私たちの役目と思います。

また、私共「三遠南信住民ネットワーク協議会」では「三遠南信ここが楽しい事典シリーズ」という本をテキストに、遠州、東三河、南信州を巡り、楽しく交流を重ね、各地を知ることにより益々良いところの発見があります。

現在、「南信州交流の輪」として、今まで全く取り上げられなかった「祭りにちなんだ食文化」も同時に伝承していく必要があると考えました。長野県や南信州広域連合の力をお借りして、祭りの実演やスクリーンでの学習、解説の後に、そのお祭りの御膳、お弁当をお上がりいただくイベントを重ねてまいりました。国道151号沿いの新野から生まれた「祭り街道」というネーミングを使わせていただき、新野の雪まつりの「初春」御膳と弁当、天龍村坂部の冬祭りの「神楽舞」御膳と弁当をそれぞれ作り、ありがたいことに浜松や豊橋からも思いがけなく大勢お越しくださりました。

また、夏の流行病を封じる祇園祭や盆の先祖供養の祭り、秋の五穀豊穣に感謝する祭りについても、これから行うところでございます。

ふるさとの祭りを思い出して御協力を頂くよう東京の銀座や長野にも行き、南信州地域出身の方や関係の方々においでいただき、見て聞いてお上がりいただき大変好評でした。

10年後、この伊那谷にリニア中央新幹線も通るようになれば、大都会だけでなく、世界への窓口にもなれると思います。語学の勉強、外国語のパンフレットも必要になり、若い人の力を頼らないとできないのです。

そこで、地域おこし協力隊の皆さんにお願いすることを考えました。そのためには、伝えるべきことはきちんと伝え、私たちには見えないものが見られる新しい感覚の持ち主たち、しっかり定住できる環境づくりを三遠南信地域で一体となって組織作りができる事を心から願っているものです。

コーディネーター

それぞれの皆様から、各地域に点在する資源を、連携あるいは交流を通して点から面へつなげることで価値を高めていくことが大切であると改めて認識されたかと思います。

連携と一口で言いましても、文部科学省の観光ルート、あるいは情報発信、人材育成といった部分もありますし、例えばお祭りと食文化など地域内にある別のものを総合的に活用していくといったこともあるということが認識することができたと思います。

一方で、後継者不足、担い手不足が大きな課題として認識されています。それから、お祭り、あるいは伝統文化と言いましても、これからは産業化の視点が必要だろうということが改めて気づかせていただいたかと思います。

それでは、これまでの御発言を踏まえつつ三つ目の論点ですが、取り組むべき課題ということで、地域資源を結びつけて一体的な振興を目指す上で今後取り組むべき課題について、お聞かせいただきたいと思います。

まず、合唱劇「カネト」をうたう合唱団、清水普及委員長、よろしくお願いいたします。

合唱劇「カネト」をうたう合唱団
清水普及委員長

川村カ子トさんは JR 飯田線の歴史には欠かせない人物ですが、私たちは、川村カ子トさんの半生を合唱劇にした合唱劇「カネト」を各地で公演しています。この前の飯田市で

のサミットの交流会で少しお披露目をさせていただいたこともあります。

関さんも含めて、われわれ三遠南信住民ネットワーク協議会の会員は、いろいろなところで三遠南信の交流を行っています。本日午前中の住民セッションでもこういった話をしている実働部隊です。

小さなことかもしれないのですが、市町村にはいろいろな人がおり、人が動けば交流が生まれるのだと思います。そこに日の目を当てていくことが大事ではないかと思っております。合唱劇の公演は、豊橋市では3回開催したほか、名古屋や新城市、飯田市でも開催しており、飯田市にもカネト合唱団ができています。合唱劇の主人公である「川村カ子ト氏」の故郷である旭川でも行っています。そのときには、こちらから100人ほどの合唱団を組んで北海道へ行き、旭川の合唱団と共に歌い、観客席も満席になりました。昨年は水窪でも行っています。

この合唱劇は、私たちが出向いて公演するのではなくて、その地域の人たちと一緒に歌うのです。そうすることによって、その人たちが「ああ、そうだったのだ」と言って納得していくのです。だから、やはり地域の人たち同士で空間と時間を共有するということが大事であり、それが感動を生むと思うのです。つまり、人々の感動というのは、人と人との交流によって生まれて、それが次の熱源、動力源になると私は思っています。

取り組むべき課題ということですが、山間地では本当に担い手不足だと言われていて、三遠南信地域の貴重なものを継いでいくことが必要なのにできなくなりつつあります。私も三遠南信と関わって30年ほどになりますが、年下の人たちにこのJR飯田線の歴史、地域の隠れた歴史をどうやってつないでいこうかと考えています。今後、若い人たちに三遠南信地域に生きた人々の息吹を伝えていくことの大事さを、私は課題としていただきたいと思っています。

また、三遠南信住民ネットワーク協議会では、三遠南信祭り街道いざないマップというのも、つくっています。ぜひ、その動力源ともいうべき住民の人たちを盛り立てていただきたいと思っています。

コーディネーター

続きまして、蒲郡商工会議所小池会頭、お願いいたします。

蒲郡商工会議所　小池会頭

今、いろいろな町が一生懸命やっているとお聞きもしましたし、蒲郡も年間600万人ぐらい日帰り客が来て、60万人ぐらい泊まっているわけです。あとちょっとすると80万人ぐらいに増えると思います。

それぞれの町がそれぞれやっているのは大切なのですが、三遠南信エリアでやる意味は何かということなのです。半日観光なのか、一日観光なのか、一泊観光なのか、二泊三日なのか。やはりこの三遠南信エリアで取り組むということは、それぞれの町が半日観光をやるよりも遠くから人を呼べる何かをつくっていかないといけないと思うのです。

例えばモン・サン・ミシェルへ行ったって、モン・サン・ミシェルの県が何県なんて知りません。遠くの人、特に海外からやってくる人にとってみると、愛知県だろうが、長野県だろうが、知らない人が多いと思うのです。

そうすると、三遠南信のブランドはどういうイメージのところなのかといったブランディングをしっかりやって、そのブランディングで引きつけながら個々の町のことを調べていくという形にしないと、小さな町、個々の町のことをいっても、それは点なのです。

そういう意味では、僕はこの三遠南信という地域の風土とブランディングをつくり、そして、そのイメージをつくっていくことを真剣にやらないと、いつまでたっても個々の発

信力だけでは三遠南信というイメージができません。

旅行する人にとってみると、旅行先に来るまでが楽しいわけです。調べて、「あそこへ行こう」、「ここ行こう」、「ここにはこんなものがあるかな」ということがちゃんと調べられる情報発信と、時間ができたときにそこに行きたいなと思ってもらえる情報発信をどういうふうに、誰がやっていくかということをしっかり検討しないと、三遠南信という大きな地域で観光なり地域の情報発信をしていくことは難しいだろうと思っています。

そういった意味では、この地域は外からどう見えるか、この町、この地域にはどういう特徴があるのかという差別化をちゃんと打ち出せる組織が大切だと思います。たとえば東三河では、DMOをつくりながら観光、JR飯田線プロジェクトなど、東三河のエリアブランディングを行い、その東三河と遠州と南信州の3地域が一緒になったらどんなブランディングになるのかということをやっていくことが大切だと思っています。

コーディネーター

それでは、豊橋市佐原市長、よろしくお願いいたします。

豊橋市　佐原市長

ブランディングの話は、蒲郡商工会議所の小池会頭からお話いただいたので、私は、日本遺産の話をちょっと振り返ろうと思います。

さきほどのブランディングの話もそうなのですが、それぞれの個々のもの、お祭りであったり、伝統芸能であったり、いろいろなものがあるのですが、それぞれの理解していただける人、知っていただける人たちを増やさなければいけないということが一つあると思うのです。さらに、それは継承していただく仲間を増やすことにもきっとつながると思うのです。

今まで南信州の話ばかり出ていたので、東三河の中でなかなかおもしろいなと思っているものを紹介させていただきます。

花祭が東栄町中心に豊根村、設楽町でやっていて、一部、私たち豊橋市にも、主に豊根村から戦後開拓で出てこられた方たちがお宮さんでやっていたりするのですが、不思議なことに東京の東久留米市でやっているところがあるのです。なぜかは知らないけれど、その地域には花祭を知っている人たちがたくさんいて、そこで毎年やっていただいているのです。その人たちは、東栄町の花祭に参加し、いろいろなところでやるときに応援団で駆けつけてくれることがあります。私たちは、外で行動を起こせば、反応はちゃんとあるのだなということを、そこで学ぶことになりました。

そして、もう1点は先ほども下條村長からお話がありました、南信州では下條村と大鹿村、そして、遠州では浦川と湖西、東三河では設楽の田峯と私たちのところ豊橋で三遠南信ふるさと歌舞伎という名前で、朝から晩までずっと素人歌舞伎を見るというのをやっていたのですが、いろいろな人たち、外から来られた方たちが見ると、「これだけレベルの高い地歌舞伎がある地域はない。」と皆様が驚くのです。それでは、これもいっそのこと東京などに打って出たらと思っています。

いろいろなところで知ってもらって、仲間を増やして、わざわざ今は出かけてきて継承してくれるという人たちが、絶対にいます。東栄町には実家も何もなくて、盆、正月には帰れないけれど、花祭には参加するという人がいて祭りが成立する。地元に帰って、地元の文化を継承しながら自分の先祖に対する尊敬の念を抱くということをやっています。ぜひほかの民俗芸能もルーツをたどり、いろいろなやり方をすれば仲間をふやせるし、全国に散っている自分たちのDNAを持った人たちがまた仲間になってくれるということができ

るので、ぜひ、そういうことをやってもらえたらと思います。そうすることによって日本遺産にするときも応援団がきっとどこかに隠れていて、文化庁にそんな人がいたりするなんていうことになるかもしれません。

最後に一つ、今度は全然違う観光の切り口なのですが、ちょうどプレミアムフライデーが始まります。月末の金曜日で出発すれば2泊しても、日曜日に帰れるので、ぜひおもしろい企画をしてみたいと、そのためにちょっといいヒントをいただいたと思いました。

コーディネーター

最後のセクションは、取り組むべき課題というテーマでしたが、三遠南信地域全体のブランディング力を高めていくことが必要ではないかと思います。非常に難しい問題ではあると思いますが、合唱劇「カネト」をうたう合唱団普及委員長の清水さんがおっしゃいましたけれど、交流によって感動が生まれるというお話はその一つの答えになるのではないかと感じました。

今回、三つの論点に関しまして皆様からそれぞれのお立場で御意見をいただきました。

結びとしまして、本日のこの「風土」分科会の議論の総括をする必要がございます。これにつきまして、次の3点によりまとめさせていただいておりますので、発表をさせていただきたいと思います。

1点目は、地域連携を生かした広域観光の取り組みの促進です。

三遠南信地域を舞台とする「おんな城主直虎」が既に放映が始まり、好評を博していると思います。三遠南信地域にとっても全体に大きな経済効果がもたらされるということが大いに期待されるわけですが、その効果を一過性のものとするのではなく、長期的な視点を持って交流人口のより一層の拡大を図るためにも、これまでに増して地域連携を生かした広域観光に取り組む重要性が高まっているものと考えます。

2点目が、地域資源の維持、承継のための幅広い人材育成が必要であるということです。

地域が有する多様な地域資源を生かすためには、JR飯田線の活用など各地域に点在する地域性を結びつけ、いわゆる点から面への取り組みを推進するとともに、その維持、承継を確保するため、担い手、あるいは推進者、後継者の方、そういった幅広い世代の人材育成に取り組む必要があるだろうということです。

それから3点目、地域ブランド、情報発信力、連携力の強化ということです。三遠南信地域の歴史や風土、文化等、いわゆる地域の宝をまとめながら、訴求力のあるストーリーとしてPRするため、日本遺産への登録実現に向けた取り組みがなされているわけですが、地域全体が一体となってブランド力の強化、あるいは情報発信力を高めるとともに、特にSENAの枠組みを中心としまして、地域内にある具体的な取り組み、実際に取り組んでいることについて、行政と地域、民間が一体となって、一層の連携強化、情報発信、支援協力体制を強化していくことが必要であると考えます。

皆様の御協力によりまして、内容の濃い意見交換を行うことができました。御礼を申し上げます。

9 「山・住」合同分科会　要旨

San-En-Nanshin Summit 2017 in Minamishinsyu

テーマ「ひとをひきつける“みち”づくり」

（敬称略）

コーディネーター	一般財団法人野外教育研究財団	理事長	羽場　睦美
報告者	元天龍村地域おこし協力隊		村澤　雄大
行政	浜松市	市長	鈴木　康友
行政	東栄町	町長	村上　孝治
行政	豊根村	村長	伊藤　実
行政	中川村	村長	曽我　逸郎
行政	平谷村	村長	小池　正充
行政	根羽村	村長	大久保　憲一
行政	泰阜村	村長	松島　貞治
行政	売木村	村長	清水　秀樹
行政	豊丘村	村長	下平　喜隆
経済	泰阜村商工会	会長	秦　和陽児
経済	宮田村商工会	会長	山田　益
住民	夢工房・左閑辺屋組合	事務局長	平松　雅隆
住民	愛知大学綜合郷土研究所	研究員	平川　雄一

■はじめに

コーディネーター／一般財団法人野外教育研究財団
羽場理事長

本日の奥野先生の基調講演は、大変すばらしく、感動いたしました。国がこんなふうに動いていくということを示していただいたと思います。しかし、この三遠南信地域においては、さらに10年も20年も先んじて、県境を越えた地域発信をしていたということを改めて確認できたのではないかと思います。

本日は、全体会でのトークセッションを踏まえ、この分科会では三遠南信地域連携ビジョンの「山」と「住」という分野で、議論を深めてまいりたいと思います。

まず、冒頭に、前年度の会議の内容と本日

の分科会で議論していただくテーマについて、説明をしていただきます。

次に、この分科会の基調報告としまして、実際に天龍村に住まわれております元地域おこし協力隊の村澤様から現在の状況報告をしていただき、議論に入ってまいります。

それでは、最初に事務局から昨年度の議論と本日のテーマについて、御説明をお願い申し上げます。

事務局

それでは、昨年度の議論のポイントについて、簡単に説明をさせていただきます。

この三遠南信サミットでは、三遠南信地域連携ビジョン基本方針に基づき、の分科会を設けてございます。そのうち、「山・住」合同分科会では、中山間地域の活性化と安全な暮らしについて、毎年、分科会で活発な議論をいただいているところです。

昨年度の「山・住」の分科会では、地方創生をテーマに御議論をいただきました。その結果、結論といたしまして4点、まとめられております。

一つ目としましては、基盤整備による物理的・時間的な距離の短縮により、中山間地域の生活環境を向上させるための諸施策を検討すること。

二つ目としましては、三遠南信地域、特に中山間地域の持つ魅力的な地域資源や生活での利点を県域内外に発信する情報発信体制を整備すること。

三つ目につきましては、県境を越える防災体制の強化などについて相互に連携すること。

最後の四つ目は、三遠南信地域ならではのライフスタイル等を最大限活用して、子育て支援や、安心・安全な暮らしのための持続可能な地域づくりに結びつけることが重要であること。

以上4点の結論をいただいております。

次に、本日御議論いただきたいテーマにつきまして説明いたします。

背景として、前回のサミットを2月に豊橋市で開催しましたが、この後、先ほど全体会での基調講演もございましたように、年度末、国土形成計画に基づく国の中部圏広域地方計画が策定されております。先ほど、隣室にもパネル展示がありましたが、この計画では、人口減少や巨大災害の対応と、コンパクト＋ネットワークといった点が主なポイントとされ、高密度な対流により中部圏の未来を開いていこうという内容でまとめられております。

また、この計画ですが、三遠南信地域の連携を項目の一つとして取り上げていただいております。具体的には、「広域連携の先進を行く三遠南信地域の連携」という形で、今後、三遠南信地域の広域連携の取組みに対し、中部圏はもとより全国的にも関心を払われているということでございます。

以上申し上げました認識のもと、今回の分科会では、「ひとをひきつける“みち”づくり」をテーマに設定しており、移住定住などを含めた皆様の取組の御紹介や、今後の課題や御提言等に関して活発に御議論いただければと思います。

コーディネーター

本日のテーマですが、これを三つに分けて受けとめました。

一つ目は、人を引きつけるもの、魅力。これについてのトークセッションをさせていただきたいということでございます。

それから二つ目としては、効果的な取り組み、こういったものがテーマになって、皆様から御議論を賜りたいと思います。

それから三つ目ですが、本日の基調講演にも対流という言葉、あるいは交流という言葉が出ましたが、いわゆる連携、そして人と人が手をつないで取り組んでいくことの大切さについて話していくと理解をいたしましたので、そのような進め方をさせていただきます。

それでは、天龍村地域おこし協力隊、元隊員でございますが、村澤雄大様から報告を頂戴いたしたいと思います。

■報告

元天龍村地域おこし協力隊　村澤氏

本日の議論のテーマに沿うかちょっと不安ですが、地域おこし協力隊時代の活動の報告と、現在について報告をさせていただきます。

私は天龍村の地域おこし協力隊なのですが、出身は飯田市です。ふと最近思い出したのは、15年ほど前、三遠南信中学生交流事業が始まった頃、僕は中学2年生でリーダー研修会に行っておりまして、浜松市に行っています。当時浜名湖の周りを自転車で周り、未来を考えるワークショップをしたことを、最近思い出しました。でも、これだけ長く続いているものに、自分が大人になって話す場を与えてもらえると思わなかったので、大変緊張しております。

地域おこし協力隊の活動内容ですが、体験ツアーや農作業などいろいろやっています。いろいろやっているのですが、本日はやっていることを話すのではなくて、なぜこんなことをやっているかという目的をお伝えできれば十分かと思っています。

なぜ、こんなことをやっていたかといいますと、1人でも多く天龍村のファンをつくるためにやっていました。これは村外の人ではなくて、村内外を問わず天龍村のことを本気で考えてくれる人を増やすために、天龍村の魅力を伝える活動を様々な角度から自分で考えてやってみました。

当時地域おこし協力隊という名前で活動をしていたのですが、実際に活動していくと、地域の人に協力していただいていると感じることが多かったです。そして、むしろ協力してもらえることのほうが大切だったのではないかということに、1年たって気づきました。そこで、天龍村の地域おこし協力隊では、地域の人、天龍村に住んでいる人に協力していただけてありがたいという思いで、「地域おこし協力隊」から「天龍村ありが隊」に変えて、現在も活動をしています。

天龍村に中井侍という地区があります。この地区は、県内で一番おいしいお茶ができるお茶どころとなっています。天龍村ありが隊では、中井侍地区で2年ほど前から、「中井侍に侍はおるのじゃープロジェクト」といった活動をしております。

このプロジェクトは、主に「お茶摘みツアー」と「緑茶カフェのオープン」、「新パッケージ」を考えて販売という三つのことをやっています。村のことを知っていくうちに、中井侍地区のお茶の後継者問題が非常に大きな問題だということを知りまして、少しでも自分たちが問題解消に携われないかという思いでやりました。プロジェクトが終わって1年たって、雑誌の取材が入りまして、工場長さんに感想を聞ける機会がございました。僕たちにとっても初めて地域の人の感想を直接伺えるいい機会でして、自分たちの活動はきっと地区の人も喜んでくれているのだろうと思っていたのですが、地域の人の感想は「正直うっとうしかった」というのが本音だったそうです。中井侍のお茶は有名で売れており、地域おこし協力隊の君たちが出てこなくても売れているよというのが実際のところでした。ただし、「地域おこし協力隊が一生懸命やるので、地域の人がしょうがないから手伝う形になりました」との感想を聞いて、やはり協力していただいているというほうが大きかったです。

この活動が2年続きまして、昨年9月23日に、中井侍地区の人と一緒にお茶を持っていき、お茶の飲み比べや手もみ体験のできるイベントを銀座ＮＡＧＡＮＯでやらせていただきました。この日の売り上げは、地区の秋祭りの復活のための予算に充てました。昔、中井侍

地区の秋祭りがあったときは、春の茶摘みと秋の祭りの年2回、人が集まって盛り上がる機会があったそうです。中井侍地区では5年ほど前から、いろいろな関係で秋祭りができていませんでしたが、イベントと併せて地区の催しを一緒に実施することとできました。

地域おこし協力隊となった当初、自分はどうすれば天龍村で暮らしていけるのかなということばかり考えていました。しかしながら、3年間の活動を通じて自分の気持ちにも変化がありまして、山の中へ1時間入っていくと文化も風習も全然違う地域や天龍村自体が残っていくためにはどうすればいいのかということや、天龍村の人とともに今後も暮らしていくにはどうすればいいのか、天龍村全体のコミュニティーを維持するために自分はどうすればいいのかということを考えるようになりました。

現在なのですが、何足かのわらじを履きかえて暮らしていきたいと思っています。地域おこし協力隊として赴任当初に言われることでもあり、私も最初はそう思っていましたが、3年間の活動期間で起業して、その地域で生活できるようにする、一つの生業で身を立てて生活していくのだと思っていたのですが、ちょっとリスクが高過ぎると思いました。

あと、村内をうろうろしていますと、いろいろなところで若い人の力が欲しいという声が実際に上がります。しかしながら、その力が必要な期間は、通年ではないことが多いです。季節的な仕事など人手が不足していて、必要な場面で声がかかる場面が結構あります。その生業を自分でつかんでいくことで生活ができるのではないかなと今は考えていまして、実際にそれを実施しています。大金はなくても、村の中で生きていく力が見につくのではないかなと自分では考えています。自分の中では、それこそ安定した暮らしなのではないかと考えています。

実際には、生業としては、名ばかりですが、シェアハウス兼ゲストハウスのオーナーとなっています。後は、天龍村から週に1回、お台場の大学まで行かせていただいています。後は、村の「なんでもアルバイター」といって、鹿のネット張りから介護のお手伝いまでやっています。ときには、犬の散歩という仕事もありました。

後は農作業ですね。本日午前中話があったと思いますが、天龍村坂部地区でヤツガシラというイモをつくっています。夏には、天竜川でのラフティングのガイドもやらせていただいております。

地域おこし協力隊の任期が終わったのは昨年7月で、これまで一応飢えることなく暮らせていけているので、そんな大金持ちではないですが、何とか暮らしていけているかと思っています。

また、地域おこし協力隊でやっていた活動も継続しています。現在は「ツメモガキ」と名前を変えて活動しています。ツメモガキは大和言葉でラストスパートという意味で、県内で一番限界集落と言われている天龍村にふさわしいということで、こういった名前をつけて、元地域おこし協力隊の女性と2人で活動をしております。

長野県の阿部知事にもお会いすることができまして、これまでの話をしたら、「県でもこういうことを考えているのだよ」という話をしていただきました。「頑張ってね」と一言言ってもらっています。

以上になりますが、最後に動画を見ていていただきたいと思います。

長野朝日放送主催の「ふるさと CM 大賞 NAGANO」という番組があります。年に1回、長野県内の市町村からふるさと自慢の CM 作品を募集するのですが、天龍村は村全体で作品をつくって応募しようという試みをやっております。

この撮影当日は、この撮影をするためだけに203名の方に集まっていただきました。203

名という人数はそれほど多くないと感じる方もいらっしゃると思います。しかしながら、天龍村において自ら電車に乗れる、自ら動ける人のうち、203名という人数は相当高い割合になっております。このような活動ができるのは、本当に天龍村だけだと感じていまして、私はこれをきっかけにして、本当に天龍村で暮らしていきたいという思いが生まれた日でもありました。

コーディネーター

ありがとうございました。

かつて、アメリカのニューディール政策には地方重視と若者雇用の制作がありました。また、英国のニューディール政策でも、若者の職業訓練と雇用と地方を組み合わせた政策がとられました。現在総務省が中心になって、これらと骨格が似た施策が実行されております。ヨーロッパも30年ほど前に、都市一極集中や日本の経済発展による影響その他によって、地域が廃墟化していって田舎に住む人が少なくなってしまいましたが、それが様々な施策を講じて、若者が田舎に住み始めて人口減に一定の歯止めがかかりました。浜松市の真ん中に5人、10人の人口が増えても全体数はびくともしませんが、例えば天龍村の中井侍地区に5人来てくれると人口動態が大きく変わるわけです。農山村漁村ではこうした若者に期待をしたいと強く感じました。

■意見交換

コーディネーター

それでは討議に入ってまいりたいと思います。

最初に、雰囲気をやわらかくしたいと思いますので、お伺いしたいのですが、前回サミットの風土分科会で浜松市の鈴木市長といろいろと議論をさせていただきました。そのときに、日本遺産をつくろうという話もありましたし、直虎の時代がついに来たということでした。

本当に今、浜松市周辺は井伊谷の一大事件を受けて、どのように皆さん受けとめ、また、活気が出ているのか、出ていないのか。先週、ドラマの中で、亀之丞が高森町の松源寺へ疎開しておりましたが、その後の様子をお聞かせいただいて、話をスタートさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

浜松市　鈴木市長

本年の大河ドラマは、三遠南信地域が舞台ということで、最初私たちもこのドラマが決まったときに推進協議会をつくり、いろいろ準備してきたのです。ただ、去年は知名度の高い真田幸村なので、さて、今年はどうなるか。

ドラマがうまくいかないと波及効果がないと心配していました。しかし、おかげさまで皆さん御承知のとおり、おとわ役の新井美羽ちゃんの名演技もあり、ドラマも上々の滑り出しでございます。ドラマ館もおかげさまでオープンして1か月たたないうちに5万人を超える来場者数です。上田市の母袋市長とお話したときに、「大体、冬場はだめなのだ。スタートして、しばらくはあまり来ないぞ。大体3月や4月から、春先から盛り上がるぞ。」というお話でしたが、出足好調でして、これはぜひ地域の活性化につなげていかなければいけないと思っております。

つくづく今回の大河ドラマを見て感じた

のですが、亀之丞は今川氏から追い詰められて逃げていく際に、新城を通って高森の地の松源寺へ行くわけです。まさに三遠南信地域の街道を通って、ずっと疎開というか避難していくわけですが、昔からこの地域は、経済圏や文化圏として一体的な地域だということを改めて感じたところです。三遠南信地域内には、いろいろな形でゆかりの地があると思いますので、全体でこの大河ドラマを盛り上げられればと思います。

コーディネーター

高森町長にお聞きしましたら、鈴木市長が松源寺に来てくださるそうです。人を引きつける何かがありまして、まさに交流がございまして、それも道がつないでいるということで､南信州地域はJR飯田線で豊橋市と浜松市はつながっておりまして、またつながりが強くなっていくものと思います。

さあ、そういうことで、最初の議題は人を引きつける魅力、それがまた、山、あるいは住むことにどんなふうにつながっていくのか、様々な御意見があろうと思いますので、お聞きしてまいりたいと思います。

最初に根羽村の大久保村長にお伺いしたいと思います。

根羽村　大久保村長

報告の中で流れた天龍村のコマーシャル映像はまさにそういった映像でしたが、いつも私は自分たちの住む地域に誇りと自信を持って生き生きと生きて、それを子供たちにつなぐという生き方をどうしても続けていきたいと思うのです。

そんな中で、私どもが生きる矢作川の一番上流の地域は山林が92％ありますので、その森林資源を木材として使えるものは使いながら、木育部分で使いながら、さらには余剰の部分をエネルギーとして環境に配慮した使い方などをしっかりとアピールして地域をつくり、さらにそういったものを地域の中だけで取り組むことは難しいので、例えば、矢作川の流域連携、あるいは三遠南信の圏域連携の中で木材を使い切っていく仕組みをつくっていくと、山の我々もできますし、それぞれの根羽杉や天竜杉など、様々な地域材があります。それを流域の中で使う仕組みをつくるのが、とても大切ではないかと思います。それを結びつけるのが川であり、道であり、最終的にはこういった人と人とのつながりになると思います。

あらためて、先ほど村澤さんが頑張ってこられた取り組みが地域づくりの原点になるし、例えば、若い人が田舎で働こうとすると一つの仕事では難しいので、ハイブリット的な働き方ができると非常に魅力的な地域になると思います。

コーディネーター

根羽杉のブランド化の状況は、いかがですか。

根羽村　大久保村長

おかげさまで進んでおります。後は、特に地域材に限らずに、木を使ってもらうことによって山の管理ができて、働く仕組みができます。地域の木を使うことによって、地域が生きられるので、そういった仕組みを全国的につくっていただいて、特に都市部でたくさん木を使っていただくといった取り組みをぜひお願いしたいと思います。

コーディネーター

ありがとうございました。

続きまして、中川村の曽我村長、お願いします。

中川村　曽我村長

人を引きつける魅力づくりの効果的な取り組みということですが、中川村にはたくさ

ん魅力はあるのですが、それをどんなふうに村外の方に提供すれば喜んでもらえるのかという点が、まだまだ我々自身が理解できていないと思います。わかっていないのに宣伝ばっかりして、来てもらっても満足してもらえないことになるかと思うので、そこをどうするかということで、一つ具体的なものは、下伊那地域には南信州観光公社という先進的な取り組みをやっていらっしゃって、その中に、中川村も加えていただき、関西方面からの修学旅行生の受け入れを何校かやりました。それは迎え入れることが目的ではなくて、迎え入れることによって、「ああ、こういうことをすれば喜んでもらえる」と、「私たちも楽しいね」という形の、どちらかというと、村内を変えていくために取り組んでみたところ、それはすごく効果が上がってありがたいと思っています。

あと、山の奥のキャンプ場という山での体験ができるところを、それを移住してきた方の仲間が運営をするようになったら、大変たくさんの人が来てくれて、やりとりも活発にやってきたということがあって、気持ちの通じる人たちが運営する体制を、若い人たちの活躍の場をどうつくっていくのかということも、すごく大事だと思っています。

後は、具体的な取り組みなのですが、地方創生絡みで言うと、今地域力がすごく落ちているので、地域に溶け込んで暮らしていただける移住者を迎え入れるための住宅、そして、そこに入ってくれる人を地域の人と一緒に募集をして、一緒に面接をして家族を迎え入れようという取り組みをしています。それから、お家を1軒まるごと寄附していただいたところがあるので、本当に模索の段階でお話できる状態ではないのですが、そこをシェアオフィス的な形で使う方法を検討しています。

コーディネーター

お聞きしていて、ポイントは熟成させるということだという気がいたしました。

中川村　曽我村長

迎え入れる際に、期待されていることとこちら側から提供するものがつながらずにミスマッチというか、ちゃんと期待に応えられていない。こちらから提供できるものを、来てもらえるお客さんもわからないといけないですし、そういったところをこれからしっかりやらなくてはいけないと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。続きまして売木村の清水村長、お願いいたします。

売木村　清水村長

私は村長になって5年目に入りましたが、何とか村を知ってもらいたい、都市と農村の交流を各種いろいろなイベントを通して、かかわっていきたいと、「うるぎ600走る村」をキャッチフレーズに、標高が高いという村の特徴を生かし、合宿誘致に取り組みました。最初に始めた当時は175人だったのが、昨年は1,700人のランナーが村へ来て合宿するようになってきました。浜松市や名古屋市からも約2時間あれば来られるという利点を生かして、村に来ていただくことから始めました。

また、いろいろなイベントを通じて村に人を呼び込むために、キャンプ場を利用しての音楽祭など始めました。

浜松市にあるラジオ局のFMHaro！（浜松エフエム放送株式会社）やK-mix（静岡エフエム放送株式会社）に出演して、浜松へよく行って、広報をさせていただいております。

三遠南信自動車道が鳳来峡インターチェンジまで開通したことで、村へ来ていただくと、「環境がよくて、こんな近くに、いいところがあったのか」ということから定住につな

がっていったりして、いろいろやっております。また「田舎暮らしすすめ塾」ということもやっておりまして、その活動を通じて移住してきた皆さん、そして地域おこし協力隊としてやって来た皆さんが結婚し、その夫婦から昨年2人の赤ちゃんが生まれたという効果もあらわれてきており、やはり自然環境などの現在あるものをどう生かしていくか、これから大事ではないかと思っております。

コーディネーター

ありがとうございます。実は私ども山村留学を古くから開発して振興している財団なのですが、売木村の状況はいかがでしょうか。

売木村　清水村長

山村留学を始めて、本年で34年になります。昔は子供たちが田舎へ行きたいという思いがあったようですが、今は親御さんが山村留学を通して子供を育てたいと思っております。山村留学でやってきた子供はすごく成長します。そういういい取組みだと思っております。

コーディネーター

また後ほど泰阜村長にもお聞きしたいと思いますが、山村留学に来た子ども、あるいは家族が移り住んでくださるといったような効果も出ておられますか。

売木村　清水村長

残念ながら、売木村の場合、山村留学の子供が戻ってきた例は1人もいないのが現状です。

コーディネーター

わかりました。

それでは豊丘村の下平村長、よろしくお願いいたします。

豊丘村　下平村長

この地域にリニア中央新幹線が開通する時代を迎える中で、この地域が変わっていくということは目に見えています。特に都市部の20代、30代、40代の皆さんに調査すると、雇用さえあれば田舎で暮らし、子育てをしたいという方が四十何%いらっしゃるそうです。この地域を見つめるためには、地域おこし協力隊のような切り口の見方、目線も大事なのですが、この地域がいかに子育てをしやすいかという点が重要ではないかと思います。また、長野県では森の保育園構想などに取り組んでいます。都市部の人たちも、自然の中での教育について非常に考えていて、偏差値の高い保育園だけに入れるのが教育ではなくて、子供を人間らしく育てていきたいという非常に要望があるわけです。

現実問題とすると、この「山・住」の「住」に関連し、この地域で住むということは、雇用が必要だということです。いかに雇用をつくり出せるかによって、地域に人が増えてくるだろうと私は思っています。それこそワーク・ライフ・バランス、先ほどもおっしゃっていましたが、それぞれ生業がありまして、様々な要望をいかに定住につなげるかという中では、私どもは例えば、現在コワーキングスペースの開設やワーキングホリデーの受入れなどいろいろやっています。これは今のところ、当村が都市部からあまりに遠いので、農業の方だけを呼んでいるということなのですが、そうではなくて、いろいろな人たちがここへ住み始めれば、例えば、観光や介護などに関する職場をいかにつくり出しながら、かつ、地域独自の子育て支援、例えば豊丘村では保育園同時入所の2人目から無料するなどして子育てを応援しています。これの財源は、ふるさと納税などを使ったりもしているのですが、都市部に対して宣伝することによって、伊那谷へ行って子供を育てよう、行政としては雇用と子育てをしっかりと充実する中で、そして、これからの三遠南信自動車道やリニア中央新幹線が整備される時代に向け

て今から足腰をしっかりすることが必要なのだろうと思っています。

コーディネーター

お聞きしていてインスピレーションを受けましたのは、今の若者たちは、一つの仕事ではなくて、上手な仕事の集め方をして、そして生き方と豊かな自然の中で、ある程度の雇用をみずからつくり出して生活をされているということです。

実は、中山間地域の暮らし方というのは、もともと土木作業をしたり、田植えをしたり、稲を刈ったり、それから柿がなったら柿を出荷したりする。こういう多様な生業を上手につなぎ合わせて、生きてきたのではないか、それを今の若者たちが仕上げしてくれているような状況かと感じました。

豊丘村　下平村長

それだけではなくて、それはそれで、とても素敵で、都市部のいわゆる大量生産、大量消費のライフスタイルに対して、合わないからということで、そういう暮らし方もこの地域ではできますし、また見てのとおり足りないところもいっぱいありますし、企業もあります。その中では、そういう子たちだけに限定するのではなくて、普通の仕事をしたい人、例えば、僕らも知っていますが、うちの地域でも、例えば、農業だけでは暮らせないからと、実は地元の人だって、企業に勤務しながら、休日に農作業を手伝うことは非常にあるわけです。だから、そういう子たちの場合は、都市部から田舎へ来たがっているというのも、これは真実だろうと思います。今、若い世代が、川崎市は年間1万5,000人、世田谷区では1万人増えているのです。しかしながら、彼らはそこに行って、満足な生活をしているわけではないので、田舎のよさというものは大事ではないかと思っています。

コーディネーター

最後に泰阜村の秦商工会長からお聞きしたいと思います。

泰阜村商工会　秦会長

泰阜村では地域おこし協力隊としてやって来て、その後住み着いた方がおります。事業を始めて、皆さん御存知かと思いますが、「けもかわプロジェクト」といって、女性なのですが、獣をさばいて皮で名刺入れなどをつくっております。また、豆腐、こんにゃくの製造を始めてくれている隊員もいます。商工会にも紹介してくれておりますので、商工会としてもいろいろ支援をさせていただいているところでございます。

おかげさまで泰阜村は住宅を建てても、ほとんどがいっぱいになってくれるかなと思っております。空き家対策も考えていかなくてはならないと思っておりますが、本当に地域おこし協力隊の皆さんが住んでくれるということで、うれしいということと、もう一つは、泰阜村へ移住してきて何年かして、その地域の区長をやられる方もおります。そんな方もおりますので、実際に自分がずっと泰阜村にいて、村のどこがいいのかわからないけれども、村の良さを地域外から来た人たちにいろいろ聞いてみなければいけないのかなと、そんな気がしております。

コーディネーター

松島村長、先ほど、山村留学の話をちょっと、売木村のほうとリンクさせて宿題をお願いしてございましたが、いかがでしょうか。

泰阜村　松島村長

羽場さんが始められて、30年経過して、何人か泰阜村に移住してくるという方はおられますが、やはりもっと長い時間がかかると思っています。ただ、それは投資をして、それが返ってくるのに50年とか60年かかるという

話でいいのかなと思っております。

コーディネーター

サケは短命ですが、人間は長生きですので、本流をさかのぼってくるには、まだまだ時間がかかるようです。実は、泰阜のダイダラボッチ元参加者や浪合の通年合宿所の元ボランティアが、今、それぞれの村の協力隊員等として「帰村」しているといううれしい成果も上がっております。

本当は雇用の問題等に関し都市部からの御助言をいただきたいところですが、2番目の議論に入ってまいりたいと思います。

2番目は、いろいろな取り組みが一体どういった効果を生んだのか、あるいはどんなインパクトがあったのかについて皆さんに御意見を伺いたいと思います。

それでは、豊根村の伊藤村長、お願いします。

豊根村　伊藤村長

私は、やはりないもの探しではなく、地域のある資源、地域にあるものをどこまで生かし切れるかということ、それから自分たちの地域をどういったフィールドとして使ってもらえるかということに力点を置いて、村づくりをやってきた一人です。

私どもは、大きくは移住促進と観光交流を目指して村づくりをやっているわけですが、特に定住、移住するのにいろいろなことをやってきました。

まず移住促進ですが、数年前にこれまでの住宅政策では定住につながらないということに気がつきまして、譲渡型の定住促進住宅と、地域住宅というものを建てました。譲渡型定住促進住宅は、30年すると、あなたに譲渡してしまうという住宅なのです。そのことによって1年で25名が移住していただいて、子供を17名ほど連れてきていただきました。そういった中で、もっと地域に根づいた住宅を建てさせていただいて、これからは本当に地域の中で一緒になって地域の活動ができる体制の住宅施策でないと、定住につながらないだろうというところを重きにおいて地域住宅を進めております。

その中で、移住してきた人たちのケアなのですが、やはり私どもの大事なことは、移住してもらうために精力を尽くすのではなくて、移住してきた人たちと先住している住民とが同じ目線で地域活動をできるように支援することが大事だと思っております。

もう一つ、私どもは雇用のために観光と交流を進めているのですが、特にここ数年は、三遠南信自動車道や新東名高速道路が開通したことで、平成26年度までは年間60万人のお客さんに来ていただいたのですが、これを100万人にしようとアクションプランを構築して、いろいろなことをやっております。

そんな取り組みの結果、昨年1年間の統計で72万人のお客さんが豊根に来ていただきました。特にいろいろなことをやった中で、三遠南信地域は現在35の市町村がありますが、茶臼山高原は、長野県と愛知県に接しておりますので、35の市町村のうち22の市町村の方に参加いただき、三遠南信食の祭典を実施し、1日1万5,000人ほどに来ていただきました。多くの方に来ていただいた理由の一つは、三遠南信自動車道が開通したことの効果が出てきているのだと思っております。

コーディネーター

ありがとうございました。それでは、平谷村の小池村長、お願いいたします。

平谷村　小池村長

平谷村は、非常に標高の高い村ということで、自然条件を生かした観光開発を先輩たちが進めてこられていました。

冬はスキー、夏はゴルフ、また、温泉開発によって日帰り温泉、また宿泊温泉等も手が

けてやっているところでございます。

平谷村は標高が高いということで、秋の紅葉が非常にすばらしいものがあります。年間にしますと30万人以上のお客さんが見えるということでございます。昨年から合宿誘致などいろいろやってきたわけでございますが、その中で日本相撲協会の峰崎部屋が名古屋場所の後、2週間ほどの夏季合宿を行ってもらいました。今後5年以上は続けていきたいということで取り組んでいるのが現状であります。

こういう観光開発を中心として、農業の振興にも力を入れてきております。自然条件を生かした農作物で、特にトウモロコシ、トマト等の生産に力を入れ、非常に喜ばれているのが現状でございます。また、近年ではトウモロコシを利用したコーンスープ等も非常に好評で販売をされているところでございます。

また、一昨年から休耕田を利用して酒米をつくりまして、平谷村の米でつくった甘酒、清酒を販売いたしたところ、非常にこれが好評で話題を呼んで、紅葉時に使われているのが現状でございます。

そんなことで、平谷村は農業では食っていけないということですので、林業の再生が一番いいかなと思うのですが、あまり見込みもない中で、今観光開発を手がけて頑張っているのが現状でございます。

コーディネーター

ちょっとお尋ねしたいのですが、平谷村の人口は全国でも大変少ないことで有名でございますが、山に住むという点から、人口対策をどんなふうにお考えになっているのか、現状はいかがでしょうか。

平谷村　小池村長

Iターン、Uターンを非常に宣伝し、進めている中でございます。そういう中での問い合わせの数は結構ございますが、いろいろな条件を合わせていくと、最終的には1件か2件の入村というぐらいで、なかなか人口が増えることはありませんが、人口を増やすより、現在村に住んでいる人がいかに長くとどまってくれるかということに力を入れて取り組んでおります。

コーディネーター

ありがとうございました。

それでは、宮田村商工会の山田会長、お願いいたします。

宮田村商工会　山田会長

商工会長と宮田村の観光協会の会長も務めております。宮田村の人口は9,300人ほどですが、北隣の伊那市にはオリンパス株式会社長野事業場、南側の駒ヶ根市と宮田村には日本発条株式会社駒ヶ根工場と伊那工場、それから伊那市で起業されたルビコン株式会社とKOA株式会社などの会社があり、それらの関係から宮田村も非常に工業が盛んなところであり、またベッドタウン的な要素を持つ村でもあります。

宮田村の人口政策等を一部紹介しますと、村内の建築事業者により新築した場合の利子補給について、借入金残高の0.5%を3年間にわたり毎年10万を限度とした補助や、宮田村の生活を体験し、村を知っていただくために、1泊1,000円で最大30日間、移住体験住宅に泊まっていただくことを進めております。

小学生は、1学年90人から100名くらいおりまして、しかも全然減りません。若い夫婦が大変増えています。また、農業ではNHKで取り上げられましたが、遊休農地がない村です。それは、昭和56年に誕生した「宮田方式」という独自の土地管理制度を採用しているからです。「土地は自分のものだが、土はみんなで生かして使う」という理念のもとに村内の遊休農地でやまぶどうを栽培し、ワインづくりを行い、こちらは通算14年目になりますが、変おいしくなりました。また、リンゴはオー

ナー制度を導入し、愛知県のほか県外からたくさんのお客様に来ていただいています。これも宮田方式というものでして、空いている農地は全て地主に関係なく提供していただきまして、新たに農業に参入しようとする方々と土地提供者との間に村が介在し、トラブルの発生を少なくし、農業をやりたい人が参入しやすくするものです。また、本坊酒造株式会社の工場では、ウイスキーや地ビール、山ぶどうワインづくりをやっております。

観光につきましては、今週、韓国から中学の校長先生たち10名がお見えになりまして、宮田村は中・高校生の修学旅行を引き受ける計画をしております。宮田村には木曽駒ヶ岳がありまして、標高が2,956メートルです。韓国には2,000メートル以下の山しかないということで、韓国から来た方には大変好評です。また、木曽駒ヶ岳は、標高が高いですが、ロープウェイが年中無休で営業しており、冬の時期も自然を楽しんでいただけます。また、アサギマダラの里づくり、秋には赤そば等で観光誘客をしているところですが、いずれにいたしましても、商・工・農のバランスのとれた村だと考えており、これからも発展していけたらと思っています。

コーディネーター

いろいろとやろうと考えておりますでしょうし、商工会も頑張っておられるかと思いますが、具体的に右肩上がりになっているのか、なかなか苦戦しているのか、取り組みの効果はいかがでしょうか。

宮田村商工会　山田会長

一番誇れるのは商工会の青年部です。二世がすごくアイデアを出して新しいものを企画しています。例えば、県より先に挨拶運動をやろうということで、青年部員やPTA、村役場の若手職員等が小中学校へ行って、みんなで校門に並び挨拶をするなど、村のPRビデオで県の大賞をいただきましたが、中学生は帰りに校門で一礼する習慣があり、これは宮田村のDNAというか、感謝の気持ちを大切にするということでやっています。私は名古屋出身の人間ですが、いろいろな場面で一体感があり、人がいいと感じております。

コーディネーター

ありがとうございます。

それでは最後に夢工房・左閑辺屋組合の事務局長の平松様、お願いいたします。

夢工房・左閑辺屋組合　平松事務局長

天龍村の最南端の坂部は、すぐ目の前に愛知県と静岡県の県境が見える長野県の県境にあります。その地域の中で、坂部の冬祭りがあるのですが、これは600年ぐらい前に始まったと言われています。山間地ですので、人々はこの祭りを根っこの部分に置いて暮らしてきました。人々の一番生命力が衰えるといいますか、冬至の時期に生命の復活を祈って行われてきたと言われています。この冬祭り、現在は1月4日になったのですが、そんな中で祭りと食をテーマにして、我々は南信州交流の輪という団体で、先ほど根羽村の大久保村長は森林、材木を活用されていたのですが、我々は竹を器にできないかということで、孟宗竹、青竹、ハチク、これを10月か11月ごろ山から切り出し、切り分け、磨いてから煮沸、水蒸気で消毒し、天日干しします。こういう形で竹器をつくり、祭り街道フェアということで、昨年は銀座NAGANOへ行って来ました。徳利やお猪口をつくって天然由来の器で料理を味わっていただきました。関西では祭り会場テントをつくって、阿南町にあるかじかの湯、そして道の駅新野千石平において70名ぐらいのお客さんに竹の器で料理を出しました。いずれの場でも非常に喜ばれております。

坂部地区には、夢工房・左閑辺屋という昔の小学校が廃校になった跡地にできた地区活

性化施設があります。先ほど事例報告してくれた村澤さんほか地域おこし協力隊の彼らが先頭に立ってイベントを企画し、そこで若い人たちを呼んで、仕事も頼んで、そういうことで非常ににぎやかにやっています。

私が感じているのは、最近若い人たちが祭りや自然にすごく興味を持ってくれるようになったということです。1月4日の坂部の冬祭りでは、施設を無料開放し、泊まっていただいています。

もう一つ、我々がやらなければいけないことは、そういう伝統文化をどのようにつなげていくかが問題であると思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

やはりあるものをどのように生かしていくかということが、世界にもつながっていくということを改めて感じます。

それでは、連携、あるいは交流、そういったものを通じて、山、住の環境を整えていくことについて、皆様の御意見をお伺いさせていただきたいと思います。

最初に、泰阜村の松島村長にお願いしたいと思います。

泰阜村　松島村長

実は、10年ぐらい前に、三遠南信サミットを含む三遠南信というあり方も漂流したと思うのです。ただ、10年ほど前から、浜松市で鈴木市長が誕生し、新たに広域連携が必要だと言われ、方向がはっきりしたと思っています。

私は飯田下伊那の猟友会の会長なのですけれど、鹿もイノシシも猿も、県境の影響を受けることなく移動するものです。しかし、有害鳥獣の駆除の分野では、長野県から狩猟免許を受けるのだけど、県境を越えたら、また違う県の許可を受けなければいけないのです。それは天皇陛下の行幸啓のときもそうであったように、ものすごく強力なのです。そういった経験をしながら、私も村の利益をずっと考えなければいけないということで、移住定住も全部村単独で考えなければいけないのですが、高齢化などが進んだ時代になると、対外的には南信州地域や、さらには三遠南信地域という単位で取り組まないと、泰阜村だけでは移住定住の促進もできない時代になっています。これからはまさに広域連携の時代に入り、三遠南信という切り口でPRできたときに、その中に長野県といったら泰阜村があったという時代になったのかと思っております。鈴木市長が広域連合という三遠南信地域のあり方の提案をされているのですが、私はたまたま狩猟だけの例を出しましたが、いかに県境がいろいろなものを阻害しているかを感じるようになりました。

コーディネーター

鈴木市長も先ほど「県の役割を考える」と、何かそれを示唆するようなお言葉があったかと思います。

浜松市　鈴木市長

後で話そうと思ったのですが、私も県境の持つ意味が徐々になくなってきているということを痛切に感じます。ぜひ行政の境を越えてできることを、この三遠南信の枠の中で追求をしていきたいと思っております。

泰阜村　松島村長

政令指定都市の浜松市が人口16万人の南信州地域のところと対等に考えていることが、市長を褒めるというか、おだてるわけではないですが、そのことは本当にすごいことだと思うのです。

浜松市　鈴木市長

浜松市は12市町村が一緒になったため、面積は伊豆半島より広いのです。旧浜松市域は

人口60万人で、面積がとても狭かったのですが、一番小さな人口1,000人の龍山村も一緒になりました。つまり、現在の浜松市となった旧自治体のほとんどが、皆さんの自治体と同じような自治体だったし、同じようなエリアなのです。だから人口80万人の目線ではなくて、むしろそういう小さな自治体の集合体だと思うのです。たまたま、その地域が広域連携の前に合併し、一つになってしまいましたが、そういう地域の固まりです。地域でやっていく中で、まさに三遠南信の枠組みで、一層広げていくと、もっといろいろな効果が発揮できるのではないかなと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

それでは引き続いて東栄町の村上町長、お願い申し上げます。

東栄町　村上町長

広域連携の取り組むべき課題ですが、私どもの町も実は三遠南信自動車道がつながりまして、13世帯41人が入ってきまして、18人ぐらいの義務教育以下の子供を連れてきたわけです。一方で、高齢化率が高いので、社会増減はプラスマイナスゼロという状況です。こういう状況の中で、私どもの地域の中で働く場の確保は非常に難しい問題ですが、道路がつながりまして、道路の整備がやはり最優先だと思っています。

そうなれば、勤務する地域も広がりますし、子育ては三遠南信地域の中でそういう状況をつくり上げていきたいと思っています。

やはり愛知県と長野県、静岡県の県境にありますと、何が一番課題かといいますと、情報の格差、いわゆる高度情報がとれないということです。これがやはり県境にあるがゆえに、できない状況です。したがって、私ども北設楽郡3町村で情報基盤を整備しておりますが、それでもまだ高度情報がとれない状況にあります。そういった中、情報の連携が本当にこの地域でできれば、さらに静岡県西部の情報、そして東三河の情報、そして南信州の情報、三遠南信地域全体が見えるような情報が、このエリアの中でできれば、こんなすばらしいことはないと思っています。

一つ、東三河では、私どもはエフエム豊橋を使ってイベント情報を流させていただいております。これも非常にいい取り組みですので、ぜひ南信州、それから遠州の、例えばFMを使わせていただいてそこで流させていただくといった連携が三遠南信地域の中でできればいいかと思っています。

コーディネーター

それでは、愛知大学の綜合郷土研究所の平川先生から、御報告等を頂戴したいと思います。

愛知大学綜合郷土研究所　平川研究員

本題に入る前に、本分科会で発言する平松さんと私は、三遠南信住民ネットワーク協議会という組織の会員で、住民団体という立場で参加をしています。サミットの本番前の午前中に10年ほど前から三遠南信地域の交流や連携などを目指した活動団体が集まり、意見交換などする場として住民セッションを開催しています。昨年度からは、三遠南信サミットの各分科会のテーマと関連付けて、分科会での発言内容に関する意見を発表し議論する場としています。

住民団体からは四つの分科会に2人ずつ計8人が出席します。その8名が分科会で発言予定の意見や考えを述べ、それに対して、住民セッションに参加されているみなさんからつけ加えたい意見や考えなどを聞き、とりまとめを行い、分科会に臨んでいます。

そういった中で、「山・住」分科会で三遠南信住民ネットワーク協議会の活動の一つを紹介させていただきます。

三遠南信住民ネットワーク協議会は2012年6月に立ち上げました。翌年から本格的に自主事業を企画し活動しています。その中で2013年度から「三遠南信地域の地域資源の活用方法研修会(研修交流事業)」を始めました。三遠南信住民ネットワーク協議会に参画している会員（団体）が「どんな地域でどんな活動をしているのか」ということなど実際に体験しながら研修と交流する事業内容になります。団体の存在は知っていても、実際にどんな活動に取り組んでいるのかわからないことが多いのです。

特に南信州、奥三河、北遠などの中山間地域を中心に活動する会員が多いため、豊橋市や浜松市などの下流域に活動の拠点がある各団体のメンバーは、中山間地域に地域で活動されている団体や地域の実情がどういったものなのかをよく知らないので、実際に現場を見てもらうことが狙いでもあります。

実施回数は年に3回、東三河、遠州、南信州を1か所ずつ、1団体ずつ回っています。研修交流事業の本番では、外部の者から見た地域資源や地域資源の掘り起こしで見過ごされていたものだとか、当該団体の皆さんと巡検しながら確認していきます。その後、地元の食材を使った料理で昼食交流会を開き、そのまま意見交換会となります。その中で地域資源の確認や新しい発見や再発見、今後何か連携をして、協働の活動ができないか、訪問地域のためになることができないかなどを議論して会員同士でそれぞれの活動内容を理解していきます。しかし、事業としてはまだまだ模索している段階です。

そうはいいましても、その事業を通じて生まれた事例の一つとして、「三遠南信祭り街道いざないマップ【遠州・奥三河編】」の制作の取組みがあります。本日は、現在作成中のドラフト版を発言者の方々に見てもらおうと持ってきました。三遠南信地域にたくさん祭り（伝統芸能）が分布していることやどんな祭りがあるのかを三遠南信地域の見どころなどと一緒に、地図上に示して紹介する内容になっています。これは国土交通省浜松河川国道事務所の委託事業として3月までに完成、発行する予定で主な道の駅に設置する計画になっています。

なお、本事業は、浜松河川国道事務所管轄内ですので、本年度は遠州を中心にマップづくりとなりました。次年度以降は東三河地域あるいは南信州地域にスポットを当てて、祭り街道マップを製作できればと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

それでは、浜松市の鈴木市長に全体のまとめを含めて、お話を頂戴したいと思います。

浜松市　鈴木市長

本日は皆さんの御発言を聞き、それぞれ皆さん本当に工夫しながら頑張って取り組みをされているということを痛感いたしました。

浜松市も、先ほど言ったように合併いたしまして、広大な中山間地域を抱えるようになりました。例えば、林業の振興や中山間地域との交流の促進など、おそらく皆さんと同じ課題を抱えて取り組んでいると思います。観光のほか、林業も別に行政の境は関係ないと考えます。私どもはFSCという国際認証を取得して天竜材のブランド化に取り組んでおりますが、山は一体としてあるわけですから、例えば、林業の振興や観光振興など、地域が一体となり、面として売り出していくと、より強力にアピールできるのではないかと改めて感じました。

あともう一つ、ぜひこれからITやネット、SNSなどを活用して情報発信をしてはどうかと思います。実験的に三遠南信地域で一つの仮想アンテナショップをインターネット上につくりまして、三遠南信地域の特産品のPRなどを実験的に始めていますが、うまくインタ

ーネットを活用してこの地域をPRできるのではないかと思いました。

もう一つ、多種多様な成功事例、うまくいっている各地の取り組みをぜひ横展開をしていくといいのではないかと思いました。先ほど、中川村の村長から、南信州観光公社の取り組みが非常にうまくいっていて、それを広げていただいているという話もございました。こうした全国的な成功モデルとして有名になっている取り組みを、ぜひエリアを広げてはいかがでしょう。それだけマーケットも広がるということですから、いずれは三遠南信観光公社という名前にしてもらっていただいてもいいぐらいです。いろいろな成功事例を横展開していくことも大事ではないかということです。

コーディネーター

1点お聞きしたいのですが、特に災害面も大変に心配されておりました。実際に協力が県や市などでもあろうかと思いますが、その辺はいかがでしょうか。

浜松市　鈴木市長

私どもは政令指定都市になってから、消防備品というものを買わされたのですが、「どうしてそんなものを買わなければいけないのだ」と聞くと、「政令指定都市になったら買うのです。」と言うのです。静岡市も消防ヘリを導入しました。すると、静岡県には、今まで静岡市と浜松市をカバーしていた県の防災ヘリとともに、両政令指定都市が導入した分も増えてしまうので、実にもったいない。そこで、もちろん県内の連携もしますが、三遠南信地域の市町村と協定を結び、浜松市の消防ヘリが県境を越えて出動できるようにしております。

コーディネーター

ありがとうございました。大変つたない司会進行でございましたが、皆様の大変熱意ある御議論に支えられまして、延長後の設定時間に何とか滑り込むことができました。

おおむね三つにまとめて報告したいと思います。

一つ目は、人口減少社会にあって、持続可能な地域づくりを進めていくには、あるものを大切にして、そして地域の持つ様々な魅力を引き出し、資源を十分に活用していくことが大事なのだということを、様々な自治体、あるいは商工会の皆様の活動から改めて確認しあったところです。

二つ目としまして、こうした資源を活用しながら働いたり、本日は天龍村の村澤様からの報告にもございましたが、楽しんで学んだり、協力したりして、情報発信することが大事であるという点です。浜松市長からは、ネットやICTの活用等も含めたことを考えているとの御発言もありました。こういった連携を拡大していくことで、それを定住に結びつけていくということにまとめられるかと存じます。

三つ目ですが、それは安心・安全をめざし連携によって乗り越えていくということでした。南海トラフ地震や巨大災害について、県境を越えた三遠南信地域全体で連携し、対策を強化していくということで力強く締めくくることができたと感じるところでございます。報告会には、以上のように報告させていただきたいと存じます。

改めて皆様の御協力に感謝申し上げ、以上で終了とさせていただきます。

10 報告会　要旨

San-En-Nanshin Summit 2017 in Minamishinsyu

○各分科会の報告
○次回開催地域代表あいさつ

○各分科会の報告

■「道」分科会

コーディネーター／飯田市　牧野市長

今年度の「道」分科会におきましては、2027年度に開業を予定しておりますリニア中央新幹線がもたらす効果、これを三遠南信地域が広く享受していくため、交通ネットワークをどういう形で生かしたまちづくりにしていったらいいかということを中心にして議論を行いました。

屋台骨である三遠南信自動車道、そして浜松三ヶ日・豊橋道路といった南北軸、それからこれまで整備されてきた新東名・東名高速道路、そしてこれからのリニア中央新幹線のほか JR 飯田線など既存の交通ネットワークを生かしたまちづくりにつきまして、様々な意見が皆様方から出されました。

広域幹線道路などのネットワークの形成を展望いたしまして、各地域で進められておりますまちづくりの取り組みやその整備効果をさらに高めるために取り組むべき課題などにつきまして、多くの意見を出していただきました。

こうしたものを整理いたしますと、これからこの三遠南信地域のポテンシャルを顕在化させていくには、やはりこの道路を中心とした広範な交通ネットワークの形成が必要不可欠というように考えられるところです。すなわち屋台骨である三遠南信自動車道の全通、そして浜松三ヶ日・豊橋道路の実現、そこに中央自動車道や新東名・東名高速道路、さらにリニア中央新幹線といった東西軸それぞれをしっかりと連携、結節させ、そして広範な交通ネットワークが三遠南信地域の中でしっかりと機能するように形をつくっていくことが重要と考えます。

このポテンシャルの顕在化ということを具体的に考えてみれば、圏域内外の人、モノ、情報等の好循環が形成されていき、産業資源、産業振興、地域資源を生かした観光振興、あるいは文化や生活など様々な分野で地域の活性化がもたらされるという状況ではないかと考えます。

ただ、意見の中でも出されましたが、三遠南信という言葉は我々の中では既に使い慣れた言葉になっているわけでありますが、まだまだ知名度が低いという御指摘も受けたところであります。すなわち、三遠南信をしっかりと地域ブランドにしていくための取り組みが必要ではないか、三遠南信といったらどこの地域を指すのか誰にもわかるように、この地域ブランド向上の取り組みを地域全体でしていくことが必要ではないかとの御指摘もいただきました。

いずれにいたしましても、リニア中央新幹

線の整備効果を三遠南信圏域全体に波及させていくためにも、この南北軸の屋台骨となります三遠南信自動車道をはじめとした広域幹線道路の整備促進が一層望まれるところです。三遠南信圏域の地方創生に向けまして、こうした交通ネットワークを生かした地域づくりを具体的に進めていこうということでまとめさせていただきました。そのためには、本日お集まりの皆様方をはじめ、関係する皆様方のさらなる連携を進めていき、そして新たな人の流れをしっかりとつくっていくという試みが大事だと思われます。

以上、「道」分科会からのまとめとさせていただきます。

■「技」分科会

コーディネーター／公益財団法人南信州・飯田産業センター
松島航空宇宙プロジェクトマネージャー

「技」分科会は、ネットワーク強化による産業振興というテーマで御議論をいただきました。

はじめに飯田市の高田産業経済部長から、「地域産業のプラットホームを目指して」ということで市の拠点構想等について御紹介をいただきました。

そして、議論に入りましたが、まず設問といたしまして、地域内の連携によって現在取り組んでいる産業振興について3人の方から伺いました。

大鹿村の柳島村長からは、安全・安心な農産物をブランド化して提供できるような取り組みを行っているということでした。

阿智村商工会の藤倉会長からは、三遠南信自動車道の開通によって圏域内の移動時間が短縮され、そして企業誘致あるいはコスト低減、それから雇用増進や販路拡大につなげられるという大きな期待がかけられております。

サンガラトナの大島代表からは、地域の価値を問い直し、小さくても着実な地域経済を目指して活動しているということで、再生エネルギー、ソーラーシェアリングという活動に取り組んでいることなどが紹介されました。

2番目の設問といたしまして、産業振興を図る上で圏域内が連携して取り組むことでさらに効果が上げられることについて、4名の方から御意見をいただきました。

まず豊川商工会議所の小野会頭からは、研究機関を誘致、あるいは新設するなどして活用することが大事であり、また、産業振興にはインフラが不可欠であり、グローバル展開を見据えた空港の誘致なども考えてはどうかとの提言をいただいております。

奥三河自然と歴史にふれあう会の加藤代表からは、圏域内の連携によって互いの長所、短所を情報交換することが大事であり、特に特産品を生かした食文化の創造等に取り組んでいるという紹介がありました。

飯島町商工会の下平会長からは、中央自動車道が開通して伊那谷が大きく変わった。今度は三遠南信自動車道が開通すれば、人の流れが大きく変わり、各地域の産業のマッチングが大きく期待できるというお話がございました。

新城市商工会の本多会長からは、これからは空の時代がやってきて時間との勝負である。また、地域の結びつきにより生まれる新しい産業をトップセールスによって発展させてほしいとの御発言をいただいております。

最後に3番目の設問として、交通ネットワークの整備が産業振興を高めるために取り組むべき課題について、3人の方から御意見をい

ただきました。

豊川市の山脇市長からは、リニア中央新幹線や三遠南信自動車道の整備促進に加えて豊橋駅や浜松駅に停車する JR 東海道新幹線のひかり号の増便を JR 東海に要望していく活動にも期待をしていきたいとの御発言がありました。

田原市の山下市長からは、道路の整備に伴い新しい人の流れが生まれ、当地域を訪れた方々をどのようにもてなすかが大切であり、地域のブランドを確立して、市の魅力をアップしていきたいということを伺いました。

最後に、飯田商工会議所の柴田会頭から、リニア中央新幹線が人と情報、そして三遠南信自動車道がものを運ぶ動脈になる大交流時代の幕開けに向けて、地域の特徴、あるいは強みを生かした産業づくりとともに、地域の産業競争力を高める戦略的な企業誘致、それから地域連携によって産業振興をさらに深めていくことが重要だとの御意見をいただきました。

「技」分科会のまとめとして、本日の論議を踏まえて、次の三つに集約させていただきます。

まず、三遠南信地域に広がる多様な資源、これを生かした地域ブランドを確立するとともに、地域連携の強化によってさらに産業の発展が期待されるということです。

2番目が、三遠南信自動車道やリニア中央新幹線などの交通ネットワークを生かした戦略的な企業誘致、産業振興を進めるとともに、広域連携による未来の成長産業への取り組みも必要であるということです。

それから3番目が、三遠南信地域の産業発展を維持するために、産学官金などの連携によって産業競争力を支える人材の確保、育成及び定着を図る取り組みが重要であるということです。

以上で、「技」分科会の報告とさせていただきます。

■「風土」分科会

コーディネーター／特定非営利活動法人しんきん南信州地域研究所
林所長

今回のテーマにつきましては、民俗芸能、それから自然、ものづくり文化など、三遠南信地域に広がる多種多様な資源を磨き上げることによる誘客の促進などによりまして、いかにして交流人口の拡大を図っていくかについてのものでございましたが、それぞれの発言者の方の本当に熱い思いが伝わり、非常に白熱した話し合いになったものと思います。

最初に報告といたしまして、浜松市の寺田文化振興担当部長から、三遠南信地域の民俗芸能等の文化財を生かして交流人口拡大につなげるという趣旨の「日本遺産登録に向けた取り組み」につきまして御報告をいただきました。その後、各地域で行っている取り組みや他地域と連携した取り組み、そして今後取り組むべき課題について、それぞれのお立場から御意見を伺っております。

まとめといたしまして、まず1点目でございますが、NHK の大河ドラマ「おんな城主直虎」の放映が始まり、非常に好評ではないかと思います。そういう中で経済効果も大いに期待されるところでありますが、これを一過性のものにしないためには、交流人口の拡大、さらなる広域観光の促進を重要事項と捉えて地域が連携を図っていくことが必要ではないかということが1点目でございます。

2点目は、点から面へということです。点

在する資源、地域資源を結びつけるための取り組みを推進していく必要とともに、あわせて担い手、後継者など幅広い世代の人材交流に取り組む必要があると思います。さらには、お祭りあるいは伝統芸能といえども、これからは産業化の視点が必要ではないかということが2点目でございます。

3点目ですが、地域資源を生かすために日本遺産の登録に向けた取り組みがあるわけですが、地域資源についてストーリー性をもってPRしていくこと、行政と地域、あるいは民間が一体となって三遠南信地域全体のブランド力強化及び情報発信をしていくことが重要ではないかということです。

以上、「風土」分科会の報告とさせていただきます。

■「山・住」合同分科会

コーディネーター／一般財団法人野外教育研究財団 羽場理事長

今回の「山・住」合同分科会の与えられましたテーマが、「ひとをひきつける“みち”づくり」でした。まさに「未知（みち）の世界に人を引きつける道筋（みち）をつくる」と理解いたしまして、討議に入っていった次第です。

会議の冒頭には、天龍村で地域おこし協力隊として体験された村澤雄大さんに活動報告をしていただきました。村澤さんと天龍村の皆様が手づくりで天龍村のコマーシャルを制作されたそうです。これが賞を受けたわけですが、見ていてほろっとするすばらしいものでした。

その報告の後、議論に入りました。地域のすぐれた活動、公（おおやけ）がおやりになったこと、それから民間が頑張られたこと、一緒にやったこと、様々な御報告がございました。そしてそれらが、いずれも地域に存在する資源を大事に育てて、そしてないものは、他所からお借りして資源化し、住みやすい地域をつくって、定住してもらうべく努力されておられるという報告がございました。

セッションの最後に、本日の成果を以下の三つにまとめさせていただきました。

1番目は、高齢化、そして人口減少社会にあって持続可能な地域をつくっていくためには、やはりその「地域の人たち自らが頑張って立ち上がってやっていくことが大事」だということの確認でした。地域のもつ資源を様々な工夫して、そして魅力ある資源化を図っていくこと、この住民の自主的自立的過程がないと、ただ素材のまま出してもなかなかうまくいかないということです。

2番目は、そうした資源を活用し、それを学び、楽しみ、働き、安心して暮らすことができる地域を目指すためには、ただ努力すればいいというだけではなく、「情報が重要」ではないかという課題が指摘されました。東栄町長から情報が入らないとのお話がありました。情報を発信する手段もなかなか無いけれども、三遠南信地域の全体が見えるような情報を得て、それらと連携しながら事業化していくこと、働く場所を確保していくことが重要で、そこから産業が生まれて根づかせ育てていくことができるのではないかというお話がありました。

3番目ですが、この地域に長く住んでいくためには、単に魅力があって、雇用があればいいというだけではなく、南海トラフ地震のほか各種災害が想定されるわけですが、それらに対し、「市町村や県境を越えた助け合いが大事」であるということが指摘されました。

具体的な例として、浜松市が所有するヘリを医療や災害のときに融通し合うようなシステムを作ってくださったり、小さな村や町ではお互いに物資や水等の融通をしあう協力関係が進められてきております。

なお、この連携の重要性という問題では、ユニークな御報告がございました。泰阜村長から、鳥獣駆除の問題を出され、せっかく猟師が鹿を追いつめても、ほんの少し県境を跨ぐと別の県の許可が必要となって捕獲できなくなってしまうと。それは笑い話のようでもありますが、実は現場では大変なことです。それ以外にも医療や災害など様々なところで県境の壁ゆえの問題を考えていく余地があるのではないかという趣旨の御意見がございました。

最初の全体会で浜松市長から、これからの議論の中で県を考えてみようという御発言がございました。まだ時期は早いかと思いますが、いわゆる県を越えた許認可の問題等々もこれからの SENA の重要な課題になってくるのではないかと感じられる議論でした。

以上のように「山・住」分科会の結果を三つにまとめて報告させていただきます。

○次回開催地域代表あいさつ

浜松市　鈴木市長

皆様、長時間お疲れさまでございました。今回、大変有意義なサミットの開催ができましたのも、飯田市を初め、関係者の皆様の多大なる御努力、御尽力のおかげと厚く感謝申し上げます。

先ほどのトークセッションで、府県体制が129年間微動だにしてこなかったというお話をしました。これは、この体制がうまく機能してきたことの裏返しであったのではないかと思います。霞ヶ関を頂点としたこの中央集権的な統治構造は、明治以降、実にうまく機能してまいりました。人口が増えていく、あるいは経済が成長していく、社会全体が浮き上がっていくときには国全体を底上げしていくという点では、実によくできた仕組みであったと思います。

しかし、御存じのとおり人口が減っていく、それは取りも直さず地方を直撃するという、我々が今まで体験したことのない時代に突入いたします。地方創生という指針が出されて以来、ここに2、3年、こうした広域連携に対する見方、空気というものがガラッと変わってきたのではないかと思っています。

この三遠南信地域連携という県を越えた連携も、これまではどちらかというと特に法律的な意味づけもなかったものですから、情報交換の場であったり、交流の場であったりという時代が続いてきたと思いますが、私はいよいよこの枠組みに正当性が出てきたのではないかと思っています。あるいは、それを生かして、これからある意味リアリティをもってこの広域連携が進み始めた、実体をつくっていくという新たなステップに入ったのではないかと思っています。

現在のビジョンがいよいよ終了しまして、新たなビジョンを策定する時期を迎えます。その第一歩となるのが、次回の遠州地域での三遠南信サミットとなります。9巡目を迎え、第25回となります。次に一歩高みを目指す第一歩となるサミットにできればと思いますし、先ほどのサミット宣言の中にもありましたように平成30年度内に広域連合の結成を目指すという具体的目標もできましたので、これに向けて具体的な手続きをどうしていったらいいのか、さかのぼって、いろいろな準備手続きも含めた具体的な取り組みの検討段階に入ったのではないかと思っております。

そうしたことも含めて、いよいよ三遠南信地域の広域連携も新たな一歩を踏み出す、新たな時代を切り開くサミットを浜松で開催できたらと思っております。ぜひまた皆様の御支援をよろしくお願い申し上げますとともに、ちょうど今年の秋の開催を予定しておりますが、大河ドラマもいよいよ佳境を迎えている頃だと思いますので、ぜひ大河ドラマ館やまちなか出世の館もお楽しみいただければと思います。

それでは、皆様を浜松でお待ちしております。

第 24 回三遠南信サミット 2017in 南信州では、「“みち”がはぐくむ三遠南信の未来」をテーマとし、産学官のトップリーダーが地域の将来展望を語るとともに、各分科会において現状の確認をし、課題解決に向けた今後の取り組みについて議論しました。

私たち三遠南信地域連携ビジョン推進会議（ＳＥＮＡ）は、時代に見合った官民協働・広域連携の取り組みを進め、地域の一体的な振興、連携ビジョンの実現に向け、本日のサミットでの議論を踏まえ、次の事項に重点を置き、事業推進を図ります。

１　三遠南信自動車道は、地域連携の屋台骨であり、圏域内外の人・モノ・金・情報など様々な対流を促す広域幹線ネットワークの形成に不可欠なものです。また、救援活動、救急搬送時などにも「命をつなぐ道」として、さらに企業活動・観光の活性化など地域に欠かせない社会基盤です。

今後も三遠南信自動車道の早期全線開通をはじめ、リニア中央新幹線の整備促進、浜松三ヶ日・豊橋道路の早期実現、ＪＲ飯田線などの利用促進を目指し、ＳＥＮＡを中心とし、地域一丸となった提言活動などの取り組みを進めます。

２　本地域の特徴的産業である輸送用機器製造業など、既存のものづくり産業の競争力強化や生産性の向上、健康・医療や航空宇宙など成長産業・新産業の創出、6 次産業化などビジネスマッチングの促進など、広域的な産学官金の連携による戦略的な取り組みにより、地域経済の持続的発展を図ります。

また、本地域内の大学、行政、企業との連携により、地域産業の成長を担う人材育成や雇用確保を進めます。

３　三遠南信地域の交流人口の持続的な拡大を図るため、多様な地域団体と十分に連携し、自然、歴史、文化、産物など地域資源を磨き上げ、ＮＨＫ大河ドラマ『おんな城主　直虎』を活かした取り組みを一層進めるとともに、ウェブ上で特色のある地域産品を紹介するなど地域情報発信力を高めます。

また、日本遺産認定に向けた活動を契機とした連携を生かし、無形民俗文化財の保存・継承に向けた取り組みを進めます。

４　三遠南信の中山間地域の資源を活用し、働き、学び、安心して暮らすことのできる地域を目指して、情報発信体制の強化や交流・連携事業の拡大、さらには移住定住に向けた環境づくりに取り組みます。

また、安全・安心な地域づくりに向け、広域的または局地的な災害に対応できる、県境を越える防災の連携体制の強化を進めます。

５　ＳＥＮＡは、これまで行政・経済界・大学・住民の連携により積み上げてきた成果を踏まえ、地方創生時代に対応した新たなるビジョンの策定に取り組みます。

また、三遠南信地域が迎える来たるべき時代の圏域の課題解決に向けた広域連携の強化を図るため、本年度、この地域に適した広域連携のあり方について、ＳＥＮＡ構成全市町村参加による研究会で検討してまいりました。こうした研究会の研究を深化するとともに、その成果を踏まえ、県境を越えた防災対策をはじめ、観光振興、さらには移住定住促進や産業振興といった地域政策の推進母体となる広域連合の平成 30 年度内設置に向けた具体的な検討を進め、真の地方創生を目指します。

これらの取り組みを、ここに集うすべての主体が確認し、第 24 回三遠南信サミット 2017 in 南信州のサミット宣言といたします。

平成２９年２月１５日
三遠南信地域連携ビジョン推進会議
三遠南信サミット 2017 in 南信州

12 交流会

San-En-Nanshin Summit 2017 in Minamishinsyu

■交流会の様子

■観光連携 PR ブース

■観光・地域物産 PR ブース

■長野県阿南高等学校　郷土芸能同好会
「新野の雪まつり」

13 三遠南信地域住民セッション　要旨

San-En-Nanshin Summit 2017 in Minamishinsyu

■開会挨拶

関　京子代表世話人

おはようございます。朝早く遠くから御苦労さまでございます。本日は好天気に恵まれて本当に良かったです。今年も良い成果が得られるように皆さんの御協力をお願いいたします。

昨年のサミットの折、静岡県立大学の須田先生からこの三遠南信には素晴らしい民俗芸能があり、国で保護する必要もあるくらいだとお聞きして私たちも胸を張っております。

そこで、大切なお祭りの伝承について後継者や経済的な問題として大きく取り上げられていますが、食文化については全然取り上げられていませんでしたので、お祭りと同時に伝承していくべきではないのかと私たち南信州交流の輪では祭りと食文化を融合したイベントを実施して4年目になります。

新野の祭り街道のネーミングを使わせていただき、新野の雪まつりの御膳やお弁当は「はつはる」として、坂部の冬祭りは「神楽舞」としてお上がりいただいてきました。

本日はお昼に雪祭りの「はつはる」弁当を作りましたのでお上がりになってください。各地のお祭りと食文化も同時に伝承されるようになれたら良いと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

■第1部　協議会事業中間報告

矢澤律子世話人

1. 世話人会の開催

※三遠南信地域住民団体連携事業事業費補助金（世話人会開催事業）

(1) 実施日／2016年4月27日（東栄町）、6月2日、7月12日、9月28日、11月15日、3月にも実施予定

(2) 場　所／阿南町役場新野出張所（阿南町新野1495-1）

(3) 内　容／サミット住民セッションの企画、連携事業の企画、進捗状況の把握、今後の展開策の検討

2. 活動のマッチングの場づくり

(1) 三遠南信地域の住民団体による連携活動を通した協働を進め、地域資源の活用や継承、再発見するための研修事業

①実施日・場所

2016年6月25日(土)
新城市四谷地区千枚田
2016年9月3日(土)
阿南町和合地区

②内　容／会員の活動地域を相互に訪問し、交流団体の活動拠点において地域資源を活用した活動に参加し、活動内容と活用方法を学ぶ。

(2) 特産品のブランドづくり現地見学ツアー※三遠南信地域住民団体連携事業事業費補助金

①実施日・場所／2016年10月7日（金）
阿智村南信州機能性食品工場あちの里

②内　容／三遠南信の特産品の生産地に公募した地域住民とともに出かけ、生産者からの話を聞き、地域の魅力の広報に努める住民啓発イベント

3.連携プロジェクト推進に向けた取組

(1)街道を通じた地域資源連携プロジェクト

内　容／伝統芸能などの祭りをコンセプトに、高速道路や国道、県道などの街道をつなげて道の駅を拠点としたネットワーク化など。本年度は、浜松河川国道事務所から「平成 28 年度 三遠南信地域祭り街道資料作成業務」を受託した。調査対象範囲は遠州地域から新城市・東栄町・豊根村へと拡大した。主な事業内容は、道の駅を活用した祭り街道の広報資料（マップ等）の作成である。

※詳細は、第 2 部で NPO 法人地域づくりサポートネットから説明する。

(2)アート街道プロジェクト

①実施日・場所／
2016 年 7 月 8 日（金）
とよはし穂の国芸術劇場 PLAT
2016 年 8 月 12 日（金）
豊橋市民文化会館

②内　容／三遠南信地域の文化情報発信の一環として「志多ら」公演の開催協力と公演会場での三遠南信地域の PR 活動

4.会員相互の交流会

三遠南信住民ネットワーク協議会総会や三遠南信サミット住民セッションなどを通じて、会員相互の情報交流の場を設けた。また、住民団体の事業に対して協議会が積極的に協力団体等となり、事業の PR や参加の呼びかけを行うために、公式ウエブサイト上で随時情報発信した（URL:http://sen-jna.jimdo.com/）

5.三遠南信サミット 2017in 南信州住民セッションの企画準備、開催およびサミットの分科会に住民団体として協力

(1)実施日・場所／2017 年 2 月 15 日（水）
飯田文化会館およびシルクホテル

(2)内　容／
第 1 部　事業中間報告
第 2 部　全体討議
第 3 部　祭り街道弁当の昼食会

6.三遠南信住民ネットワーク協議会の財源確保

(1)SENA 補助金事業に申請し、活動費の助成を受けて事業を実施した。

(2)国土交通省の委託事業を受託した。

■第 2 部　全体討議

進行　福沢千恵子世話人

これから発言される 8 人の方の発言内容は、本日午後の三遠南信サミットの分科会でもしっかりと伝えていただきたいと思いますので、特に伝えていただきたいことがあれば発言を聞いたうえで補足してください。

1.分科会での発言内容報告

「道」分科会

座光寺地域自治会相談役　湯澤英範

座光寺を取り巻く交通インフラは、画期的な整備がされます。2027 年開業の「リニア中央新幹線の駅」が、歩いて 15 分以内の所に設置されます。さらに、リニア開業に向け、「三遠南信自動車道」の建設が着々と進められています。また、中央自

動車道の座光寺パーキングとリニア駅を結ぶアクセス道路が新設されると共に、国道153 号が 4 車線に拡幅され、利便性が飛躍的に向上し、まさに、三遠南信の交通の要衝に大変革します。

「座光寺の宝物」とは、古墳時代から近世までの各年代の貴重な「歴史資産」と「豊かな自然景観」があります。

「恒川官衙遺跡」につきましては、平成26 年 3 月に国の史跡指定された奈良・平安時代の郡役所の跡で、東山道を使っての東西文化の結節点として、重要な役割を果たしたと言われています。出土する「硯」の多さから、事務量の多さが推定されており、また、地方ではほとんど出ていない日本最古の貨幣「富本銭」などが出土しており、「都」との深いつながりがあったとされる貴重な遺跡です。

「高岡第 1 号古墳」につきましては、平成 28 年 10 月に国の史跡指定を受け、当地域最大の「前方後円墳」で、6 世紀前半に築造されたものと推定されております。

麻績学校校舎一帯は、4 施設がまとまっており、それぞれ個々に魅力を秘めているうえに、一帯の佇まいは日本の原風景を彷彿させる癒しの場でもあります。

そこで、これらの宝物を活かして「2000年浪漫の郷づくり」と称して取り組んでいる活動の様子を紹介します。

まず活動は、「座光寺地域自治会」傘下の「2000 年浪漫の郷委員会」が主体となり運営されており、地域の歴史資産などを活かして、地域外から訪れる人々が回遊し、安らぎや癒しを求める場として、地域の魅力を発信していこうと、地域づくりを進めています。

現在、飯田市では「恒川官衙遺跡」の保存活用の基本計画を策定中で、その中で史跡公園やガイダンス施設の整備のあり方を検討しています。そこで、地域としてどのような整備を求めていくかを議論し、住民意見をまとめているところです。

この恒川官衙遺跡は、「2000 年浪漫の郷構想」の中核施設となるだけに、住民の思いを強く行政に働きかけていきたいと思っています。具体的な取組はボランティア活動として、遊歩道の建設、花木の植栽、ゴミ拾い、草取りなどのほか、史跡広場取得に向けた寄付金活動、学習会も行っております。今後は浪漫の郷の回遊ルートや街並みの在り方の検討、さらにはイベントや学習会の開催、案内ボランティアの養成など多岐にわたるほか、これらの活動を推進するためにNPO法人化の検討もしています。

今後目指すものとしては、この構想を着実に実現するためには住民自身が地域の宝を十分認識し、行政と連携して学習活動などを行い、地域に根ざした地域全体での取り組みを心がけて参りたいと思っています。

その上で、2000 年浪漫の郷の魅力を南信州地域と連携してインターネットなどを駆使して国の内外に情報発信し交流人口の増大を目指して地域の魅力アップにつなげていき、それがやがて「住んでみたい地域」にもつながるものと確信しています。

NPO 法人浜名湖クラブ理事　小林　昇

静岡県西部の遠州地域にはマリン産業界における世界一の湖、浜名湖があります。概略を申し上げれば、浜名湖には世界企業であるホンダ、スズキ、ヤマハ等が約半世紀にわたり開発基地を設け、浜名湖で開発されたマリン機器の世界の市場占拠率は約 65%前後を占めております。また、世界的な水上の乗物として 150 か国で活用されている水上オートバイの誕生地でもあります。

浜名湖クラブでは、浜名湖ロマンという説明をしております。地図を左に 90 度傾けますと人の顔が浮かんできます。浜名湖が目、渥美半島が鼻、三河湾が口になります。三遠南信地域はその中心になります。三遠南信地域の周囲に黄色い枠がありますが、これがいわゆる日本で言われているパワースポットです。その中心が浜名湖であり、三遠南信なのです。浜名湖は目にあたりますから先をよく見ることができるということでホンダ、スズキ、ヤマハ、トヨタもそうですし、中世は秀吉や家康も浜名湖から育っているわけです。下伊那はちょうどこの顔の耳にあたるところです。日本でも有数な果実のなるところです。口のところは日本でも有数の調味料の産地であったり、場所によって産地が決まるというそういう話を浜名湖ロマンではやっております。

現在、浜名湖の南側には、JR の駅が 3 駅（鷲津、新居町、弁天島）あります。北側には天竜浜名湖鉄道が通り、湖面に隣接した駅は約 10 駅あります。そして東名高速道路や国道 1 号が通っております。

この浜名湖の湖岸において、陸上と水上とを結びつける交通ネットワークはほとんど存在せず、観光や産業に生かせていないのが現状であります。水上交通を活用した駅と道路とのネットワーク作りが必要であり、湖岸の整備や定期船の発着はもとより、特に不定期船として水上タクシーの運用が極めて重要と考えられます。こうした交通ネットワークを作りたいと考えます。

もう一つ水辺というと天竜川があります。天竜川は信州と太平洋側の都市を最短で結ぶ“水上の道”であり、科学技術が向上した現在、交通の観点から再度見直す地域と考えます。例えば、海外では浅い渓流域でも多数の人を運べるジェットボートも稼働しており、空飛ぶゴムボートもあります。水面の水だけでなく上部の空間領域を利用した交通を考えることも大切です。また、ダム区間には“川の駅”を造り、その間をバス運行で繋げ、観光と産業の道として、“水上の道”の活用を今後考えていきたいと思います。

「技」分科会

サンガラトナ　大島たまよ

伝統文化と手仕事の技というところから、これから取り組む再生可能なエネルギーや、伝統と未来の融合とか経済と環境の融合などを、持続可能な社会の構築をキーワードに語ってみたいと思います。

浜名湖ロマンの語る顔というのをはじめて見させていただいたのですが、「天狗」だと思いました。天狗は三遠南信地域には馴染みの深い存在でして、私は民俗学で山姥とか天狗などの異形な物語を扱っています。その中でも天狗の果たす役割はこの地域に大事なものです。これをキーワードにして技を語っていけたら、これも宝のなかに入るのではないかと思っています。

また、私は葛布を製作しており、18 年目になります。葛布は遠州地域で伝統的な工芸品ですが、その存在も今は風前の灯となっています。また葛布の関係から、南信地域で製作されていた藤布にたどり着きました。今は藤布も学んでいます。このような地域の宝としての伝統文化を繋ぐ活動と、これに並行して再生可能な事業もこれから立ち上げていく予定です。天竜区の茶畑の再生をめざしておりますが、ただ農業を継げばよいというわけでは無く、次の世代に向けてどういう形で農業を作っていったらよいかが課題であると考えます。今度始めるのは茶畑のソーラーシェアリングという事業ですが、これは茶畑の上にソーラーパ

ネルを設置し売電をしてお金を得るだけではなく、パネルの支柱が抹茶にする茶葉を作る碾茶の幕を張る支柱にもなり、農家の作業を軽減すると同時に茶葉の生育を助けます。現在は茶葉を抹茶として売るために生産するということを考えています。抹茶は世界的に需要が高まっています。国内販売だけではなく、海外に目を向ける必要があります。海外からの需要はというと、日本茶はヨーロッパ基準に照らし合わせると農薬の基準が合わないそうです。そこをクリアするために無農薬栽培の抹茶の生産を心がけています。ソーラーシェアリングする茶畑のある地域の活性化にも取り組んでおり、地域の人の理解を得るとともにそこの地域住民とともに発展していこうという活動に取り組んでいます。

奥三河自然と歴史にふれあう会
加藤博俊

産業振興についてということで観光産業に関する設楽町の事例を報告したいと思います。

私は 25 年ほど前から設楽町で観光ボランティアガイドをやっております。設楽町は愛知県の北東部にあります。面積は大きいが、人口は約 5000 人であり、過疎少子化が進み限界集落も増えています。設楽町はほとんど山の中に小さな集落があり、山からは豊川の源流があります。豊川の 1 滴は設楽町から流れています。自然は豊かだが人は非常に少ないという町です。わずかながら田んぼがあります。おいしいお米はできるが量は少ない。

設楽町の中心地が田口というまちです。ここに生活上必要なものはすべて揃っています。これほどアクセスの整った町はほとんどないではないかということですが、過疎化をとめることができない状態です。

設楽町のシンボルといえば、ブナの原生林があります。シャクナゲもあります。日本一のオシドリの飛来地でもあります。花祭は東栄町が有名ですが、設楽町にもあります。伝統芸能として田楽祭もあります。この二つは国の重要無形民俗文化財になっております。私たちの活動は設楽町に残されている自然を生かす、これを産業に結びつけるということで 130 ヘクタールのすごい原生林です。地元の小学校全員が取り組んで個人で所有してブナの森を作っております。この活動が 18 年続いています。3.5 町歩のブナの森ができています。楓から樹液を子供たちがとって飲んだりして体験をしています。樹液は国産メープルシロップになり設楽町の特産ということで 3 年前から販売しております。ラスクなどお菓子にも利用され、土産品として販売しています。

もう一つは近くにダムがあり、ダム湖の周囲が 15 キロメートルあります。湖畔を利用して大きな活動が芽生えてきたところです。民間でたてられたレストランで、赤字を補てんするためにほかのことをやっているのですが、連携という形をとり、5 年ほど前から観光バスがたくさんやってくるようになりました。山の中で何をやるかというと、シイタケ狩り、音楽会、探鳥会、縦笛演奏などで、名古屋の大学生が参加してくれています。今年からは、役場と連携をして原生林の横にビジターセンターをつくって、このセンターを利用してボランティア活動を会社組織にしていきたいと取り組んでいます。行政と民間で連携し産業で盛り上げようという活動をしています。

質疑応答要約

●ソーラーシェアリングは 3 年前農林水産省の補助金をもらい立ち上げた。研究段

階では 6 か所各 50 キロメートルで 300 キロワットを計画しており資金面で苦労した。今週くらいに資材が届き 3 月には設置をして 4 月から実際稼働するのは 3 か所で 150 キロワットである。

●農業委員会の許可もいただきながら行っている。

●ビジターセンターは町営になる。ボランティア組織は、やがてそれを民間の会社として雇用を増やしていく。軽井沢方式を取り入れた。将来的には愛知県の軽井沢ということで軽井沢構想がはじまる。

「風土」分科会

天龍村柚餅子生産者組合 組合長

関　京子

この三遠南信の豊かな自然と文化、深い歴史にはそれぞれに恵まれている地域で胸を張って生きているところです。しかしながら、住んでいて大変なことは過疎で人がいなくなっていくことです。せっかく日本の原風景ともいわれる素晴らしい所なのに後継者不足や経済的な問題もこの山間地域の共通の悩みで高齢と共に農業もできなくなっています。問題解決には一体となりスクラムを組んで対応していく事だと思います。

今、各地域に協力隊という若い人たちが来てくれています。若い人の力は大きいので元気が出ます。神子になってお祭りを支えてくれる人もいますが、3 年でこの地に住める力をつけるのは大変です。なんとか生活していけるように育ててやらないと昔からの生きる知恵を伝え、体験を受け入れ、また若い人からも新しい目で見えるものを教えてもらい、一緒に地域のことを考えていけると良いかなと思います。天龍村には本当に良い娘や息子のような協力隊員が来ています。

伊那谷ではあと 10 年足らずでリニアも通るようになり交流の窓口がぐーんと大きくなり、都会の人だけでなく外国人も受け入れるようになると思います。観光の面では、三遠南信の良さをしっかりと情報発信できるように、学習もして、語学も身につけ、外国語のパンフレットも制作するなど受け入れ態勢を整えることも必要かと思います。

三遠南信住民ネットワーク協議会の作った『三遠南信ここが楽しい事典』祭り、駅&城跡、道の駅&温泉、特産物、花街道をテキストに交流を深めることができました。この地域以外の方にもお求めいただき、御利用くださったとのお話もありました。

また、この地域の重要無形民俗文化財としてのお祭りは多くの皆様に知っていただく機会はありましたが、お祭りと関連する食文化は全然取り上げられてなかったのです。今私たちが伝えるべきだと思い、祭りと食文化を融合させたイベントを実施してきました。「新野の雪祭り」の実演・解説に「はつはる」御膳とか弁当として、「坂部の冬祭り」は「神楽舞」御膳とか弁当としてお上がりいただいてきました。浜松、豊橋、東京からも多くの方がお越しくださいました。

時季の物をいただくということは、神様だけではなく人間にも健康的であり、信仰にもつながり良いことで、東京の銀座 NAGANO でも大変好評で、今多くの人が求めていることがアンケートからもわかりました。この三遠南信地域でも県境を越えて祭り街道御膳や弁当ができ、組織づくりができることを願っています。

合唱劇「カネト」をうたう合唱団
清水良文

合唱劇「カネト」をうたう合唱団は結成から17年になります。各地で公演を行ってきました。合唱劇の内容はJR飯田線の歴史です。今日も、新城から飯田線に乗って2時間半から3時間くらいかけて飯田へ来ました。飯田線の歴史はなかなか知られていません。昭和初期、三河川合から天竜峡間を川村カ子トさんが測量し、門島と天竜峡間の一部工事を行いました。カ子トさんはそのときに現場監督をやっていて、ともに働いていた作業員から埋められそうになってしまうという史実です。その現場となったトンネルも残っており、今日はそこを通ってきました。

この合唱劇「カネト」は、2000年に初演し、2007年に飯田文化会館、2008年にはカ子トさんのふるさとである旭川でも公演行いました。

2016年6月の水窪公演では、飯田カネト合唱団とともに水窪小学校と城西小学校の全児童との共演が実現し、水窪の山間に歌声がこだましました。初演から16年間カネトの合唱劇を通じていろいろな人たちと交流を行ってきています。ただ三遠南信の三大都市の浜松市市街地でやっていないのです。ぜひやりたいと思っていますので、御協力をお願いしたいと思います。

この合唱劇「カネト」は、飯田線の話だけでなく、アイヌ民族への差別と偏見に屈しない精神力をもって仕事を成し遂げたカ子トさんの生きざまを表現しています。私たちが次の世代に受け継いでいかなくてはならないテーマだと思っています。ローカルな飯田線のテーマだけではなくて交流を深めながら次の世代に受け継いでいくことが大事だと思っており、これが「交流人口の拡大への取り組み」だと思います。この飯田線の歴史を後世につないでいかなくてはいけない。その手段として、この合唱劇「カネト」という舞台劇でつないでいきたいと思っています。

質疑応答要約

- JR 飯田線の車掌にカ子トは知っているかと聞いたら知らなかった。PRが必要だ。
- 祭りにきてくれるのはよいが、取り持ちが破産してしまう。これが現実であり、伝承文化を守るということは大変なことである。一方、盆踊りを太平洋戦争中もめげず続けてきた魂もある。
- まだ力があるうちに、多方面の力を借りて三遠南信がひとつになれるような組織づくりができたらよいと思う。

「山・住」分科会
夢工房・左閑辺屋組合事務局長
平松雅隆

天龍村の最南端、愛知県と長野県の県境にある坂部からきました。9年前に廃校となった建物を地域活性化施設として利用し、「夢工房・左閑辺屋」で活動をしています。私どもの坂部地域はお祭りが盛んなところです。5度の祭りといって年間5回、だいたい2か月に1回くらいお祭りをしています。「坂部の冬祭り」は、「熊谷家伝記」によりますと、正長元年(1428年)に熊谷直吉が館を現在の地に移転した時に夢占いによって始めたと記されています。冬至の季節における生命復活の祈りであります。もともとは12月でしたが、現在は1月4日です。

このように人々は、お祭りを根っこの部分にしっかりとおいて暮らしてきました。私も学校を卒業して一度地域外で暮らしま

した。その時も1月4日には必ず帰ってきました。1回だけ用事で出られなかった時がありますが、その年はなんとなくおかしい。今も若い人たちは地域外で暮らしていますが必ず祭りには帰ってきます。この祭りが人々の心にしっかりと根づいています。

その流れの中で、「祭りと食」をテーマに南信州交流の輪で「祭り街道フェア」を行ってきました。平成26年11月に阿南町にある温泉「かじかの湯」で竹の器を使って料理を80名分作りました。竹の器を作るのに、竹を山から切り出すのが非常に大変な作業です。切り出した竹を寸法通りにカットし、煮沸し、磨いて天日で3日か4日くらい干します。銀座NAGANOでのイベントでは、竹の徳利を作りました。この徳利の色はきれいな緑色で、冷凍庫に入れて保存すると1、2年はこの色が保てます。

夢工房では地域おこし協力隊の皆さんと一緒にいろいろなイベントをやってきました。ほくほく芋煮会、坂部の特産やつがしらを掘って芋煮会をしました。この時は浜松から若い人たちが30、40人来てくれました。お祭りとか自然とかに興味をもってくれる若者が最近増えたなあと感じます。今後、自然の恵みをいただき、地域内で現金収入を得たいと考えています。

愛知大学綜合郷土研究所　平川雄一

東三河交流ねっとという組織があります。三遠南信住民ネットワーク協議会の地域連携組織の東三河支部です。この交流ねっとで企画を運営している事業として「三遠南信研修交流会事業」というのがあります。2015年度からはこの事業を本協議会の事業に盛り込んで実施するようになりました。

事業内容や目的は、中山間地域を中心に東三河、遠州、南信州の活動団体を訪問し、そこで活動されている方の活動内容やその地域の地域資源などをみんなで再発見し、再評価するために訪問団体の活動を一緒に体験します。そして意見交換して、お互いの今後の活動に活かすことをねらったものです。

この事業を2013年度に始めてから4年目になります。年間におおむね東三河、遠州、南信州の3地区1団体ずつその地域内へも訪問しています。今までに南信州では遠山郷、阿南町和合、天龍村坂部、遠州では浜松市浜北区、天竜区水窪、東三河は豊橋市や新城市を活動拠点とする会員らを訪ね、研修と交流事業を実施しました。

研修中の意見交換では、地域資源の新たな発見だけではなく既存の地域資源をどうやって活かしていけばよいかという意見が出ました。すぐに答えが出ることではありませんが、今までとは違っていたり、気が付かなかった見方や考え方も示しながら、地域資源の掘り起しや再評価につなげていくことを双方が実感してもらえるような取り組みになっていますので、大変意義のある活動を進めていると考えています。

中山間地域では、人口減少と高齢化が進んでいます。我々三遠南信で活動する住民団体同士がきちんとこれらの問題や課題を認識し、これからもこの活動を続けていかなくてはならないと思います。

質疑応答要約

●竹の器の注文は10セットか15セットが限度で制作期間は2週間程度かかる。竹は虫がつくので、11月以降に切って冷蔵庫にて保管している。

3. まとめ

南信州交流の輪　福沢千恵子

「道」分科会

・歴史資産や豊かな自然を地域住民が認識する中で行政と連携することの必要性

・水上の道をいかしたまちづくりのなかで「浜名湖ロマン」構想の実現化

「技」分科会

・中山間地域の生業や生活に根差した伝統文化の継承と生きた技の発信

・中山間地域と都会との交流を生かした行政との連携組織の構築

「風土」分科会

・歴史・文化・暮らしを守る三圏域の統一目標の提案

・人々の思いを若い人へ伝承する交流や人材育成の必要性

「山住」合同分科会

・自然素材を活用しての収入源の可能性

・協働による地域資源の掘り起こしや活用方法の実践づくりの体制づくり

4. 前回住民セッション後の経過報告と会員からの報告

NPO 法人地域づくりサポートネット
山内秀彦

平成 27 年度に祭り街道の基礎調査ということで、遠州地域の中部地方整備局浜松河川国道事務所の委託事業として NPO 法人三遠南信アミを中心に取り組んでいただきました。平成 28 年 7 月、東京における三遠南信道路建設促進期成同盟会総会の折、道の駅において祭り街道の情報を発信したいということと、高速道路・自動車道の整備効果促進をシーニックバイウェイの活用という形で、三遠南信地域の祭り・自然・文化などを紹介し地域をめぐってもらうことをやっていきたいと。28 年度は遠州をモデル地域にして目に見える形のものにするということで「祭り街道マップ」を現在制作中です。三遠南信アミの水島さん、東三河地域の平川さんに企画編集をお手伝いしてもらいながら進めてきました。遠州と奥三河の一部が浜松河川国道事務所の管内ということです。これを三遠南信全域にひろめてほしいと、各地域の国土交通省の関連部署にお願いしました。今後、各地域の方々がそれぞれの部署に要望していただき、祭り街道弁当もこういったところに紹介していくとか住民ネットワークの取り組みも紹介し、道の駅でも発信していきたいと考えています。現在はそのモデルを作って広めていくということです。平成29年3月に終了しますので次なる展開を仕掛けていかなくてはならないので、よろしくお願いいたします。

NPO 法人三遠南信アミ　水島加寿代

上記に関する補足ですが、「祭り街道マップ」は予算の都合で遠州エリアが中心になっていますが、祭り街道をもっと三遠南信地域外から来る人に伝えたいというのが取組みの狙いです。今後は、さらに国土交通省に働きかけて三遠南信全体の取組みになっていくと思いますので、アイディアを寄せていただきたいと思います。

直虎は引佐を中心にしたドラマで、今年で終わりますが、連携した取り組みは、今年で終わらせず、高森の松源寺、三河の鳳来寺、御前崎方面まで、まさに三遠南信地域の文化が直虎につながっています。これをきっかけにあらためてこの地域の魅力を

発信し、三遠南信地域が「心をひとつ」に取り組んでいけば地域の魅力をより一層発信できると思います。

愛知大学綜合郷土研究所　平川雄一

JR 飯田線を積極的に PR していこうと飯田線をテーマにした「飯田線マップ手ぬぐい」が販売されます。駒ヶ根や飯田の方が中心になって考案されました。現在、販売に向けて準備・制作中で、2017 年 4 月中旬の発売予定です。現在特別価格にて予約受付中（https://iidasen.jimdo.com/）ですのでみなさん、ぜひ予約をお願いします。この取り組みについては､「三遠南信住民ネットワーク協議会」も協力団体として団体名を予約チラシに掲載してもらいました。JR 飯田線と「飯田線マップ手ぬぐい」の PR に協力しながら、三遠南信住民ネットワーク協議会の団体名も覚えてもらおうという狙いもありますので、みなさんの協力もお願いいたします。

天龍村柚餅子生産組合　関　京子

先ほど大島さんのお話の藤布とか葛布は、昔神様に出るときに着る上着にしたものです｡今でも残っている所もあると思います。そして、祭り街道が豊橋から飯田まで国道 151 号とともにつながるようにぜひ御協力をお願いいたします。

奥三河自然と歴史にふれあう会
加藤博俊

後継者は、活動を続けていれば自然とできてきます。設楽町では多くの後継者が育っています。若い人たちは連携していろんな活動をしています。都会からきたときにゆっくりしたい、休みたい、泊りたい、その場がない、近くの空き家を開放してもらい自由に泊れるようにしたい。そのように自炊をして泊っていく施設ができつつあります。後継者不足は困ることばかりではなく、こういう形で若い人たちがすごく頑張っています。

NPO 法人三遠南信アミ　中野　眞

いろんな地域の宝物を多くの方に巡っていただきたいと思います。私の自宅がある磐田市から飯田まで来るのに車で新東名高速道路から三遠南信自動車道を利用し、東栄駅に車をおいて JR 飯田線で来ました。三遠南信道路ができて浜松をはじめ遠州地域と奥三河、南信州が近くなっていることを実感しました。三遠南信地域をめぐる一つの方法かなと思います。

■閉会挨拶

NPO 法人地域づくりサポートネット
山内秀彦

南信州の皆さん、本日は準備等いろいろありがとうございました。いろんな地域で活動している話をこのあとのサミットの分科会でもしっかり伝えていただきたいと思います。次回のサミットが遠州ということで、そろそろ 5 巡目に入ります。だんだん形にしていく時期に入っているかなと思います。次のサミットに向けて交流や情報公開をしていきたいと思います。今日は朝から住民セッションへの御参加、御苦労様でした。

三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）
浜松市中区元城町103－2
浜松市企画調整部企画課内